鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅶ

（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）

雪山遺跡（日置郡東市来町）
猿引遺跡（日置郡東市来町）

2003年３月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

雪山遺跡　出土の土瓶・蓋

雪山遺跡　出土　窯道具

雪山遺跡　出土　薩摩焼

雪山遺跡　出土遺物（1）

雪山遺跡　出土遺物（2）

雪山遺跡　出土遺物（3）

雪山遺跡　出土遺物　ガンギ

雪山遺跡　土坑３内　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ゆきやまいせき　　さるびきいせき
書名	雪山遺跡・猿引遺跡
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	53
編著者名	宮田洋一・関　明恵・三垣恵一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1　TEL0995-48-5811
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ゆきやまいせき 雪山遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 ひがしいちきちょうやまおか 東市来町美山字 ゆきやま 雪山	463621	29－90	31° 38′ 26″	130° 21′ 16″	確認調査 20000619 ～ 20000623 本調査 20000626 ～ 20000825	68㎡ 2,700㎡	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設
さるびきいせき 猿引遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 ひがしいちきちょうながさこあざ 東市来町長里字 さるびき 猿引	463621	29－91	31° 38′ 26″	130° 21′ 13″	確認調査 20000508 ～ 20000512 本調査 20000515 ～ 20000620	153㎡ 800㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雪山遺跡	散布地 生活跡	旧石器時代ナイフ形石器文化期 旧石器時代細石刃文化期 縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代後期 古墳時代 近世～近代	集石　2基 炉跡　1基 土坑　3基 焼土域　1か所 ピット	剥片尖頭器 細石刃核・細石刃 前平式土器 打製石鏃・磨石・敲石・石皿 春日系土器 土器 成川式土器 陶器・染付・窯道具・焙烙・陶製土錘・陶製人形・鉄製品・石臼・砥石	調査区外には遺跡が残存
猿引遺跡	包含地	旧石器時代 縄文時代	礫群　1基	剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパー・剥片・石核 曽畑式土器・磨製石斧・磨石・敲石	調査後の遺跡は消滅

遺跡位置図（1／25,000）

序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した雪山遺跡・猿引遺跡の発掘調査の記録です。

これらの調査によって，旧石器時代や縄文時代，近世～近代など各時代の遺構・遺物が発見されました。

雪山遺跡は，縄文時代早期前葉の遺跡の立地や，薩摩焼の生産地として名高い苗代川の生活史の一端を知る上で貴重な遺跡であると思われます。猿引遺跡は，旧石器時代の遺跡の立地を考える上で貴重な発見となりました。

本書が地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として，多くの方々に活用していただけることを願っています。

なお，この発掘調査を実施するにあたって，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に多大なご協力と文化財に対する深いご理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成15年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　井　上　明　文

例　言

1　この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）に伴う「雪山遺跡」「猿引遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所）の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3　整理および報告書作成作業は，平成13年度に猿引遺跡，平成14年度に雪山遺跡を県立埋蔵文化財センターにおいて実施した。
4　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。なお，レベル数値は雪山遺跡・猿引遺跡とも日置郡東市来町字美山に所在する水準点を基準として利用した。
5　本書の遺物番号は，遺跡ごとの通し番号とし，すべて本文および挿図・表・図版のものと一致する。
6　発掘調査において，東市来町教育委員会の協力を得た。
7　発掘調査における実測，写真撮影等は宮田洋一・三垣恵一が，整理作業における遺構・遺物の実測，製図等は宮田・関明恵・三垣が分担して行った。
8　遺物の写真撮影において陶器については，独立行政法人奈良文化財研究所の牛嶋茂氏，その他の遺物については県立埋蔵文化財センター鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎の協力を得た。
9　各執筆分担は次のとおりである。

第１章・第２章	三垣
雪山遺跡	第３章第１節～第３節１（１）・（２）②，２（１），第４節
	第４章第１節　三垣
	第３章第３節１　（２）①，第４章第１節　寺原
	第３章第３節２（２）・（３），第４章第３節　関
猿引遺跡	第３章　宮田洋一・三垣
	第４章　牛ノ濱

10　「雪山遺跡」の発掘調査にあたっては，佐賀県九州陶磁文化館資料係長　家田淳一氏の現地指導をいただいた。また，出土遺物については，鹿児島大学法文学部助教授　渡辺芳郎氏，琉球大学法文学部教授　池田榮史氏，苗代川民陶館の鮫島佐太郎氏，鮫島寿郎氏，鹿児島陶磁器研究会事務局長関一之氏の指導・助言をいただいた。
11　各遺跡の石器の実測・製図および雪山遺跡の磁器，陶器の一部の実測・製図については，株式会社九州文化財研究所（旧文化財環境整備研究所）に委託した。
12　本書の編集は宮田洋一・関・三垣が分担して行なった。
13　各遺跡の出土遺物・図面・写真は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管・活用する。

凡　例

近世以降の遺物観察表内の「出土区・層」については，次の区分で記載した。（第18図参照）

1…1エリア
2…2エリア（造成面1）
3…3エリア（造成面2）
4…4エリア
C－3土抗2…土抗2内出土遺物
一般遺物と同じ様相を示すため，遺構内遺物としては取り扱わなかったが，抽出できるようにした。

近世以降の陶磁器の器類，器種，器形などの分類は，『四谷三丁目遺跡』別冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」1991新宿区四谷三丁目遺跡調査団，『九州陶磁の編年』2000九州近世陶磁学会を参考にした。なお，分類の細部においては地域性や民俗例を考慮して独自の分類とした。

【陶磁器】

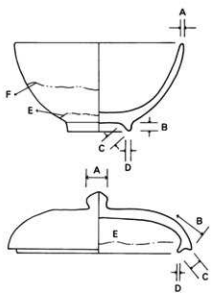
碗　類　・小坏（口径50㎜未満）
　　・小碗（口径50㎜以上90㎜未満）
　　・中碗（口径91㎜以上145㎜未満）
皿　類　・小皿（口径三寸～四寸前後）
　　・五寸皿（口径五寸前後）
甕　類　・中甕（器高12.0㎝～30.0㎝未満）
　　・大甕（器高30.0㎝以上）
壺　類　・小壺（器高12.0㎝未満）
　　・中壺（器高12.0㎝～30.0㎝未満）
　　・大壺（器高30.0㎝以上）
瓶　類　・徳利
　　・雲助徳利
　　・カラカラ
　　・仏花器
器台類　・高坏
【窯道具】　コマ・チャツ・ハマ・サヤ鉢・トチン

鉢　類　・小鉢（口径五寸未満）
　　・中鉢（口径五寸以上八寸以下）
　　・大鉢（口径九寸以上）
　　・擂鉢
　　・練鉢
　　・ソバガキ
　　・香炉
　　・灰吹
　　・火鉢
　　・灯明部武具
　　・植木鉢
水注類　・土瓶
　　・水注
　　・急須
鍋　類　・土鍋
釜　類　・羽釜

本書で用いる近世以降の陶磁器についての基本的名称は以下の通りである。

【碗】
A　口唇部
B　高台脇
C　高台内
D　畳付
E　一次施釉線
F　二次施釉線

【蓋】
A　つまみ
B　肩部
C　見受け部
D　口唇部
E　施釉線



本文目次

序文
報告書抄録

はじめに……1
　第1節　調査に至るまでの経過……1
　第2節　遺跡の概要……1

第1章　発掘調査の経過……6
　第1節　調査に至るまでの経緯と経過……6
　第2節　調査の組織……6
　第3節　調査の経過……8
　第4節　整理作業の経過……10
第2章　遺跡の位置及び環境……12
　第1節　地理的環境……12
　第2節　歴史的環境……12
　第3節　周辺遺跡……13
［雪山遺跡］
第3章　雪山遺跡の発掘調査……17
　第1節　発掘調査の方法……17
　第2節　遺跡の層位……18
　第3節　発掘調査の成果……20
　第4節　調査後の遺跡概要……131
第4章　まとめ……132
　第1節　縄文時代の遺物について……132
　第2節　近世・近代の遺構について……133
　第3節　近世・近代の陶磁器から見た遺跡のまとめ……134
［猿引遺跡］
第3章　調査の概要……175
　第1節　発掘調査の方法……175
　第2節　遺跡の層位……176
　第3節　旧石器時代……179
　第4節　縄文時代……193
第4章　まとめ……196

[雪山遺跡]挿図目次

第１図　伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間遺跡位置図……5
第２図　雪山・猿引遺跡周辺地形図……11
第３図　周辺遺跡位置図……15
第４図　グリッド配置図……17
第５図　基本土層図……18
第６図　土層断面図……19
第７図　縄文時代調査範囲及びトレンチ位置図……20
第８図　集石１・２号……21
第９図　土器の集中箇所……22
第10図　縄文時代早期前葉土器出土状況……23
第11図　石器出土状況……24
第12図　縄文土器(Ⅰ類)……25
第13図　縄文土器(Ⅰ・Ⅱ類)……26
第14図　縄文土器(Ⅱ類)……27
第15図　縄文土器(Ⅲ～Ⅴ類)……28
第16図　石器(1)……30
第17図　石器(2)……31
第18図　遺構配置図及び調査区分図……33
第19図　炉跡……36
第20図　土坑３……36
第21図　ピット群……37
第22図　礫集中……37
第23図　軽石溜り１・２号……37
第24図　シラス溜り……37
第25図　土坑３内出土遺物(1)……39
第26図　土坑３内出土遺物(2)……40
第27図　土坑３内出土遺物(3)……41
第28図　土坑３内出土遺物(4)……42
第29図　土坑３内出土遺物(5)……43
第30図　土坑３内出土遺物(6)……44
第31図　土坑３内出土遺物(7)……45
第32図　土坑３内出土遺物(8)……46
第33図　土坑３内出土遺物(9)……47
第34図　土坑３内出土遺物(10)……48
第35図　碗類(1)……51
第36図　碗類(2)……52
第37図　皿類……53
第38図　鉢類(1)……54
第39図　鉢類(2)……55
第40図　蓋類(1)……57
第41図　蓋類(2)……58
第42図　蓋類(3)……59
第43図　蓋類(4)……60
第44図　水注類(1)土瓶……61
第45図　水注類(2)土瓶……62
第46図　水注類(3)土瓶……63
第47図　水注類(4)土瓶……64
第48図　水注類(5)急須・水注……65
第49図　鍋類(1)土鍋……67
第50図　鍋類(2)土鍋……68
第51図　鍋類(3)土鍋・釜鍋(1)羽釜……69
第52図　釜類(2)……70
第53図　瓶類……71
第54図　鉢類(1)練鉢……73
第55図　鉢類(2)練鉢……74
第56図　鉢類(3)練鉢……75
第57図　鉢類(4)練鉢……76
第58図　鉢類(1)擂鉢……78
第59図　鉢類(2)擂鉢……79
第60図　鉢類(3)擂鉢……80
第61図　鉢類(4)擂鉢……81
第62図　鉢類(5)擂鉢……82
第63図　甕類(1)……83
第64図　甕類(2)……84
第65図　甕類(3)……85
第66図　壺類(1)……86
第67図　甕・壺類　底部……87
第68図　鉢類(1)植木鉢……89
第69図　鉢類(2)植木鉢……90
第70図　土製品……91
第71図　窯道具(1)ヒラゴマ・マガイゴマ……94
第72図　窯道具(2)チャツ・センベイ・逆台形型ハマ…96
第73図　窯道具(3)リング型ハマ・ガンギ(切高台付ハマ)…97
第74図　窯道具(4)ガンギ(切高台付ハマ)……98
第75図　窯道具(5)ガンギ(切高台付ハマ)……99
第76図　窯道具(6)ガンギ(切高台付ハマ)……100
第77図　窯道具(7)ガンギ(切高台付ハマ)……101
第78図　窯道具(8)サヤ鉢……104
第79図　窯道具(9)サヤ鉢……105
第80図　窯道具(10)サヤ蓋……106
第81図　窯道具(11)サヤ蓋・トチン……107
第82図　窯道具(12)その他……108
第83図　製作用具……110
第84図　窯壁・トンバイ……111
第85図　生活用品(1)磁器……113
第86図　生活用品(2)磁器……114
第87図　生活用品(3)磁器……115
第88図　生活用品(4)磁器……116
第89図　生活用品(5)磁器……117
第90図　生活用品(6)磁器……118
第91図　生活用品(7)磁器……119
第92図　生活用品(8)磁器……120
第93図　生活用品(9)磁器……121
第94図　生活用品(10)白薩摩……122
第95図　生活用品(11)白薩摩……123
第96図　生活用品(12)陶器……124
第97図　生活用品(13)陶器・土製品……125
第98図　生活用品(14)その他……126
第99図　生活用品(15)紡錘車・土錘・メンコ他……127
第100図　生活用品(16)鉄製品・古銭……128
第101図　生活用品(17)石臼……129

第102図　遺跡残存状況図……131
第103図　雪之山窯周辺表採資料……135
第104図『東市来町郷土史』(478頁より)……136
第105図　雪之山窯位置図……136
第106図　窯詰復元図……140

表目次

第 1 表　南九州西回り自動車道鹿児島道路
(伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表……4
第 2 表　周辺の遺跡地名表……14
第 3 表　土器観察表……29
第 4 表　石器観察表……32
第 5 表　遺構観察表……35
第 6 表　土坑３内出土遺物……49
第 7 表　椀……52
第 8 表　皿……53
第 9 表　鉢……56
第10表　蓋……60
第11表　水注……66
第12表　鍋・釜……70
第13表　瓶……72
第14表　鉢……76
第15表　鉢……77
第16表　擂鉢……80
第17表　擂鉢……82
第18表　甕・壺……88
第19表　鉢……90
第20表　土製品……92
第21表　窯道具……93
第22表　窯道具……95
第23表　窯道具……103
第24表　窯道具……105
第25表　窯道具……109
第26表　製作用具・窯壁……111
第27表　生活用品……117
第28表　生活用品……121
第29表　生活用品……123
第30表　生活用品……130

図版目次

図版 1……145
図版 2……146
図版 3……147
図版 4……148
図版 5　縄文土器……149
図版 6　縄文土器……150
図版 7　土器……151
図版 8　土坑３内出土遺物・椀・皿……152
図版 9　鉢・急須・土鍋……153
図版10　蓋……154
図版11　土瓶……155
図版12　土瓶底部・土鍋……156
図版13　土鍋・羽釜・甑……157
図版14　練鉢……158
図版15　練鉢・片口……159
図版16　擂鉢……160
図版17　瓶……161
図版18　甕……162
図版19　擂鉢・甕……163
図版20　甕・壺……164
図版21　甕・壺　底部……165
図版22　土鍋・鉢・甕……166
図版23　植木鉢・サヤ鉢……167
図版24　チャツ・センベイ・サヤ鉢・サヤ蓋……168
図版25　ガンギ……169
図版26　コマ・トチン・文字入りの窯道具……170
図版27　製作用品・白薩摩……171
図版28　生活用品(1)工管・砥石……172
図版29　生活用品(2)……173
図版30　土製品……174

[猿引遺跡]挿図目次

第 1 図　基本土層図……176
第 2 図　土層断面図……177
第 3 図　グリッド配置図……178
第 4 図　石材別出土状況(剥片)……179
第 5 図　石材別出土状況(破片)……180
第 6 図　石器・土器レイアウト……181
第 7 図　礫群……182
第 8 図　旧石器(1)……184
第 9 図　旧石器(2)……185
第10図　旧石器(3)……186
第11図　旧石器(4)……187
第12図　図版石器遺物番号……187
第13図　旧石器(5)……188
第14図　旧石器(6)……189
第15図　出土土器……193
第16図　縄文石器……195

表目次

第 1 表　旧石器　石器分類表(1)……191
第 2 表　旧石器　石器分類表(2)……192
第 3 表　土器観察表……194
第 4 表　縄文　石器分類表……194

図版目次

図版 1　土層断面・礫群……197
図版 2　遺物出土状況・遺物出土状況……198
図版 3　遺物出土状況・作業風景……199
図版 4　旧石器　石器(1)……200
図版 5　旧石器　石器(2)……201

はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院ＩＣと市来ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

1　一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘稜端部に位置し，調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。

2　永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の２か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し，縄文時代早期前半の前平式期には９軒の住居跡を始め，３基の連穴土坑と９基の集石，多数の土坑を検出。その他，古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。

3　下永迫Ａ…伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で，縄文時代後期の指宿式土器と石鏃，古墳時代の成川式土器，古代～中世では土坑・集石が検出され，青磁・白磁が出土した。

4　柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石４基や後期の石匙，石鏃，古代の土坑，焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。

5　上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり，平坦面から続く緩やかな斜面と，谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代

（早期・後期），弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは，縄文時代早期で遺構は，道跡や集石，遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

6　大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが，山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石，土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。

7　堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で，窯，作業場，物原が発見された。窯は長さ約30m，幅1.2m,傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・擂鉢・動物形土製品），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。

8　池之頭……東市来町美山字池之頭にあり，美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し，調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃，縄文時代早期の集石８基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器，晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。

9　雪山……東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石２基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石，古墳時代の成川式土器が出土したが，主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で，炉跡・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・擂鉢・瓶・碗），染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。

10　猿引……東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群１基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。

11　犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は，2,000㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙，古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが，主になるのは平安時代で，掘立柱建物跡（４間×４間・総柱）が製鉄に関する遺物（輸羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。

12　向椎城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ，縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・堀立柱建物跡・炉跡などが発見され，中世山城の遺構が検出された。

13　堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり，標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群９基と剥

片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石４基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

14　今里……東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器，古墳時代の成川式土器が発見された。

15　市ノ原……市来町大里字から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第１地点から第５地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・埋甕，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に渡り，多種多様な遺構・遺物が発見された。

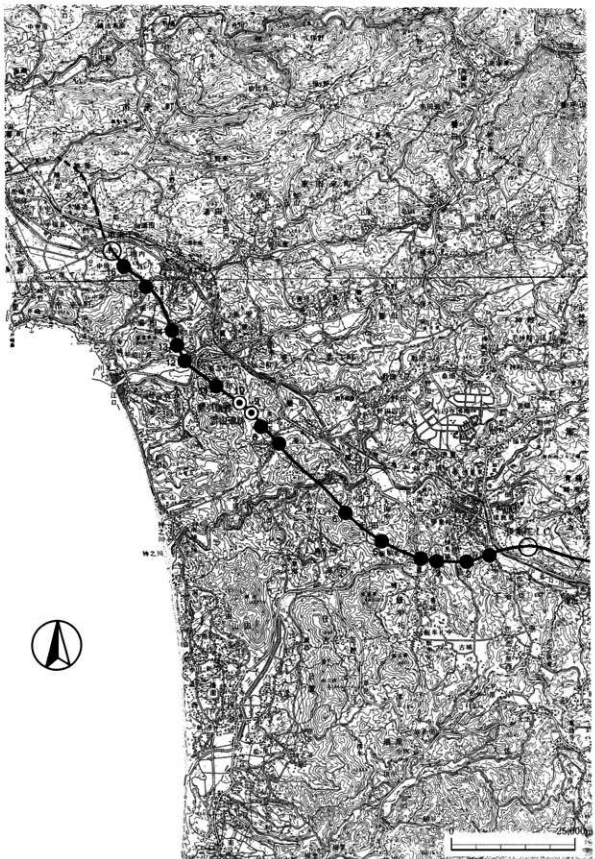
16　上ノ原……市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し，三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石３基，土坑が検出され，塞ノ神式，轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡１基と土坑・成川式土器が，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

第１表　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

（雪山遺跡）

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認　H8.10 全面　H8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 県埋文センター報告書31　2001刊行
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認　H8.10～12 全面　H8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩） 古代～近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑・前平式土器 土師器・青磁
3	下永迫A	伊集院町下谷口	確認　H9.10 全面　H10.5～7	2,600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁
4	柳原	伊集院町下谷口	確認　H9.11 全面　H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認　H9.2 全面　H9.5～H10.3	6,000㎡	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文（早・後） 弥生～古墳	剥片・砕片 道跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
6	大田城跡	伊集院町大田	確認　H8.12～H9.1 全面　H9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器 縄文（早）	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石蹟・磨石
7	堂平窯跡	東市来町美山	確認　H10.2 全面　H10.8～12	3,500㎡	池畑 池畑・繁昌・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	江戸	窯・柱跡・粘土層まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	確認　H9.8 全面　H10.8～11 H11.2.7～8	7,500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩）	細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・石坂式 成川式土器 県埋文センター報告書32　2002　刊行
⑨	雪山	東市来町美山	確認　H12.6 全面　H12.6～8	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文（早） 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具 県埋文センター報告書53　2003　刊行　本報告書
⑩	猿引	東市来町長里	確認　H12.5 全面　H12.5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文（前）	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 曽畑式 県埋文センター報告書53　2003　刊行　本報告書
⑪	大ヶ原	東市来町伊作田	確認　H9.2、H10.6 全面　H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ濵・橋口・大窪	旧石器・縄文（晩） 古代	細石刃核・細石刃・黒川式 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・磁器・滑石 県埋文センター報告書50　2003　刊行
12	向椎城跡	東市来町伊作田	確認　H8.11～12 全面　H9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文（草創・早・後） 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・敲磨文・前平式・市来式 竪穴住居・成川式 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認　H8.11～12 全面　H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃　） 縄文（早・前・後） 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群・細石刃核・細石刃 集石・吉田式・塞ノ神式・轟式 土坑・土師器・須恵器
⑭	今里	東市来町伊作田	確認　H8.11 全面　H9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・前・後・晩） 古墳	剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・フラック・調整剥片 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式 県埋文センター報告書33　2002刊行
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認　H8.10～12 全面　H8.12～H11.7	62,000㎡	繁昌・西園・宮田茂 池畑・繁昌・西園・寺師 前野・森田・宮田洋 八木澤・中原・藤野・三垣 ・元田・西村・寺原・宮田 茂・松村・松崎	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早～晩） 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石・土器・石器 竪穴住居跡・陥穴 竪穴住居跡・土坑・成川式　　竪穴住居跡・焼土・ 溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉 県埋文センター報告書49　2003　刊行
⑯	上ノ原	市来町大里	確認　H8.11 全面　H10.7～9	2,000㎡	繁昌・宮田茂 上之園・栗林	縄文（早） 古墳 古代～中世	集石・土坑・寵ノ神式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 県埋文センター報告書62　2003　刊行

○　報告書刊行済



第１図　伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間遺跡位置図

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度４月より文化財課に改称。）に照会した。この計画に伴い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成３年６月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地および確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・緊急発掘調査（以下本調査）が実施されることになった。

これを受けて，平成12年度に雪山遺跡・猿引遺跡の確認調査・本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。調査対象面積は雪山遺跡が2,700㎡，猿引遺跡が2,700㎡（本調査面積800㎡）である。なお，発掘調査終了後，整理作業および報告書作成を猿引遺跡は平成13年度，雪山遺跡については平成14年度にそれぞれ鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第２節　調査の組織

雪山遺跡・猿引遺跡

発掘調査（平成12年度）

起因事業主体	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
調査責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	総務係長	有村貢
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱修
調査事務担当	〃	主査	今村孝一郎
調査担当	〃	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	三垣恵一
現地指導	佐賀県立九州陶磁文化館	資料係長	家田淳一

整理作業・報告書作成（平成13年度）

起因事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
整理作業企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	総務係長	前田昭信
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事	池畑耕一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱修
整理作業事務担当	〃	主査	今村孝一郎
整理作業担当	〃	文化財主事	宮田洋一

整理作業・報告書作成（平成14年度）

起因事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
整理作業責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
整理作業企画担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	総務係長	前田昭信
	〃	調査課長兼縄文調査室室長	新東晃一
	〃	課長補佐兼縄文調査室室長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱修
整理作業事務担当	〃	主査	脇田清幸
整理作業担当	〃	文化財主事	園明恵
	〃	文化財主事	三垣恵一
遺物指導	鹿児島大学法文学部	助教授	渡辺芳郎
〃	琉球大学人文学部	教授	池田榮史
〃	苗代川民陶館(佐太郎窯)		鮫島佐太郎
〃	〃		鮫島寿郎

発掘作業員（五十音順・敬称略）

雪山遺跡・猿引遺跡（平成12年度）

有川恵子・有村照男・幾留ノリ子・今田スミ子・今田三千代・上野幸子・内野律子・奥茂・海田淳則・鍛治屋節子・潟山喜美子・迫田信雄・新村小夜子・新村まさ子・高山真知子・高山亮・田渕次男・田渕洋子・豊辻貞美・中園優・永山アヤ子・畠中良子・樋口末男・平田トシエ・

広濱タエコ・深見由美子・古川美津子・鉾之原富子・松尾セツ子・柳田まり子・山口テルエ・横手ミツ・脇田スミ子・渡邉志保子

整 理 作 業 員

猿引遺跡（平成13年度）

有村明子・今村むつみ・福屋民江・吉永睦子

雪山遺跡（平成14年度）

池之上真吾・坂口裕子・中野由美・松平ひとみ・森川さとみ・和田まり子

なお，発掘調査および報告書作成中，次の方々から指導・助言，御協力いただいた。記して謝意を表します。（五十音順，敬称略）

枝元泰生・大武進・黒川忠淳・重久淳一・下鶴弘・出口浩・堂満幸子・抜水茂樹・野邉盛雅・橋口亘・深野信之・松尾勉・松村真希子・四元誠・鹿児島陶磁器研究会

第３節　調査の経過

雪山遺跡

確認調査は，平成12年６月19日から６月23日にかけて計５日間実施した。緊急発掘調査（本調査）は平成12年６月26日から８月25日までの間，計34日間実施した。以下，日誌抄で調査の経過を略述する。

確認調査

６月19日（月）～６月23日（金）

確認トレンチ１（２×10m）・確認トレンチ２（２×18m）を設定し，掘り下げを開始する。

上段部の表土除去作業を重機によって行う。

緊急発掘調査（本調査）

６月26日（月）～６月28日（水）

下段部の伐採作業など，環境整備を実施した後，Ⅱ層以下の掘り下げを開始する。硬化面・焼土域などの遺構を検出する。確認トレンチ２の土層断面（南北方向）図を作成する。

７月３日（月）～７月７日（金）

上段部のⅢａ層以下の掘り下げを開始する。出土した遺物の取り上げ作業と下段部の地形図の作成を行う。

７月10日（月）～７月14日（金）

上段部のⅢａ層以下の掘り下げと出土遺物取り上げを行うとともに，上段部の北・東側斜面の地形測量図を作成する。

Ａ－３区のⅤ層上面で集石１基，Ｂ－４区で前平式土器の集中箇所を検出する。これらの遺構の写真撮影を実施した後，平・断面の実測図作成を行う。

７月17日（月）～７月19日（水）

上段部のV層以下の掘り下げと出土遺物の取り上げ作業を行う。下段部は，遺構検出面までの掘り下げを実施する。

7月24日（月）～7月28日（金）

下段部は，遺構検出までの掘り下げと樹根の抜根作業を並行して実施する。D－2区で検出した陶器溜まりと焼土域，礫集中箇所の写真撮影，平・断面図の作成を行う。

8月1日（月）・8月4日（金）

上段部の土層断面トレンチの掘り下げと下段部の樹根の抜根作業を行う。下段部東側の表土の除去作業を重機によって実施する。

8月8日（火）～8月11日（金）

A－2区で検出した軽石入りピットの写真撮影と平・断面図作成，C～D－2～3区のピットの平面図，C－3区土層断面（東西方向）図の作成をなどを行う。

8月21日（月）～8月25日（金）

上段部から順次，調査が終了した区域の重機による埋め戻しを行う。C－2区の土層断面（南北方向）の実測図作成およびA～B－2区で検出した集石，D－2区の炉跡の平・断面実測を行う。プレハブ内外の整備および出土遺物，発掘機材の搬出を行い，調査を終了する。

猿引遺跡

確認調査は，平成12年5月8日から5月12日にかけて計5日間実施した。緊急発掘調査（以下，本調査）は平成12年5月15日から6月20日までの間，計日間実施した。

以下，日誌抄により，発掘調査の経過を略述する。

確認調査

平成12年5月8日（月）～5月12日（金）

確認トレンチ1（2.4×24m）・確認トレンチ2（1.5×14m）を設定し，人力による掘り下げを開始する。トレンチ2については，表土下にシラスが露出したため調査を終了した。1トレンチについては，旧石器時代～縄文時代の遺物が出土し，包含層の残存が確認されたため周辺を拡張し，800㎡を対象に本調査を実施することになった。

緊急発掘調査（本調査）

平成12年5月15日（月）～5月19日（金）

調査用グリッド杭打ち。確認トレンチ下層確認（IX層上面まで）。VII層より黒曜石片出土。石英質石材等出土。確認トレンチ写真撮影および断面図実測。B～C－2～3区I～IX層直上遺物取り上げ。旧石器時代細石刃文化期（VII層）掘り下げ開始。

5月22日（月）～5月26日（金）

C－3区VIII層上面検出礫群実測。B～C－2～3区，VII層出土遺物取り上げ。教員の地域貢献体験事業で上市来中喜島先生，東市来中清水先生猿引遺跡にて発掘体験。

6月1日（木）～6月2日（金）

B～C－1～2区V～VII層掘り下げ。B～C－3区VII層掘り下げ。出土遺物の平板実測・レベル測定および取り上げ。

6月5日（月）～6月9日（金）

B～C－1～2区シラス上面まで掘り下げ。出土遺物の平板実測・レベル測定および取り上げ。Ⅸ層上面地形測量図作成。B，C－3区シラス上面まで掘り下げ。出土遺物の平板実測・レベル測定および取り上げ。

6月12日（月）～6月16日（金）

土層断面ベルト部の掘り下げ。出土遺物平板実測・レベル測定および取り上げ。下層確認トレンチ（Ⅷ層以下）設定及び掘り下げ，完掘状況写真撮影。

6月20日（火）建設省へ現場引き渡し完了。

第4節　整理作業の経過

雪山遺跡

整理作業は，平成14年4月～12月にかけて，国分市上之段の県立埋蔵文化財センターで行った。

大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記のとおりである。

平成14年4月～ 5月…注記，接合，実測する遺物の選別及び分類。

6月～ 8月…遺物実測，現場図面チェック，遺構図作成。

9月～10月…トレース，拓本，復元，レイアウト。

11月～12月…写真撮影，観察表作成，文章作成。

猿引遺跡

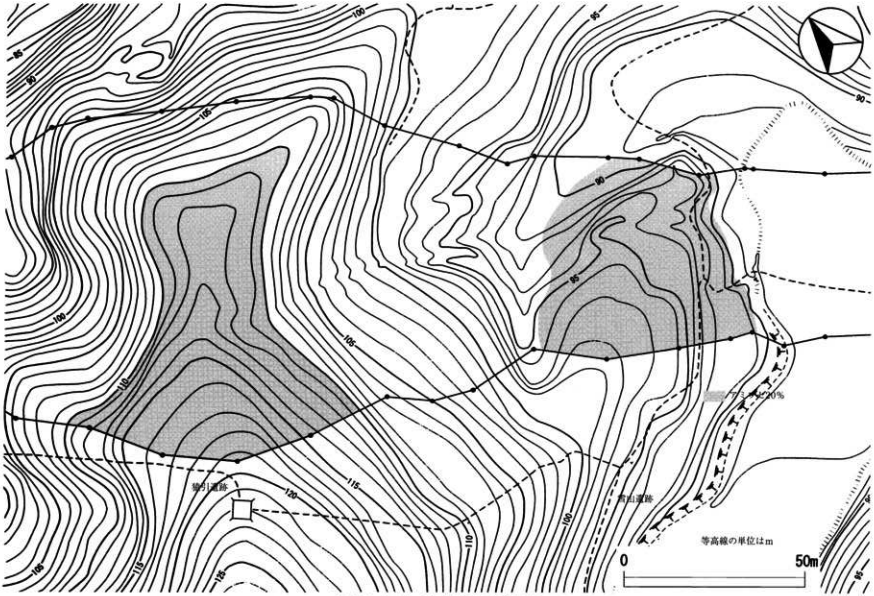
整理作業は，平成13年11月～3月にかけて，姶良郡姶良町平松の県立埋蔵文化財センターで行った。

大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記のとおりである。

平成13年11月～12月…実測図点検。遺物接合，実測用遺物選別。実測開始。

1月…実測，拓本。現場の実測図によりドット図および遺構図等作成，トレース作業。

2月～ 3月…拓本，トレース，レイアウト。観察表作成。周辺地形図等作成，トレース。文章作成。



第２図　雪山・猿引遺跡周辺地形図

第２章　遺跡の位置及び環境

第１節　地理的環境

雪山遺跡・猿引遺跡

雪山遺跡は，鹿児島県日置郡東市来町美山字雪山，猿引遺跡は鹿児島県日置郡東市来町長里字猿引に所在する。

両遺跡の所在する東市来町は，薩摩半島の北西部に位置し，東は郡山町・伊集院町，西は市来町・南は伊集院町・日吉町，北は市来町・薩摩郡樋脇町に接し，南西は東シナ海に接している。北東部と北部には重平山（523.1m）・矢岳（410.2m）・大峰ヶ原など数百メートル旧期火山岩山地が連なり，南西部の中生層の低山地以外は，標高約50～180mの火山灰台地からなる。北東部の重平山・中岳に源を発する江口川・大里川は，これらの山地を浸食しつつ，町の中央部を貫流し，南端の町境および南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。東シナ海に面する海岸線は約６kmあり，日本三大砂丘の一つで総延長約30kmにおよぶ吹上砂丘の一部となっている。また，これらの河川によって火山灰台地が開析され，その流域は河岸段丘や谷底平野となり，現在は水田地帯が形成されている。

雪山遺跡は，東市来町南西部の150m級の低山地から東へ延びる標高約90～95mの台地東端，猿引遺跡は，雪山遺跡と谷を挟んだ西約50m，標高約110mの馬の背状の台地に位置し，海岸線からの距離は直線距離で約2.5kmをはかる。

遺跡周辺を俯瞰すると，両遺跡の東側一帯は，調査前には蝦蟇が群生しメダカが生息するなど湿地帯の状況を呈していたが，このような景観に至る以前には，豊富な水量を利用して湿田が開かれていたようである。この湿田跡の東約100mにはこれらの水を貯えた美山池があり，初夏の頃には水面一面にひろがる蓮の花や水鳥を望むことができる。古墳時代の良好な資料が出土した池之頭遺跡はこの池の西に所在する。このほか，これらの遺跡周辺には，里道と思われる道筋や造成によって形成されたと思われる平坦面の痕跡を数か所に確認できることから，現代になって杉林や果樹園，水田として利用されるまで繰り返し何らかの人間活動が行われてきた場所であることがうかがえる。

第２節　歴史的環境

東市来町は古代には市来院に属し，郡司の大蔵氏が支配していた。その後，大蔵氏は鶴丸城に居を構え市来氏と称するようになるが，寛正三（1462）年島津立久により滅亡させられる。この鶴丸城には天文十九（1550）年にフランシスコ＝ザビエルも立ち寄り布教活動をした記録が残されている。

また，1592～1598年の文禄・慶長の役の際に島津義弘が朝鮮に出兵しているが，帰国に際して朝鮮の陶工を連れ帰っている。この陶工の大部分は串木野市の島平に上陸したが，一部が神之川に到着し，やがて苗代川に居住しそこで作陶に従事することになった。これが薩摩焼の発祥である。現在でも美山地区に窯元があり，薩摩焼の生産が行われ伝統が引き継がれているほか，伊作田では屋根瓦の生産が行われた。

このため，窯関連の遺跡が多数確認されている。美山最初の窯は朴平意が元屋敷窯を開き，次いで堂平窯を，その後，五本松窯が開かれ，御定式窯や南京皿山窯といった御用窯が造られている。

時折，藩主も窯を訪れたと伝えられている。そのほか，市来氏の居城であった鶴丸城跡や島津貞久が鶴丸城攻略のために陣を敷いたといわれる総陣ノ尾跡などがある。

近世には，一時長里に地頭仮屋が置かれ，その周辺には郷士の居住する麓集落が形成された。また，参勤交代にも利用された九州街道の沿道に発達した町場（野町）は，現国道３号線沿いの城之町付近にあたる。また，南西に位置する伊作田村弁財天岳に遠見番所，湯田村の海岸線には，火立番所が設けられ，串木野や伊集院とならんで，幕末に至るまで外国船などに対する警戒が行われている。このような歴史をもつ東市来町は，古来から経済・軍事面などにおいて重要な地であったといえる。

第３節　周辺遺跡

東市来町の考古学的調査の歴史は比較的新しく，近年の大型の公共事業に伴う発掘調査が行われる以前は，湯田の皆田西で土器片や石斧が採集されたり，伊作田や養母，美山小学校の敷地内から市来式土器が採集されるというような状況であった。

近年の調査成果について概括すると，上二月田の上二月田遺跡の発掘調査において，縄文時代早期の土坑，後期の竪穴住居跡が発見されているほか，養母の仮牧段遺跡や桜原遺跡，陣ヶ原遺跡から縄文時代や古墳時代などの遺物が出土している。

また，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）の建設に伴い，平成８年度から平成12年度にかけて，計９遺跡の緊急発掘調査が行われている。伊作田の堂園平遺跡では剥片尖頭器など旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物が出土している。湯田の市ノ原遺跡では，縄文時代早期から晩期の土器が多く出土しており，とくに晩期の刻目突帯文や打製石鍬の出土量の多さは農耕文化の発達をうかがわせる。翡翠製の勾玉や三角縁形土製品・三角縁形石製品の出土は東北や北陸地方など遠隔地との交流の可能性を示す発見となった。さらに弥生時代前期末～中期の竪穴住居跡などの遺構が検出され，当該期の集落の様相を解明する上で貴重な資料を提供している。近世では参勤交代にも使用された九州街道（出水筋）の一部が排水溝を伴って発見され，注目を浴びた。

平成10年度に調査の行われた堂平窯跡（現南九州西回り自動車道鹿児島道路美山ＰＡの西側にあった薩摩焼の古窯跡）では，推定全長30.7mの単室傾斜窯の本体部分が１基検出されたほか，物原・作業場と思われるピット群などが検出されている。物原ではいわゆる白薩摩・黒薩摩などの陶器類や窯道具とともに軒丸瓦・平瓦などが大量に出土している。これらの瓦製品の出土によって鹿児島城周辺で使われた瓦を生産した窯として注目を浴びることとなったが，今後これらの資料がこれまで不明な点の多かった近世における瓦生産の解明に寄与するものと思われる。なお，窯跡の本体部分は，現在東市来町美山の「美山陶遊館」近くに移設保存され，展示公開されている。

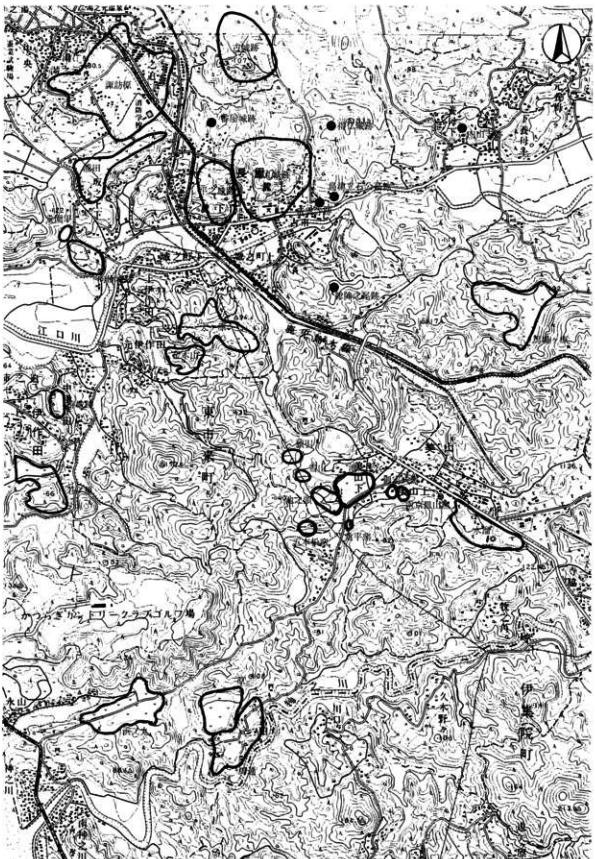
雪山遺跡・猿引遺跡の周辺には，旧石器時代から近世にかけて各時代の遺跡が多数存在する。周辺遺跡の概要については次に挙げる地名表のとおりである。

〈参考・引用文献〉

「東市来町郷土史」　四元幸夫　1979
「角川日本地名大辞典　46　鹿児島県」　角川書店　1991
「鹿児島県の地名」　日本歴史地名大系第47巻　平凡社　1998

第２表　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	雪山	東市来町美山字雪山	台地	旧石器・縄文・古墳・近世・近代	土器・成川式土器・薩摩焼
2	猿引	東市来町長里字猿引	台地		
3	諏訪原	東市来町湯田字諏訪原ほか	台地	古墳・中世・近世	土師器・陶器・染付
4	古城跡	東市来町長里字古城原	山頂・平地		石塁
5	浦田	東市来町長里字浦田ほか	台地	古墳・中世	土師器
6	番屋城跡	東市来町長里字番屋城	平地	南北朝～室町	
7	平之城跡	東市来町長里字平之城	丘陵・平地	南北朝～室町	
8	鶴丸城跡	東市来町長里鶴丸小学校	山麓	平安～室町	礎石
9	得仏城跡	東市来町長里字得仏城	平地		
10	内山寺跡	東市来町養母字中福良	丘	鎌倉	五輪塔
11	島津立石公墓地	東市来町長里3281	墓地	江戸時代	町指定
12	竜雲寺跡	東市来町長里小字前田	山麓	室町（前）	歴代住職の墓地・手水鉢等
13	総陣之尾跡	東市来町長里字陣之尾	山頂・平地		
14	堂園平	東市来町伊作田堂園平	丘陵	中世・近世	土師器・染付
15	向椿城跡	東市来町伊作田字上椿	丘陵・平地	旧石器・縄文・古墳・古代・中世・近世	細石刃・土器・土師器・青磁
16	椿城跡	東市来町伊作田字椿原	山頂・平地		
17	老ノ原	東市来町伊作田字老ノ原ほか	台地	弥生・古墳・中世	土器・土師器・染付
18	犬ヶ原	東市来町伊作田犬ヶ原ほか	丘陵	中世・近世	土師器・陶器
19	金木山	東市来町伊作田金木山ほか	丘陵	古墳・近世	土器・陶器
20	馬場ヶ原	東市来町長里下馬場ヶ原	台地	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
21	池之頭	東市来町美山字池之頭	台地	旧石器・縄文・古墳	細石刃・縄文土器・成川式土器
22	池之平	東市来町美山池之平ほか	迫頭	古墳・近世	土器・土師器・陶器
23	五本松窯跡	東市来町美山500,498-2	山麓	江戸	
24	堂平窯跡	東市来町美山堂平	丘陵・斜面	近世	陶器
25	南京皿山窯跡	東市来町美山975	山麓	江戸	
26	御定式窯跡	東市来町美山973,974	山麓	江戸	
27	水溜	東市来町美山上水溜ほか	段丘	中世・近世	土師器・陶器・磁器
28	浜ノ丸	東市来町神之川浜ノ丸	後背砂地	古墳・中世	土師器
29	原	東市来町宮田原ほか	丘陵	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
30	馬通	東市来町美山馬通ほか	丘陵	弥生・古墳・近世	土器・土師器・陶器



第３図　周辺遺跡位置図（１／25,000）

雪山遺跡

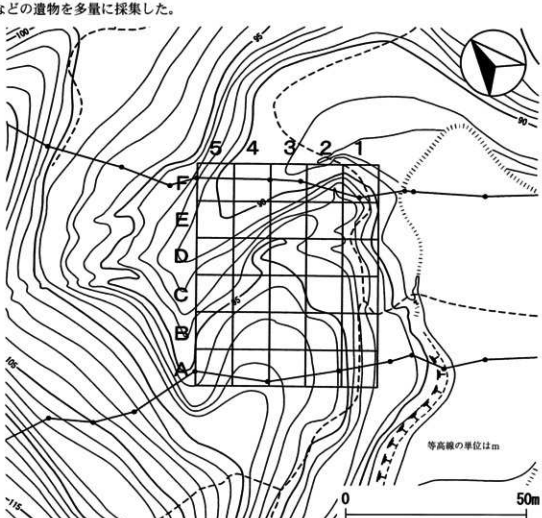
第３章　雪山遺跡の発掘調査

第１節　発掘調査の方法

調査は，「南九州西回り自動車道鹿児島道路実施設計図」のセンターライン「STA240.」と「STA245.」を結ぶ線を基軸に，測量基準としての調査区割り（南北方向にＡ・Ｂ・Ｃ～，東西方向に１・２・３～とする10m間隔のグリッド）を設定して実施した。

確認調査は，表土を重機（バックホー）により除去した後，包含層の残存が良好と思われる上段部にトレンチ１（２×10m）・トレンチ２（２×14m）を設定して，人力（山鍬・ジョレン）による掘り下げを実施した。その結果，旧石器時代細石刃文化期，縄文時代早期・縄文時代後期，古墳時代などの遺物が包含されていることが判明した。

確認調査の結果を受けて，本調査に移行することになったが，調査前から調査区内に多量の薩摩焼（陶磁器）片や窯道具，瓦・石臼などの散布がみられ，人工的な掘り込みと思われるくぼみも認められていたことから，下段部には遺構の存在する可能性が高いと想定された。本調査の結果，造成面から炉跡・土坑・ピットなどの遺構が検出されたほか，調査区内で陶器・染付・窯道具などの遺物を多量に採集した。

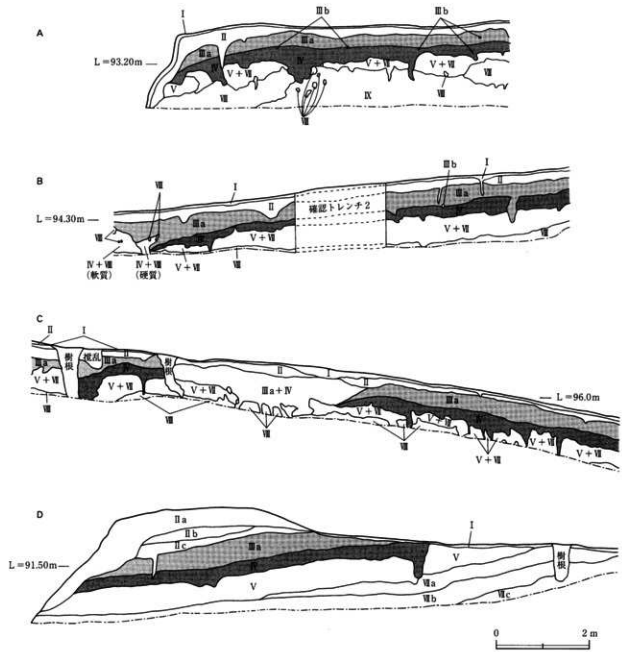


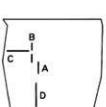
第４図　グリッド配置図

第２節　遺跡の層位

雪山遺跡は，遺跡が約150m級の低山地から東へ延びる台地東端の傾斜地に立地するため，層の堆積状態が不安定な部分もあり，場所によって土層にかなりの違いが認められた。また，調査区の東側については近世以降の造成によって平坦面が造成された際，Ⅲａ～Ⅷ層にかけて削平をうけていることも確認された。雪山遺跡における土層は下図の通りである。（第５図）

第５図　基本土層図





断面図の位置

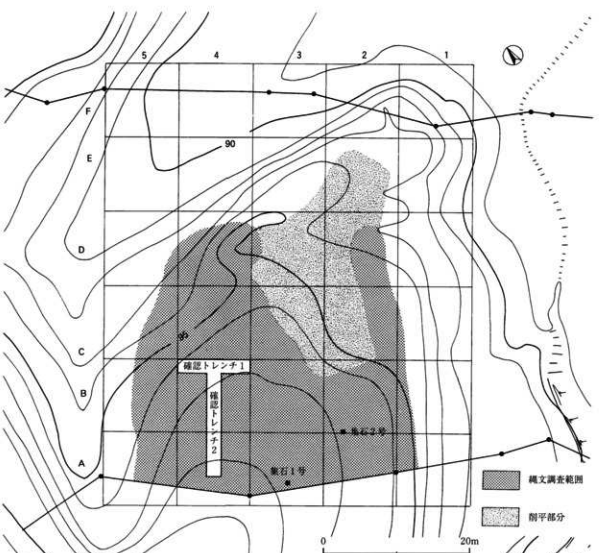
I　黒褐色腐植土
IIa　黄灰色土
IIb　暗黄灰色土
IIc　茶褐色土
IIIa　明黄灰色土
IIIb　黄橙色軽石
IV　黄褐色土
V　黒褐色土
VI　明黄褐色軽石
VIIa　暗茶褐色粘質土
VIIb　茶褐色粘質土
VIIc　暗褐色粘質土
VIII　黄白色土
IX　淡黄灰色土

第6図　土層断面図

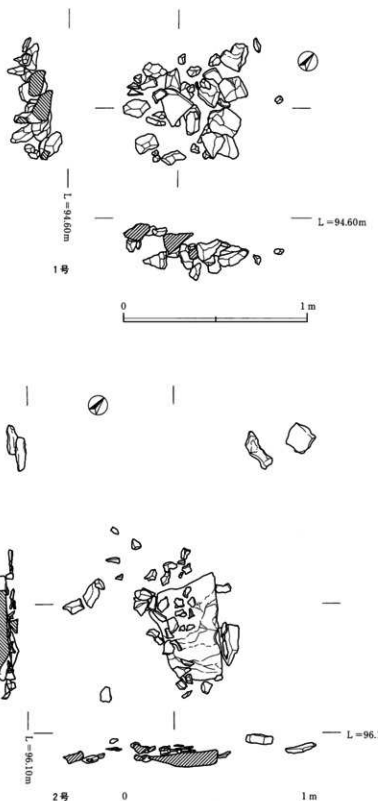
第３節　発掘調査の成果

１．Ⅲ～Ⅴ層の調査

縄文時代の遺物は，主に調査対象範囲の西側，自然地形の残存するＢ～Ｃ－２～４区から出土している。東側の調査範囲については，後世の造成によって平坦面が形成された際，Ⅱ～Ⅷ層にかけて削平を受けており，場所によってはシラスが露出する状況であった。このほか，Ａ－３～４区の一部の範囲で包含層が残存しており遺物の出土が認められた（第７図）。Ⅲ～Ⅴ層からは縄文時代早期前葉の遺構・遺物を中心に，縄文時代後期・晩期，古墳時代の遺物の出土が少量認められた。



第７図　縄文時代調査範囲及びトレンチ位置図



第8図　集石1・2号

（1）　遺　構

①1号集石（第8図）

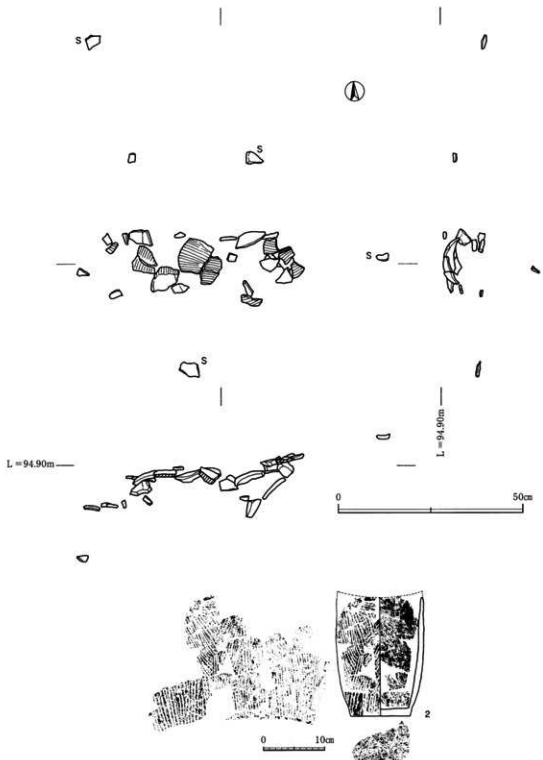
A－2区のV層上面で検出されたものである。約60×90cmの範囲に北側から南側に傾斜して，径5～15cm程度の角礫39個が検出された。石材は，砂岩を利用している。礫は火熱をうけたと思われ，肉眼観察ではすべての礫に赤化が認められた。集石に伴う掘り込み，炭化物等は確認できなかった。また，集石内からは，土器などの遺物の出土は認められていない。

②2号集石（第8図）

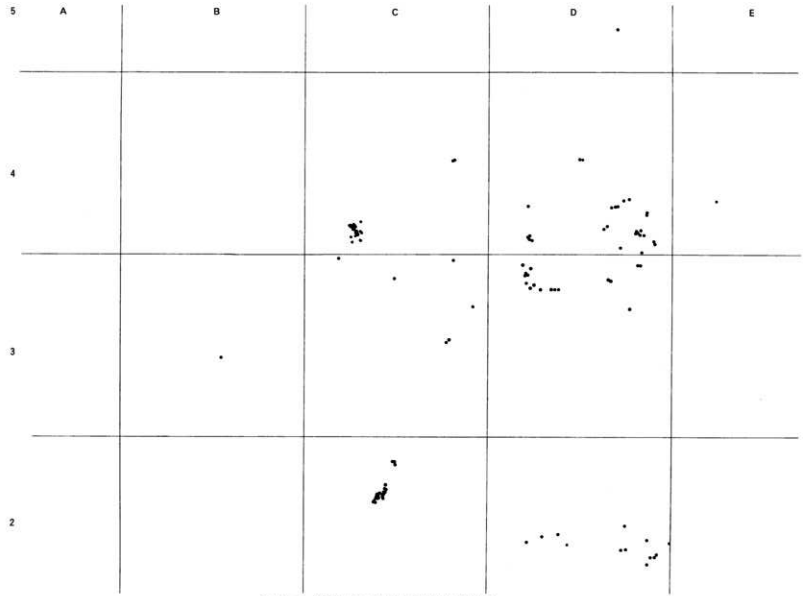
B－2区のV層上面で検出されたもので，約100×100cmの範囲に53個の礫が検出された。中心部より南東側に2個，北西側に1個の礫が離れて検出され，北東側には7個の礫が散在している。中央部は，長径約60cmの扁平な礫をおき，その上位から径5～10cm程度の小さい扁平な角礫が出土している。角礫は火熱をうけたと考えられ，小さく破砕している。石材は，安山岩・砂岩を利用している。炭化物等は確認できず，掘り込みも検出されなかった。また，集石内からは，土器などの遺物の出土も認められていない。

③土器の集中箇所（第９図）

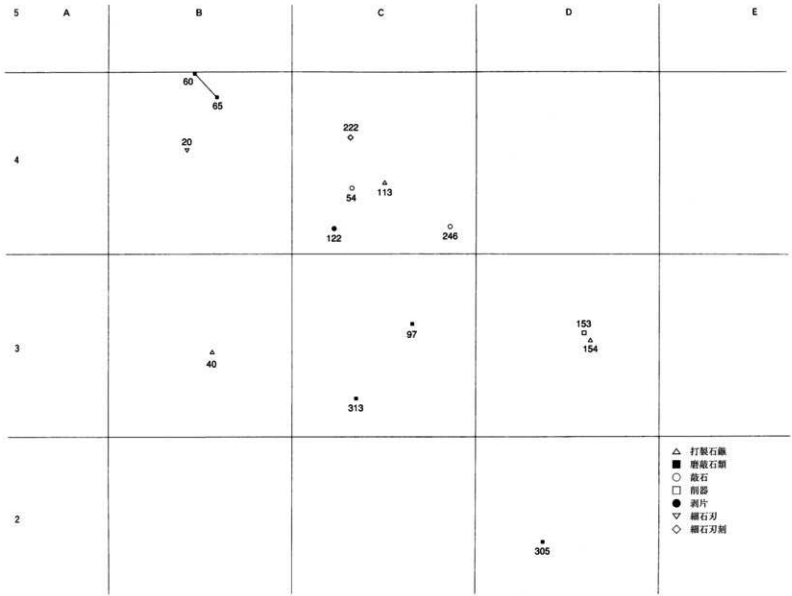
Ｂ－４区のⅣ層から出土したものである。西から東へ傾斜の低い方向へ口縁部を向けて倒れた形となっている。この土器集中に伴う掘り込みなどの遺構は確認されていない。



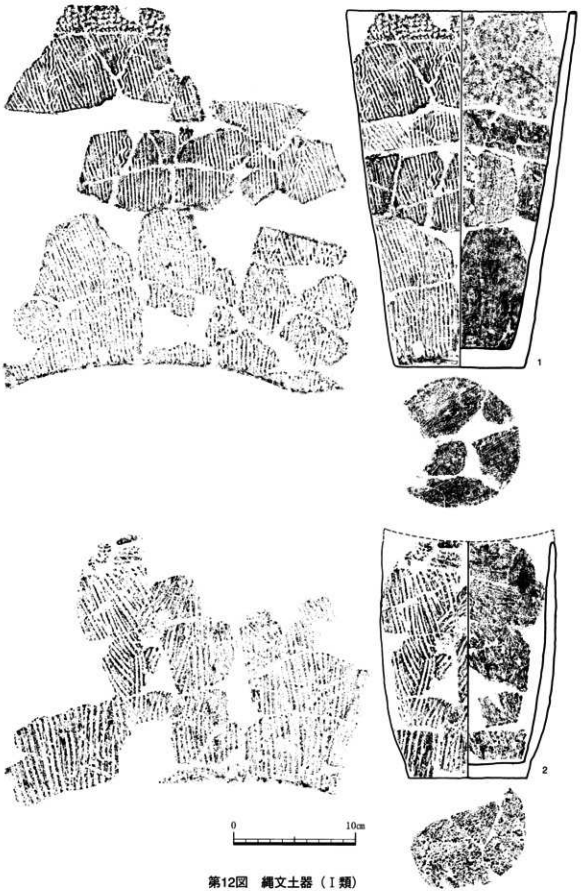
第９図　土器の集中箇所



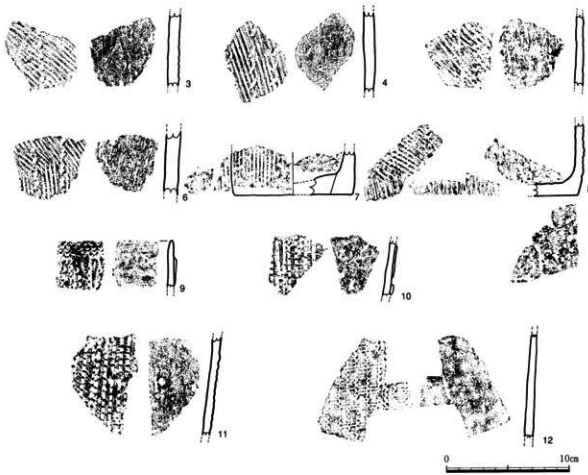
第10図　縄文時代早期前葉土器出土状況


5
A
B
C
D
E
4
3
2
60
65
20
222
54
113
122
246
97
153
154
40
313
305
△ 打製石鏃
■ 磨敲石類
○ 敲石
□ 削器
● 剥片
▽ 礫石刃
◇ 礫石刃刻

第11図　石器出土状況



第12図　縄文土器（Ⅰ類）



第13図　縄文土器（Ⅰ・Ⅱ類）

（2）遺　物

①Ⅳ層出土の土器（第12図～第14図）

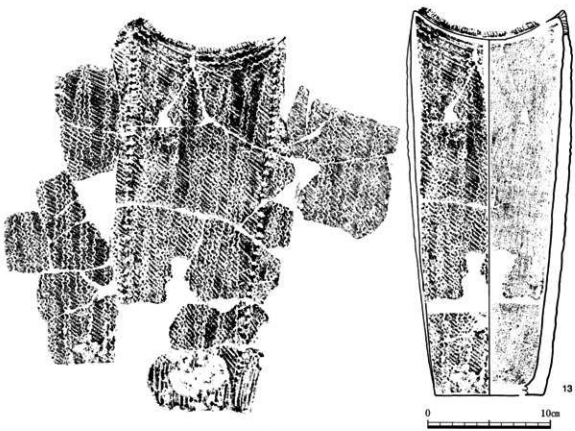
Ⅳ層から出土した土器は，以下の２類に分類した。

Ⅰ類土器　胴部の文様が，貝殻条痕文の上に貝殻条痕文や貝殻刺突文を重ねるタイプである。地の貝殻条痕文が文様の主体を占めている。円筒形土器と角筒形土器が出土している。

Ⅱ類土器　胴部の文様が，貝殻条痕文の上に刺突文が密に施されるタイプである。円筒形土器と角筒形土器が出土している。

Ⅰ類土器（１～８）

１は，円筒形土器である。口唇部は平坦でキザミ目が施される。口縁部は縦位の短い貝殻刺突文を施し，その下に横位の貝殻刺突文が１条廻る。胴部は縦位と斜位を基調とする貝殻条痕文の上に３条を１単位とする縦位の流水状の貝殻刺突文が施されている。底部は，下から約４cmの縦位の貝殻条痕文が施されており，流水状の貝殻条痕文はみられない。内面は縦位のケズリが施されている。２は，角筒形土器である。口唇部は平坦に調整されている。口縁部は横位の貝殻刺突文が２～３条施され，その下に横位の貝殻刺突文が１条廻っているようであるが，残存部位が少ないために詳細は不明である。胴部は縦位と斜位を基調とする貝殻条痕文が底部まで施されている。内面は縦位と斜位のケズリが施されている３～５は，胴部片である。全て円筒形土器の一部

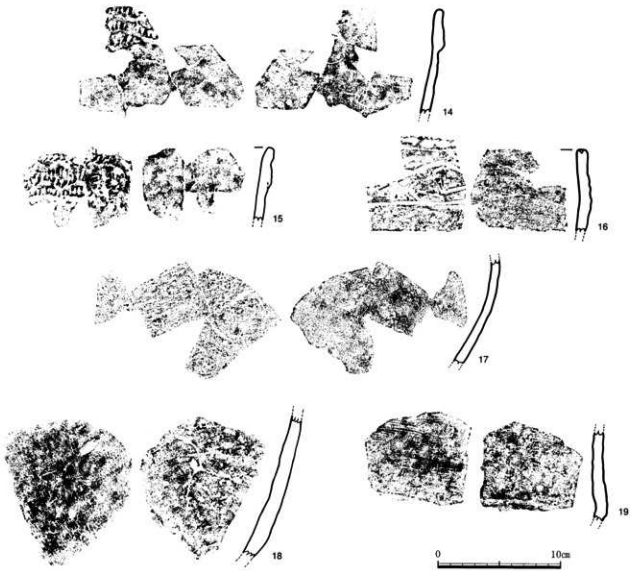


第14図　縄文土器（Ⅱ類）

であると思われる。3は，縦位の連続した貝殻刺突文が施されている。4は，斜位の短貝殻刺突文が連続して縦位に施されている。5は，横位を基調とする短貝殻刺突文が連続して縦位に施されている。6～8は，底部付近の破片である。6・7は，円筒形土器，8は，角筒形土器の一部である。6は，縦位の短貝殻刺突文が連続して縦位に施されている。7は，上部が欠損しているため縦位の貝殻条痕文のみがみられる。8は，斜位の貝殻条痕文の上に3条を単位とする連続した縦位の刺突文が施されている。底部の周囲を縦位の貝殻条痕文が廻る。

Ⅱ類土器（9～13）

9・10は，口縁部付近の破片である。いずれも円筒形土器である。9は，口唇部は平坦に調整されている。口縁部には，4条の横位の貝殻刺突文が施されている。胴部は，斜位の貝殻条痕文の上に縦位と斜位の貝殻刺突文が施される。楔形の貼り付け文が付き，側面に2㎜ほどの間隔で沈線が施されている。内面は丁寧に調整が施されている。10は，斜位の貝殻条痕文の上に縦位の方形刺突文が密に施される。2段は確認できる楔形の貼り付け文の周囲に棒状の工具で刺突文が施されている。内面は丁寧な調整が施されている。11・12は，胴部片である。いずれも円筒形土器である。11は，斜位の貝殻条痕文の上に方形刺突文が施される。12は，斜位の貝殻条痕文の上に連続した縦位の貝殻刺突文が施される。13は，角筒形土器である。波状口縁を有する。口唇部は平坦でキザミ目が施される。口縁部は3条の横位の貝殻刺突文が施される。胴部は斜位の貝殻条痕文の上から，縦位と斜位の連続した貝殻刺突文が施され，斜位の刺突文は縦位の刺突文と交差するところで向きを変える。底部には縦位の貝殻条痕文が施されている。



第15図　縄文土器（Ⅲ～Ⅴ類）

②Ⅲ層出土の土器（第15図）

Ⅲ層から出土した土器は，以下の３類に分類した。なお，Ⅲ～Ⅴ類土器は，基本的にはⅢ層から出土する土器であると思われるが，一部Ⅱ・Ⅳ層として取り上げた土器が含まれている。

Ⅲ類土器　幅広い肥厚部を有し，キャタピラ状の押し引き文が施される。その間に指頭による凹線がみられる。

Ⅳ類土器　口縁肥厚部に沈線文を有し，口唇部をやや平坦に調整し，刺突が施されている。

Ⅴ類土器　残存部には，文様がみられず，ナデ調整が施される。胴部の屈曲が弱い。

Ⅲ類土器（14・15）

14・15は，口縁部を含む破片である。14は，口唇部はやや平坦に調整が施される。口縁部に幅約３㎝ほどの肥厚部を有し，キャタピラ状の押し引き文が施されている。胴部は無文である。15は，口唇部は丸く調整されている。口縁部に約2.5㎝ほどの肥厚部が貼り付けてあり，キャタピラ状の押し引き文が施されている。

Ⅳ類土器（16・17）

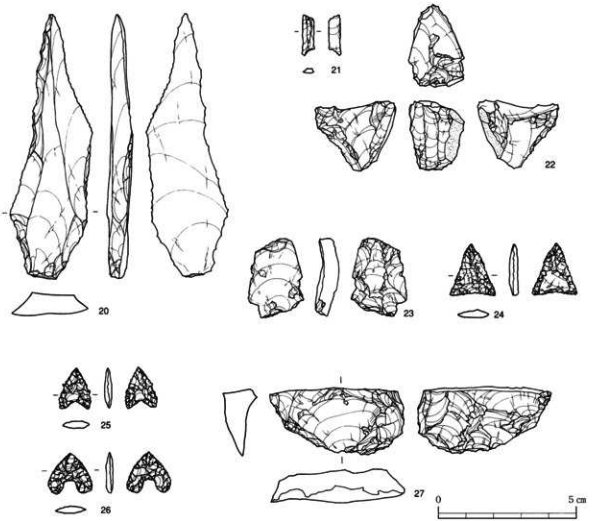
16は，口縁部を含む破片である。口唇部は平坦に調整が施され，楕円形の刺突文が施される。口縁部は，やや肥厚し，幅約3㎜の沈線文が施されている。肥厚部は明瞭ではないが横位のケズリが施されており，肥厚部の下部の胴部には，縦位のケズリが施されている。内面には，ナデ調整が施されている。17は，Ⅳ類土器の胴部下部の破片である。外面には，横位と斜位のケズリが施されている。内面にはミガキ様のナデ調整が施されている。

Ⅴ類土器（18・19）

18は，胴部片である。内外面ともナデ調整が施されているが，内面は器壁の剥落が激しく明瞭ではない。19は，胴部の屈曲部を含む破片である。ゆるやかな屈曲部を有している。内外面ともナデ調整が施されている。

第3表　土器観察表

挿図番号	遺物番号	注記番号	分類	出土区	層	部位	外面調整	内面調整	標高	備考
12	1	319	Ⅰ	B－2	Ⅳ	全体	2～3㎜の条痕	タテケズリ	92.69	
12	2	19	Ⅰ	B－4	Ⅳ	全体	2～3㎜の条痕	タテ～ナナメケズリ	96.47	
13	3	187	Ⅰ	C－3	Ⅲc	胴部	2～3㎜の条痕	タテケズリ	93.44	
13	4	301	Ⅰ	C－2	Ⅳ	胴部	2㎜の条痕	タテケズリ	91.57	
13	5	202	Ⅰ	C－4	Ⅳ	胴部	1～2㎜の条痕	タテケズリ	93.86	
13	6	19	Ⅰ	C－3	Ⅳ	底部	1～2㎜の条痕	タテケズリ	96.47	
13	7	328	Ⅰ	B－2	Ⅳ	底部	2㎜の条痕	ナデ	93.08	
13	8	307	Ⅰ	C－2	Ⅳ	底部	1～2㎜の条痕	不明	91.42	
13	9	292	Ⅱ	C－2	Ⅳ	口縁部	浅い条痕のあとナデ	ミガキ	91.46	
13	10	193	Ⅱ	C－3	Ⅳ	口縁部	浅い条痕	ナナメケズリ	93.41	
13	11	194	Ⅱ	C－3	Ⅳ	胴部	浅い条痕	タテ～ナナメケズリ	93.38	
13	12	21	Ⅱ	A－4	Ⅳ	胴部	浅い条痕	タテケズリ	94.74	
14	13	129	Ⅱ			全体	浅い条痕	タテケズリ	94.71	
15	14	233	Ⅲ	C－4	Ⅳ～Ⅱ	口縁部	ナデ	ミガキ状のナデ	93.17	
15	15	226	Ⅲ	C－4	Ⅳ～Ⅱ	口縁部	ナデ	ナデ	93.24	
15	16	79	Ⅳ	B－4	Ⅲa	口縁部	ナデ・ケズリ	ナデ	96.38	
15	17	250	Ⅳ	A－4	Ⅳ・Ⅲ	胴部	ナナメケズリ	ミガキ状のナデ	95.78	
15	18	72	Ⅴ	A－5	Ⅲa	胴部	ナデ	ナデ	96.86	
15	19	68	Ⅴ	A－4	Ⅱ	胴部	刷毛目・ナデ	ヨコケズリのあとナデ	97.18	



第16図　石器（1）

（2）遺物

②石器

石器は，剥片尖頭器１点，細石刃１点，細石刃核１点，剥片１点，打製石鏃３点，スクレイパー１点，磨石２点，磨・敲石２点，敲石２点などが出土している。このうち14点を図化した。

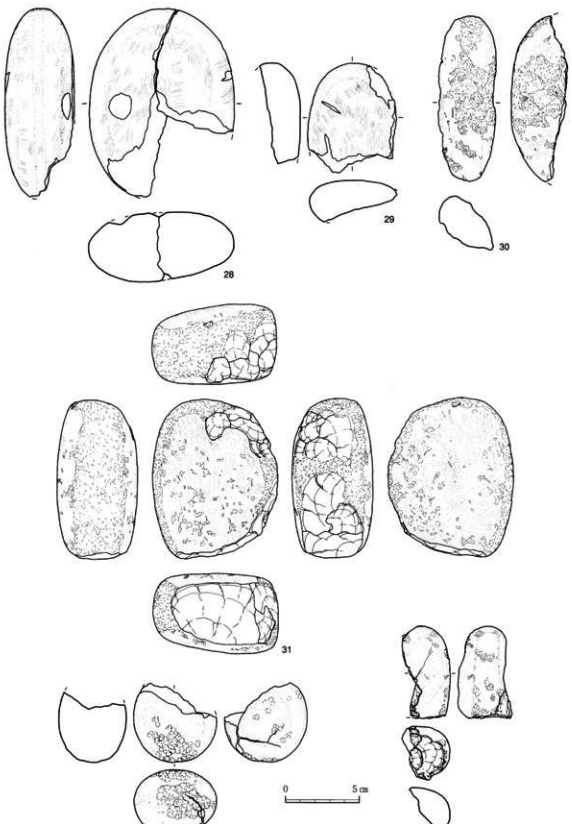
20は剥片尖頭器である。層位的にはⅢａ層中の攪乱層から出土した。頁岩の縦長剥片を素材としている。基部調整が施されている。

21は黒耀石を素材とした細石刃の可能性があるものである。一部欠損している。

22は細石刃核である。樋脇系の黒耀石を利用している。厚みのある剥片を素材とし，細石刃剥出が顕著である。主剥離面は側面に利用されている。作業面からの打面調整が施され，側面の一部には礫皮面が残されている。

23は二次加工のある剥片で，先端部が欠損している。樋脇系の黒耀石を用いている。

24～26は打製石鏃である。24は正三角形状の平基鏃で安山岩を用いている。側縁部の剥離は顕著ではなく，主剥離面を残す。25は針尾系の黒耀石を用いた凹基鏃で側縁が鋸歯状を呈する。



第17図　石器（2）

26は樋脇系の黒耀石を用いた凹基鏃で側縁部が内湾するタイプのものである。

27は樋脇系の黒耀石を用いたもので，スクレイパーとして分類した。

28～29は磨石である。いずれも砂岩を素材としている。28は4分の1ほどを欠損するが，表裏面に1か所ずつ蜂の巣状のくぼみが認められる。

30～31は磨・敲石である。いずれも安山岩を素材としている。30は側面の3面に顕著な敲打痕が認められる。両面に擦痕がある。31は側面の一部に擦痕が認められる。

32～33は砂岩を素材とする敲石である。32は一端に顕著な敲打痕がある。使用時に破砕した可能性がある。

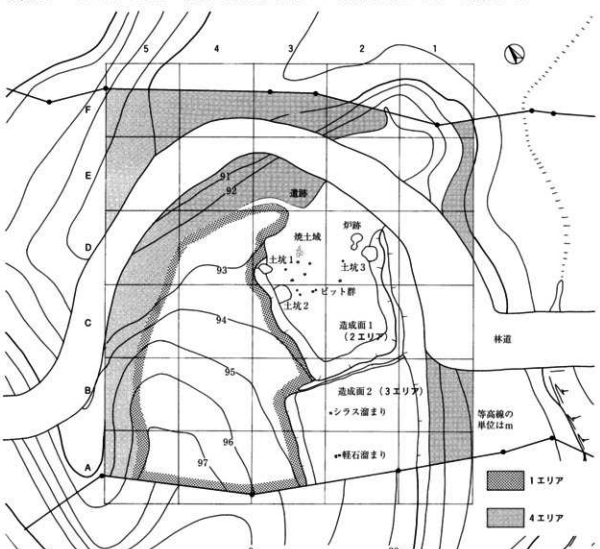
第4表　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	注記番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	標高(m)
16	20	1	剥片尖頭器	B 4	—	9.7	2.85	0.7	20.4	頁岩	95,61
16	21	20	細石刃	A 4	V VII	1.5	0.45	0.1	0.1	黒耀石　腰岳	96,32
16	22	222	細石刃核	B 4	III a	2.5	2.0	2.9	12.5	黒耀石　上牛鼻	95,78
16	23	122	剥片	B 4	IV	2.8	2.0	0.7	3.7	黒耀石　上牛鼻	94,825
16	24	40	打製石鏃	A 3	IV	1.9	1.7	0.2	0.6	安山岩	94,715
16	25	113	打製石鏃	B 4	IV	1.5	1.15	0.2	0.3	黒耀石　針尾岳	95,02
16	26	154	打製石鏃	C 4	IV	1.5	1.6	0.2	0.5	黒耀石　上牛鼻	93,38
16	27	153	スクレイパー	C 4	IV	4.9	2.45	1.2	15	黒耀石　上牛鼻	93,61
17	28	60･65	磨石	A 4	IV	12.9	9.95	4.6	617	砂岩	97,015
17	29	305	磨石	C 2	IV	7.5	6.1	—	143	砂岩	91,445
17	30	313	磨・敲石	B 3	IV	11.4	(3.7)	4.0	159	安山岩	93,25
17	31	97	磨・敲石	B 3	IV	10.9	8.55	5.6	822	安山岩	93,75
17	32	54	敲石	B 4	III a	6.3	3.3	—	64.7	砂岩	95,62
17	33	246	敲石	C 4	IV	5.4	5.7	4.6	149	砂岩	92,805

2．Ⅰ～Ⅱ層の調査

調査区内及びその周辺には，調査着手前からかなりの陶磁器類，窯道具などの散布が認められたほか，調査区の東側には造成によって形成されたと思われる平坦面が２か所確認できたことから，何らかの遺構が残存していることを想定して，便宜的に北側の平坦面を造成面１，南側の平坦面を造成面２と呼称し，さらに造成面の西側の傾斜面（自然地形部分）を３エリア，造成面と自然地形を除く周辺部（低地部）を４エリアに区分して調査を進める形をとった。造成面１－２間の比高差は約１m，造成面１と北側の傾斜面との比高差が約２mほどである。また，造成面１の縁辺部には土塁状の盛土も確認できたが，これらは平坦面を造成する際に生じた掘削土を利用して構築されたものと思われ，造成面２からの流水の防止や崩壊を防ぐ目的があったものと思われる（第18図）。

遺物は，陶器・磁器・窯道具などが多量に出土している。一部の遺構内遺物を除き，Ⅰ層からの表面採集である。遺物の取り上げに際しては，１エリア・２エリア（造成面１）・３エリア（造成面２）・４エリアごとに一括扱いとした。遺物ついては第３節２（３）で詳述する。



第18図　遺構配置図及び調査区分図

（1） 遺 構

遺構は，すべて造成面１・２から検出されている。調査前は杉林であった場所のため，抜根作業に手間取り，遺構検出に支障をきたした。また，造成面が構築された際に自然地形が削平を受けていることによって，場所によっては，縄文時代の遺物包含層が遺構検出面となっている。検出面は造成面１がⅤ～Ⅸ層上面，造成面２がⅣ～Ⅴ層上面にかけてである。検出された遺構は，造成面１から炉跡１基・土坑３基・ピット群・焼土域，造成面２から軽石溜まり２基・シラス溜まり１基である。

①炉 跡（第19図）

炉跡は，Ｄ－２区のⅣ層上面で検出されたもので，炉本体部から径10～20cm程度の軽石33個，砂岩２個が出土している。これらの軽石類は火熱を受けたと思われ，赤褐色の変色が顕著に認められた。また，軽石間には粘土状のもので目積が行われているのが確認できた。軽石は炉内に組まれていたものと思われるが，北側半分については軽石の残存状況が疎であり，抜き取られた可能性がある。灰のかき出し部からは陶器片が出土したが，小片のため図化できなかった。なお，鉄滓などの遺物は炉内及びその周辺にも確認されていない。

②土 坑（第20図）

土坑は，Ｄ－３区，Ｃ－３区，Ｄ－２区でそれぞれ１基検出されている。いずれも埋土から多量の陶磁器類の出土が認められた。ただし，土坑１・２については，陶磁器類とともに埋土から現代のガラス瓶類が出土したことや，陶磁器類についても整理作業において接合作業を進めた結果，３・４エリアから一括して表面採集したものと接合することが確認されたため，資料としての一括性は低いものと思われる。これらの土坑は造成面が現代になって杉林として利用される頃までに掘削されたものと考えられる。

土坑３はＤ－２区のⅢ層上面で検出されたもので，Ⅶ層まで掘り込まれている。断面観察の結果，造成面１の縁辺部に土塁状の盛土が構築された後に掘削されていることが確認できた。埋土からは陶磁器類・耐火煉瓦（トンバイ）・窯道具・寛永通寶などの遺物が多量に出土している。土坑の床面から掘り込み層にかけて鉄分（マンガン）層が顕著に形成されていることから，これらの遺物が投げ込まれる以前の用途として，井戸などの水に関連した利用が考えられる。

③ピット群（第21図）

Ｃ～Ｄ－３区のⅨ層上面で検出されたものである。Ｐ４の左隣り径40cmほどの礫があり，この礫を仮に礎石などとして捉えれば１×２軒の規模を持つ建物跡などの遺構も想定できるが，ピットの掘り込みが浅いこともあり，明確な遺構として認定することは躊躇される。これらピット群の周辺からは火熱を受け，焼けたと思われる瓦が出土している。

④礫の集中（第22図）

Ｃ－２～３区のⅦ層上面で検出されたものである。砂岩８個・安山岩１個・軽石１個・耐火煉瓦（トンバイ）７個，陶器製の錘１個で構成される。

⑤軽石溜まり（第23図）

Ａ－１区のⅤ層上面で検出されたものである。１・２号ともに掘り込みの形状は不整形である。内部には大きいもので拳大ほどの白色軽石塊と砂状となった軽石粒が詰め込まれている。用途に

ついては，窯に関連した遺構としての性格をもつことが想定されるが，詳細は不明である。類例の増加を待ち，ここでは保留することとしたい。

⑥シラス溜まり（第24図）

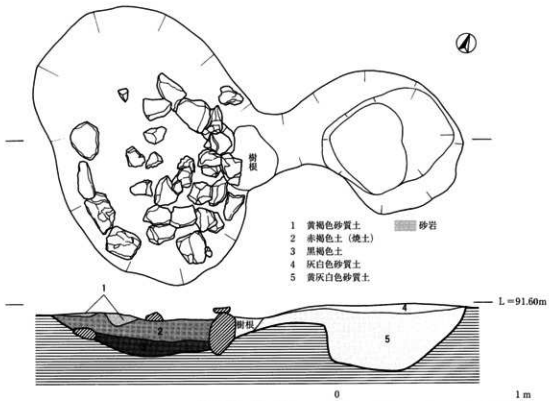
B－2区のⅣ層上面で検出されたもので，形状は楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く，灰白色のシラスが入り込んでいる。表土や旧表土の土層と比較して，明らかに色調・性質が異なることから，人為的に掘られた遺構としての可能性があるものとして判断し図化した。

⑦焼土域（第18図）

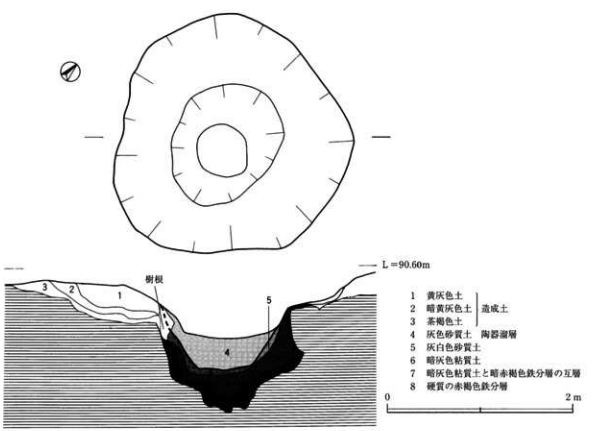
D－3区で検出された。造成面上である程度の面をもって把握することができた唯一の焼土域である。周辺からは焼けた瓦が出土している。

第5表　遺構観察表

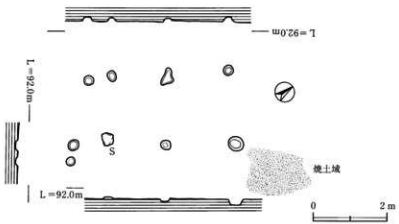
挿図番号	遺構名	検出区	検出面	時　期	長さ	幅	深さ（m）	備　考
19	炉　跡	D 2	Ⅳ	近世以降	2.36	1.52	0.37	陶器片・軽石33・砂岩2
20	土坑3	D 2	Ⅲa	近世以降	1.30	1.27	0.5	陶器・染付・寛永通寶
21	ピット群	CD 2	Ⅸ	近世以降	－	－	－	
22	礫集中	D 2 3	Ⅶ	近世以降	1	1	－	トンバイ7・陶製錘1
23	軽石溜まり1	A 1	Ⅴ	近世以降	0.59	0.49	0.26	
23	軽石溜まり2	A 1	Ⅴ	近世以降	0.43	0.40	0.23	
23	シラス溜まり	B 2	Ⅳ	近世以降	0.6	0.6	0.09	



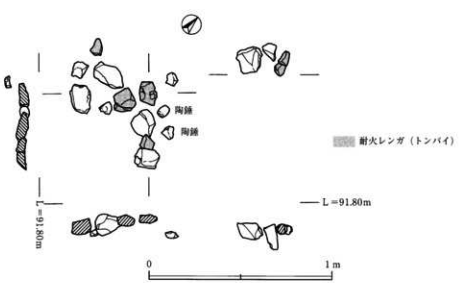
第19図　炉　跡



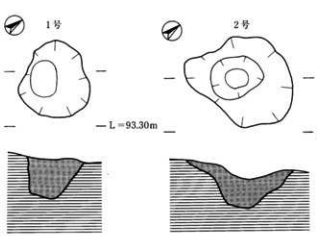
第20図　土坑３



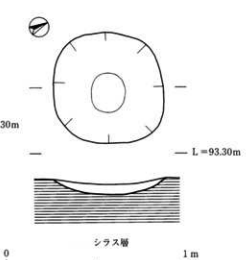
第21図　ピット群



第22図　礫集中



第23図　軽石溜り１・２号



第24図　シラス溜り

（2）遺構内遺物

土坑３内出土遺物

土坑３内から出土した遺物は，蓋・土瓶・鍋・釜・鉢・擂鉢・甕・壺・窯道具等が中心に出土した。その他に，碗・鉢・乗燭・土錘・メンコ・貨幣も１，２点ずつであるが出土している。これらの遺物は，後に掲載する近世以降の出土遺物と同じ特徴・様相を示し，近世以降の遺物と一括して扱ってもよい資料と思われるが，井戸状の遺構であるため遺構内遺物として別にして取り扱い，簡単に述べておくこととした。

碗・鉢・乗燭・土製品（第25図）

34は碗である。畳付以外鉄釉が総釉で掛かり，見込みにはガンギの目跡が残る。35は筒形の器形を呈する鉢で，高台部は欠損している。内外面とも鉄釉が掛けられ，口唇部と口縁内側の釉は掻き取られている。36はたんころ形の乗燭で，外底面以外全て鉄釉が掛けられている。38・39は土製品で，38が土錘，39は陶器の底部を転用したメンコである。

蓋（第25図）

37，40～44は蓋である。37は磁製で，天井部につまみが付かないものである。上面に透明釉が掛けられており，身受け部から内面にかけては無釉である。40～44は天井部につまみの付く陶製の蓋で，外面天井部に重ね焼きをした際の別個体の蓋の口唇部痕が残っている。

土瓶（第25・26図）

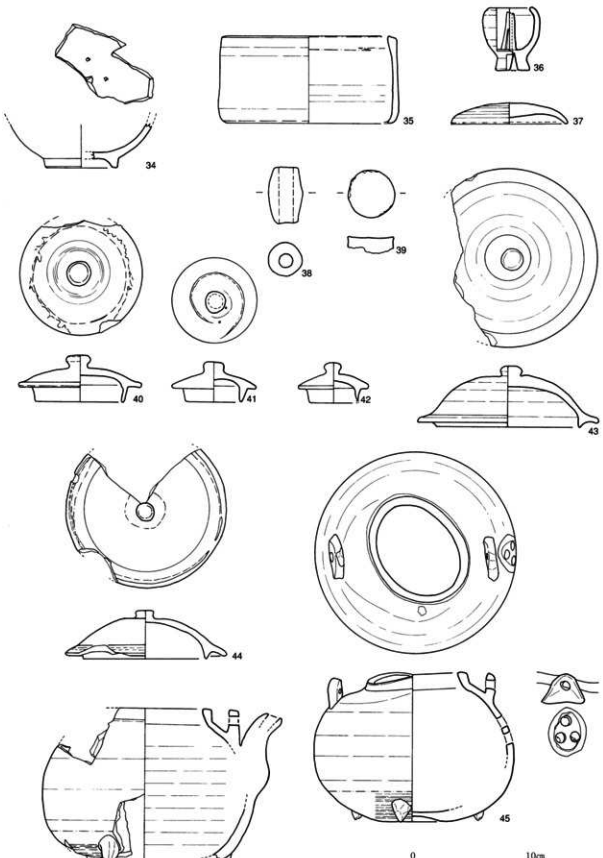
45～50は土瓶である。45～49は丸形の器形を呈し，茶褐色の胎土に鉄釉が掛けられたもので，注口の先端は溜め口につくられる。45・46は外底面に煤が付着しており，使用していたものと考えられる。49は丸形の器形を呈するが，白色の緻密な陶土に鉄釉が掛けられた資料で，注口部は欠損している。50はソロバン玉形状の器形を呈する平形の資料である。

釜・鍋（第26図）

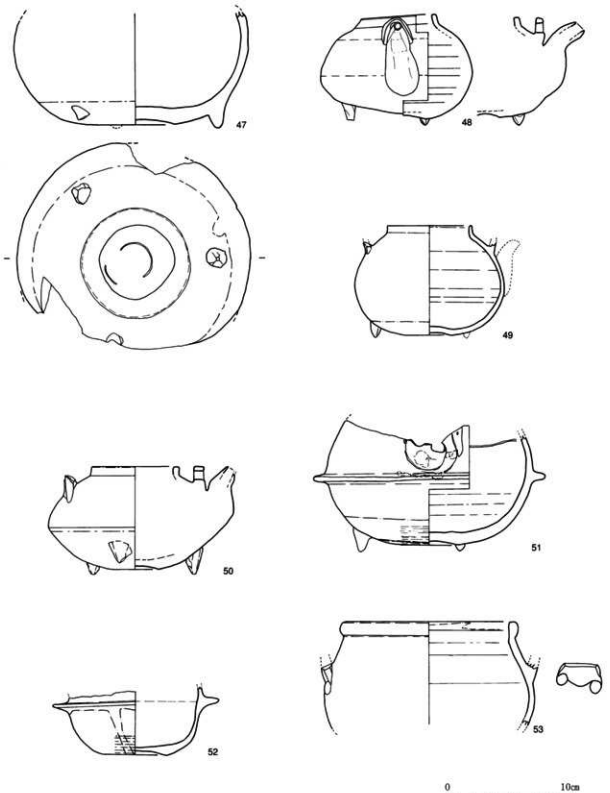
51・52は羽釜である。51は，胴部に茶止め穴が看取されることから，注口が付いていたと推測される。外面は化粧土を掛けた後，施釉されている。53は民俗例で山茶家と呼ばれる鍋で，把手を取り付ける耳の付け根に，鉄鍋で使用される留め具を模造した装飾が付けられる。

鉢（第27・28図）

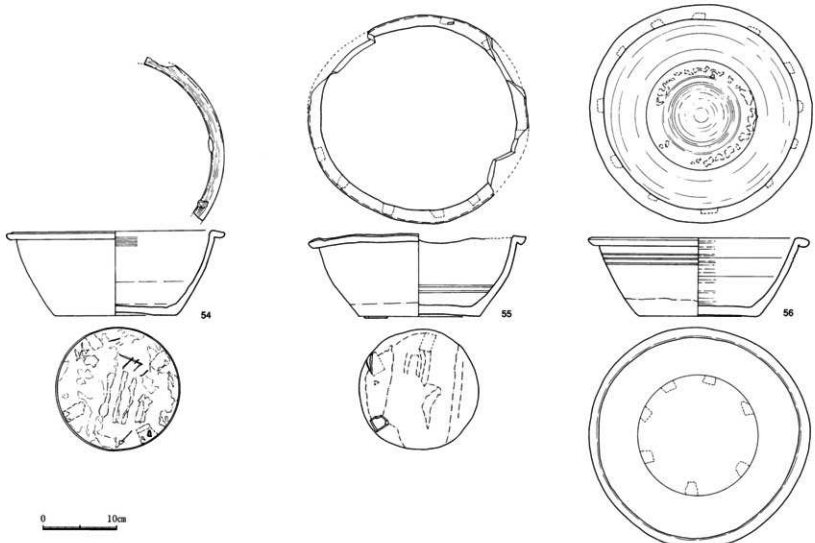
54～59は鉢である。口縁部の形状と外面の施釉位置から３タイプに分類した。54は口縁部が断面逆Ｌ字状を呈し，外面全体に施釉されるものである。55～57は口縁部が断面三角形を呈し，外面の施釉は，腰部まで掛かるものである。56・57は，口縁部下に２本ないし３本の沈線を有するものである。58はやや小型の鉢で，口縁部が断面Ｌ字状を呈し，外面には鉄釉が全面に掛けられる。59は注口が付く片口で，外面は腰部まで施釉される。底部に焼成後外側から空けられた穿孔が看取される。



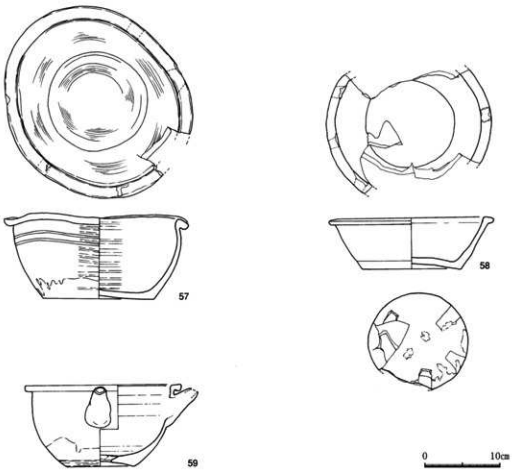
第25図　土坑３内出土遺物（１）



第26図　土坑３内出土遺物（２）



第27図　土坑３内出土遺物（３）



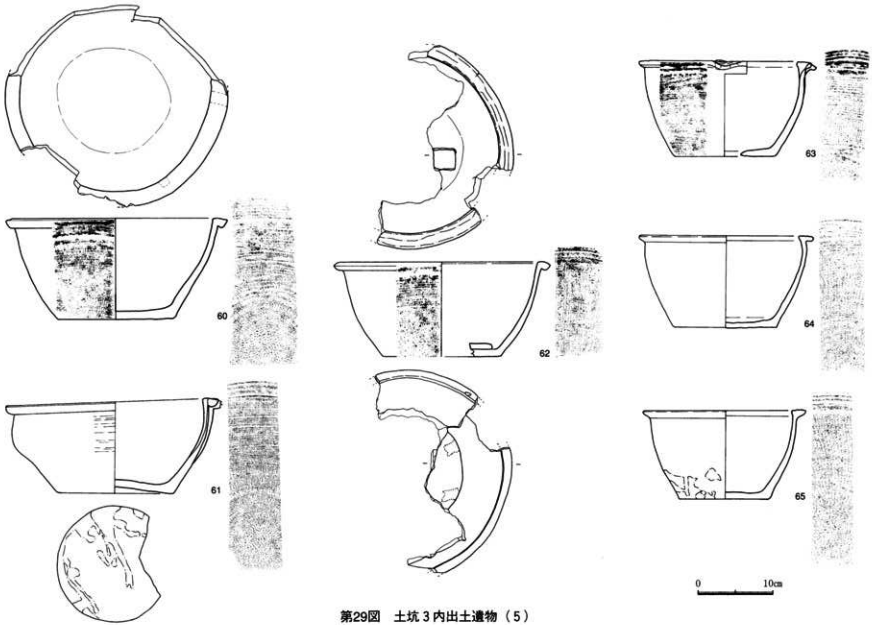
第28図　土坑３内出土遺物（４）

擂鉢（第29・30図）

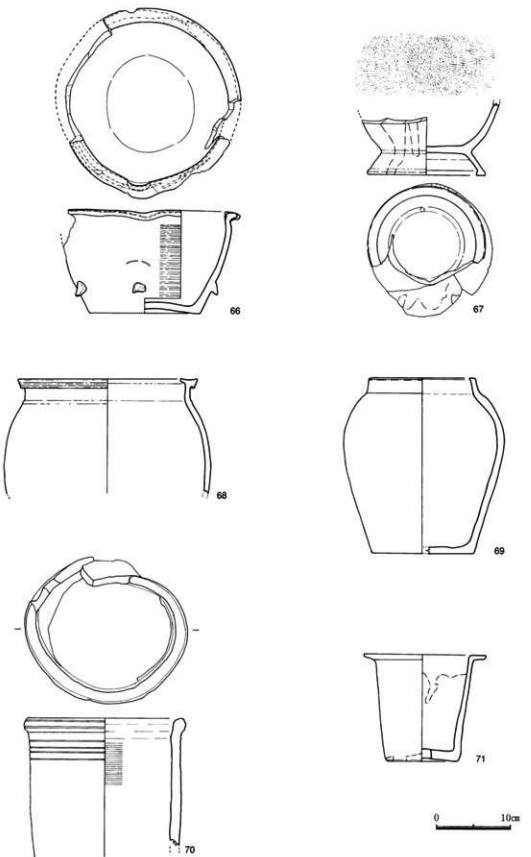
60～67は擂鉢である。60～62は口縁部が断面三角形を呈し，外面は全面施釉されるものである。60・61は口唇部にヒラゴマの目跡が残るもので，61は外底面の釉薬が掻き取られ，その上にガンギの環状部分と思われる目跡が看取される。62は内底面にコマが熔着している資料で，マガイゴマが押しつぶされたものと思われる。63～66はバケツ形状を呈する小型の擂鉢で，口縁部は断面Ｔ字状を呈し，口唇部にはヒラゴマの目跡が残る。66は外面腰部に円錐状の突起が巡る。67は高台が付くタイプの擂鉢である。口縁部は欠損しており形状等は不明である。

甕・壺・土管・植木鉢（第30図）

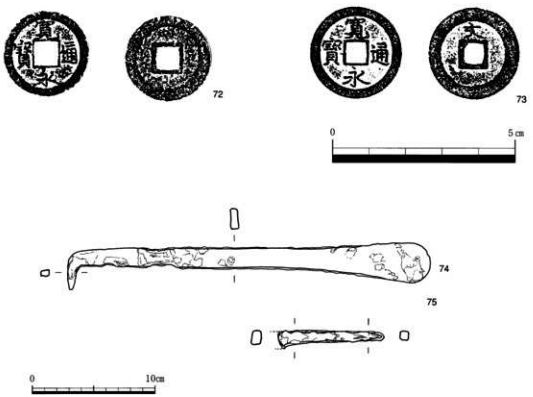
68は半胴形の甕で，内外面鉄釉が掛けられ，口唇部は掻き取られている。69は壺で，口唇部の釉薬は掻き取られていることから，蓋が被るものと思われる。70は土管と思われる資料で，焼け歪みが激しい上，焼成不良のため釉薬の熔けが悪く，素焼き状になっている。外面口縁部付近には４本の浅い沈線が看取される。71は植木鉢で，底部には穿孔が空けられている。外面は鉄釉が底部やや上まで掛けられ，内面は口縁部付近に若干掛かるが，基本的には無釉である。口唇部の釉薬も掻き取られている。



第29図　土坑３内出土遺物（５）



第30図　土坑３内出土遺物（６）



第31図　土坑３内出土遺物（７）

古銭・鉄製品（第31図）

72・73は寛永通宝である。73は裏に「文」の字が見られる。74・75は鉄製品であるが用途・時期共に不明である。

窯道具（第32図～第34図）

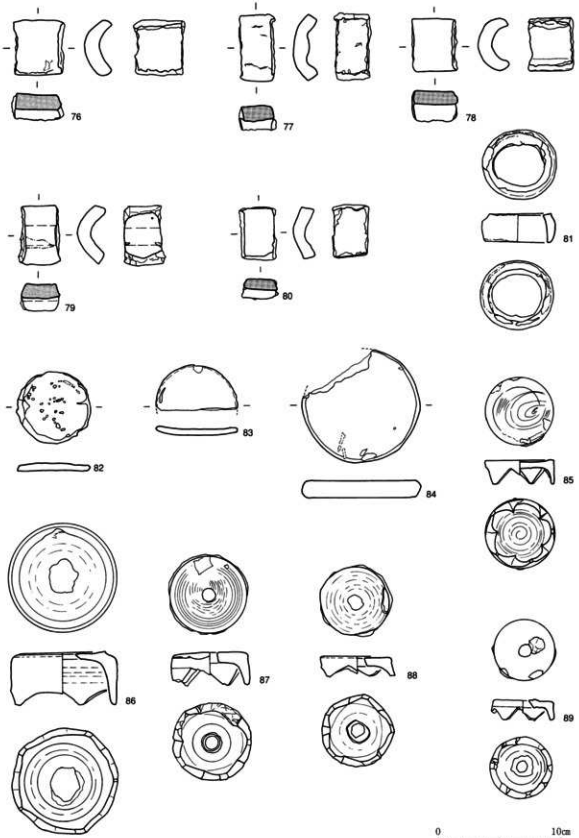
76～96は窯道具である。

76～80は苗代川で「マガイゴマ」と呼ばれるもので，擂鉢や甕をサヤ鉢代わりに利用し，その内部に製品を入れる際，内底に３ヶ所置き，製品と製品の熔着を防ぐために用いられたものである。そのため，両面にはアルミナが塗布されている。

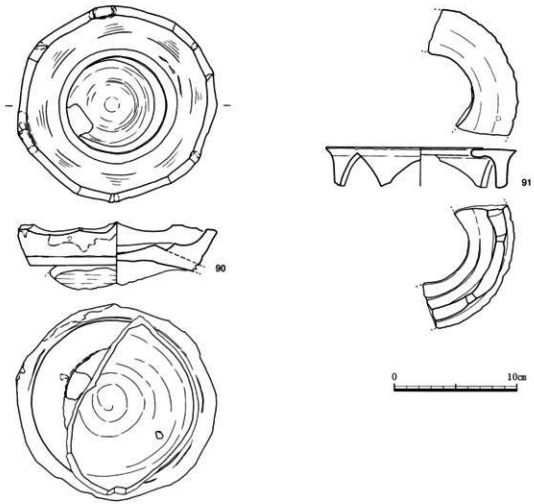
81はリング状を呈する陶製のハマである。

82～84はセンベイである。全て磁製で，82・83は上面に高台痕が残る。84はやや厚手のものである。

85～89は小型のガンギ（切高台付ハマ）である。85・87は磁製のもので，それ以外は陶製である。上面の中央に穿孔が施されるもの（86～89）と施されないもの（85）があり，穿孔が施されるもののうち，86は焼成後二次穿孔されている。



第32図　土坑３内出土遺物（８）



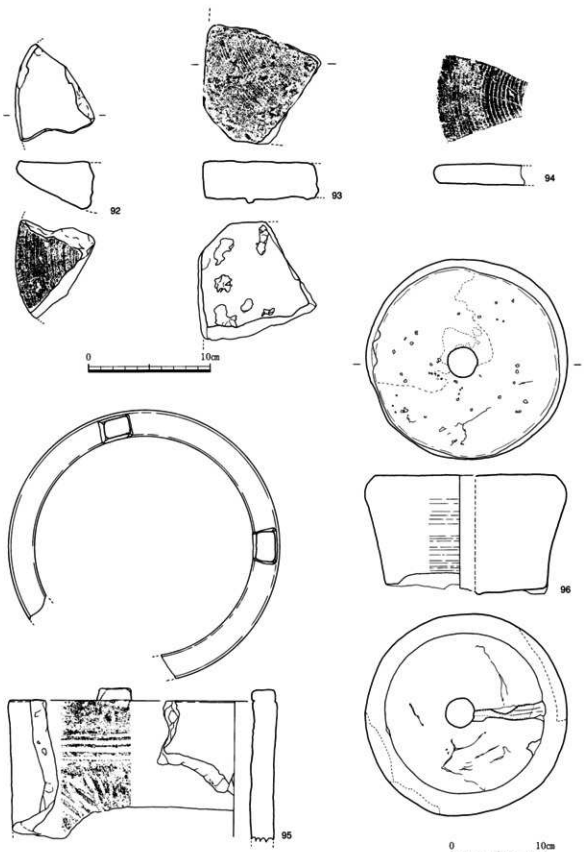
第33図　土坑３内出土遺物（９）

90・91は大型の陶製のガンギである。90は練鉢が熔着しており，ガンギの側面に，上に乗せた製品のものと思われる釉薬が付着していることから，この場合は，抉足部を上にして使用したと思われる。91は上面にアルミナの塗布が看取される。92は円盤形ハマの一部と思われる資料である。

93・94はサヤ鉢の蓋の一部と思われるもので，93はやや厚手で，隅丸方形の形状を呈する。

95は用途不明の資料で，口唇部にはヒラゴマが熔着する。内面には粗いヘラ状工具による削りが施される。サヤ鉢の可能性も考えられる。

96はツク（支柱）と思われる資料で，中心部は筒状に中空となり，一方の側面から中心に向けて穿孔が施されるものと思われる。



第34図　土抗３内出土遺物（10）

第６表　土坑３内出土遺物

レイアウト番号	器種	器種	器形	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
34	碗	−	−	D−２土坑３	−	6.0	3.6	茶褐色	内外面鉄・黒褐色	畳付以外総釉　見込にガンギの目跡	25
35	鉢	鉢物	半筒	D−２土坑３	14.2	13.4	7.1	淡褐色	内外面鉄・緑褐色	口唇部、口縁部内面無釉	25
36	乗燭	たんころ	−	D−２土坑３	3.6	2.8	5.1	黒褐色	内外面鉄・黒褐色	外底面無釉	25
37	蓋	蓋	−	D−２土坑３	9.4	−	1.7	白色	上面透明釉	磁製	25
38	土製品	土錘	−	D−２土坑３	長さ2.8	−	最大径4.1	黒褐色	−	−	25
39	メンコ	−	−	D−２土坑３	最大径3.8	−	厚さ1.3	赤褐色	上面鉄・淡黄緑色	陶器の転用	25
40	蓋	蓋	−	D−２土坑３	7.2	底径10.0	3.8	茶褐色	上面鉄・黒褐色	上面に重ね焼き跡あり	25
41	蓋	蓋	−	D−２土坑３	4.6	底径7.0	3.3	赤褐色	上面鉄・黒褐色	つまみ径1.7cm　上面に重ね焼き跡あり	25
42	蓋	蓋	−	D−２土坑３	3.8	底径5.8	3.3	黒褐色	上面鉄・黒色	つまみ径1.4cm	25
43	蓋	蓋	−	D−２土坑３	11.6	底径14.6	5.0	褐色	上面鉄・茶褐色	つまみ径1.8cm	25
44	蓋	蓋	−	D−２土坑３	10.0	底径13.0	3.9	黒褐色	上面鉄・黒色	つまみ径1.5cm	25
45	水注	土瓶	丸	D−２土坑３	8.8	10.0	12.3	黒褐色	内外面鉄・褐色	底面に煤付着　注口部欠損	25
46	水注	土瓶	−	D−２土坑３	10.8	11.0	13.1	黒褐色	内外面鉄・黒色	3足　煤付着	25
47	水注？	土瓶？	丸	D−２土坑３	−	6.4	(9.3)	褐色	内外面鉄・褐色	外底面に重ね焼き跡あり	26
48	水注	土瓶	丸	D−２土坑３	6.6	3.7	9.0	褐色	内外面鉄・褐色		26
49	水注	土瓶	丸	D−２土坑３	6.9	3.6	9.1	白色	内外面鉄・黒色	注口部欠損	26
50	水注	土瓶	平	D−２土坑３	7.0	3.7	8.8	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		26
51	皆？	羽釜？	−	D−２土坑３	18.4	4.6	10.6	黒褐色	内外面鉄・褐色	注口付きの羽釜	26
52	釜	羽釜	−	D−２土坑３	−	5.0	5.5	赤褐色	内外面鉄・褐色	外底は底部下まで施釉	26
53	鍋	土鍋	−	D−２土坑３	14.2	−	8.5	赤褐色	内外面鉄・淡緑色		26
54	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	25.5	16.7	11.4	黒褐色	内外面鉄・褐色	底面にヒラゴマの目跡あり　外底面釉薬掻き取る	27
55	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	−	−	11.2	黒褐色	内外面鉄・黒色	口唇部にヒラゴマの目跡あり　外底面にヒラゴマ付着　外底面釉薬掻き取る　側面は腰部まで施釉	27
56	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	29.7	16.0	10.7	黒褐色	内外面鉄・内面黒色・外面緑褐色	口唇部にヒラゴマの目跡あり　外底面にヒラゴマ付着　外底面釉薬掻き取る　側面は腰部まで施釉　洗い次第３本入る	27
57	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	−	15.2	11.6	黒褐色	内外面鉄・緑褐色	口唇部にヒラゴマの目跡あり　外底面にヒラゴマ付着　外底面釉薬掻き取る　側面は腰部まで施釉　洗い次第３本入る	28
58	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	22.5	13.5	7.0	黒褐色	内外面鉄・内面黒色・外面緑褐色	口唇部、外底面にヒラゴマの目跡あり	28
59	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	21.4	9.3	11.0	灰褐色	内外面鉄・内面褐色・外面淡黄緑色	外面は腰部まで施釉　底部に二次穿孔あり　注口が付く	28
60	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	30.2	26.2	13.8	茶褐色	内外面鉄	口唇部にヒラゴマの目跡あり　焼成不良	29
61	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	28.8	15.5	12.4	黒褐色	内外面鉄・黒色	口唇部にヒラゴマの目跡あり　外底面釉薬掻き取る	29
62	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	29.6	16.0	12.9	茶褐色	内外面鉄・黒褐色	口唇部外底面にヒラゴマの目跡あり　内底面にマガイゴマの一部付着	29
63	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	24.2	13.6	13.1	赤褐色	内外面鉄	底部に二次穿孔あり　焼成不良	29
64	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	23.8	14.0	12.5	赤褐色	内外面鉄・褐色	焼成不良	29
65	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	22.3	12.0	12.0	茶褐色	内外面鉄		29
66	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	25.5	15.2	14.1	赤褐色	内外面鉄・淡緑色	外面腰部に突起が7カ所付く　口唇部にヒラゴマの目跡あり	30
67	鉢	擂鉢	−	D−２土坑３	−	15.8	9.8	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	高台付　総釉	30
68	鍋	鍋	−	D−２土坑３	24.6	−	15.4	黒褐色	内外面鉄・緑褐色		30
69	壺	壺	−	D−２土坑３	14.5	14.4	24.0	茶褐色	外面鉄・黒色		30
70	土管？	土管？	−	D−２土坑３	16.4	−	−	茶褐色	？	焼き歪み　焼成不良	30
71	鉢	植木鉢	−	D−２土坑３	12.5	7.2	10.9	灰褐色	外面鉄・褐色		30
72	古銭	寛永通貨	−	D−２土坑３	径2.3	−	厚さ0.08	−	−		31
73	古銭	寛永通貨	−	D−２土坑３	径2.5	−	厚さ0.1	−	−	裏に「文」の文字あり	31
74	鉄製品	不明	−	D−２土坑３	長さ29.5	幅3.2	厚さ0.7	−	−		31
75	鉄製品	不明	−	D−２土坑３	長さ8.6	幅1.4	厚さ0.8	−	−		31
76	窯道具	マガイゴマ	−	D−２土坑３	長さ4.5	幅4.3	厚さ2.2	淡褐色	−	両面にアルミナ塗布	32
77	窯道具	マガイゴマ	−	D−２土坑３	長さ5.4	幅3.0	2.0	淡褐色	−	両面にアルミナ塗布	32
78	窯道具	マガイゴマ	−	D−２土坑３	長さ4.3	幅3.7	1.5	淡褐色	−	両面にアルミナ塗布	32
79	窯道具	マガイゴマ	−	D−２土坑３	長さ4.8	幅3.2	1.1	淡褐色	−	両面にアルミナ塗布	32
80	窯道具	マガイゴマ	−	D−２土坑３	長さ4.3	幅3.0	1.7	淡褐色	−	両面にアルミナ塗布	32
81	窯道具	リング型ハマ	−	D−２土坑３	4.8	5.2	2.3	淡褐色	−	陶製	32
82	窯道具	センベイ	−	D−２土坑３	最大径6.0	−	厚さ0.7	灰白色	−	磁製	32
83	窯道具	センベイ	−	D−２土坑３	最大径6.7	−	厚さ0.5	灰白色	−	磁製　上面に高台痕あり	32
84	窯道具	センベイ	−	D−２土坑３	最大径9.6	−	厚さ1.0	灰白色	−	磁製	32
85	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	5.6	−	1.9	白色	−	磁製	32
86	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	8.7	−	4.3	淡褐色	−	陶製　5足　上面に二次穿孔あり	32
87	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	6.1	−	2.7	白色	−	磁製　5足　上面糸切り	32
88	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	5.7	−	1.7	淡褐色	−	陶製　5足　上面糸切り	32
89	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	4.8	−	1.6	淡褐色	内外面鉄・褐色	陶製　5足	32
90	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	−	−	−	黒褐色	−	鉢の底部が焼着　7足	33
91	窯道具	ガンギ	−	D−２土坑３	15.4	−	3.2	茶褐色	−	上面にアルミナ塗布	33
92	窯道具	円盤形ハマ	−	D−２土坑３	−	−	3.9	灰褐色	−	上面にアルミナ塗布	34
93	窯道具	サヤ蓋？	−	D−２土坑３	−	−	3.1	灰褐色	−	隅丸方形	34
94	窯道具	サヤ蓋？	−	D−２土坑３	−	−	1.7	茶褐色	−		34
95	窯道具？	不明	−	D−２土坑３	29.4	−	−	淡褐色	−	口唇部にヒラゴマ付着　用途不明	34
96	窯道具？	ツク？	−	D−２土坑３	16.3	−	−	茶褐色	−	外面に煤付着	34

（3）遺物

近世以降の出土遺物については，陶磁器類が大量に出土した。磁器類は，碗・皿・小坏・蓋等，陶器類は碗・鉢・皿・蓋・土瓶・瓶類・練鉢・擂鉢・鍋・釜・甕・壺・植木鉢・土管等で，いわゆる薩摩焼の「黒もの」と呼ばれる資料である。その他土製品，窯道具，陶磁器の製作用具，窯壁と思われるトンバイなどが出土した。特に蓋・土瓶・練鉢・擂鉢・窯道具は，他の器種に比べて出土量が多い。また瓦・ガラス瓶等も若干出土しているが，近代以降のものと考えられるため除外した。

今回の調査では窯跡及び物原等は検出されていない。しかし，出土品の中に，焼け歪みが顕著で商品価値を持たないと思われる大量の同器形の土瓶・蓋・練鉢・擂鉢・甕・壺等や，使用痕の認められる大量の窯道具，窯壁片などがあり，その様相は窯，もしくは物原の存在を窺わせる。本遺跡の存在する東市来町美山地区は苗代川焼の産地として有名であり，その可能性は否定できない。

東市来郷土史（昭和63年発行）によると，調査区のほぼ同一地域に「雪ノ山窯」・「高山窯」という窯跡が記載されているため，今回の調査地点は雪ノ山窯跡もしくは高山窯跡の範囲を含む可能性が考えられる。一方で，外底面に煤が付着するなど，使用痕の残る陶磁器類や，日用品として用いられたと思われる苗代川以外から流入した陶磁器も見られる。よって，本遺跡の出土遺物は，消費遺跡的様相を示す資料と生産遺跡的様相を示す資料が混在するものと考えられるという前提で分類を試みた。

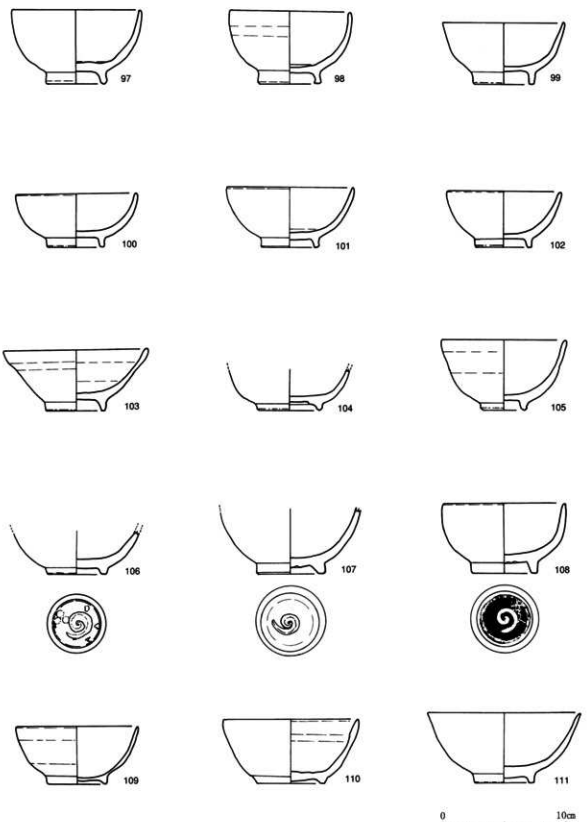
なお，器類・器種・器形については，『四谷三丁目遺跡』別冊江戸遺跡検出のやきもの分類（1991）を基本とし，細部については地域性や民俗例を考慮して独自の見解で分類した。また，釉薬・胎土の色調については客観性を持たせるため『新版標準土色帖（2000年版）』農林水産省（農林水産技術会議事務所）を参考にした。

生産遺跡的様相を示す遺物

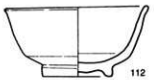
碗（第35図～第36図）

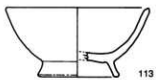
97～119は陶製の碗である。114を除き，釉薬は畳付以外鉄釉が総釉で掛けられている。114は畳付と高台内面が無釉である。器形としては，丸形が中心であるが，微妙に器形が異なり様々なタイプのものが見られる。

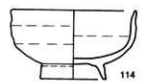
97～103は，高台内面の削りが深く，器壁が厚手の碗である。97は底部に焼成中に生じたと思われる亀裂が看取される。101は内底面に細かい傷が看取されることから，使用していたものと思われる。103は逆「ハ」の字に開く器形を呈するものである。104は，高台内面に段を有するタイプのものである。皿にも同じ形状を呈するもの（122）が見られる。105は高台径が小さいものである。106～108は高台内面に渦巻き状の削り（巴）が残されるもので，皿（120）にも見られる。106には高台内面に文字と思われる釘彫りも看取される。109～112は高台内面の削りが浅いものである。113は高台が「ハ」の字に開き，高台径も大きいタイプのものである。114は高台内面の削りが深く，内底面の広いものである。116は，口唇部の釉薬が禿げており，使用痕が残る。117～119は，白色の緻密な胎土に，茶褐色の光沢の強い鉄釉が掛けられたものである。118は117・119に比べて，高台の形状が華奢である。119は他の器種とも考えられるが，丸筒形の小碗としてここに分類した。

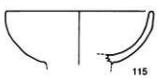


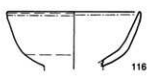
第35図　碗類（1）

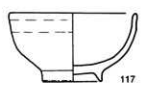


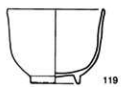








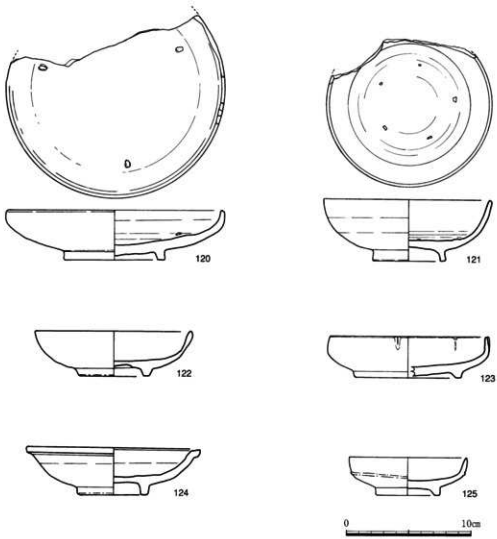




第36図　碗類（2）

第7表　碗

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
97	碗	中碗	丸形	4	10.6	5.8	6.8	灰褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉	35
98	碗	中碗	丸形	3	10.2	5.0	6.0	黒褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉	35
99	碗	中碗	丸形？	3	10.0	4.8	5.0	黄白色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉　焼成不良	35
100	碗	中碗	浅半球	C－3土坑2	9.9	5.3	4.4	黒褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉	35
101	碗	中碗	浅半球	表層	10.5	4.7	4.8	褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉　使用跡あり	35
102	碗	中碗	浅半球	C－3土坑2	9.2	4.5	4.5	褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉	35
103	碗	中碗	平形	C－3土坑2	11.8	4.8	5.0	灰褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉　使用跡あり	35
104	碗	－	－	4	－	5.0	3.3	黒褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉　高台内面に段あり	35
105	碗	中碗	？	表層	10.0	3.4	5.7	茶褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉	35
106	碗	－	－	2	－	4.8	－	黄灰色	鉄・緑褐色	畳付，高台内面は無釉　高台内面に巳あり	35
107	碗	－	－	表層	－	5.7	5.4	褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉　高台内面に巳あり	35
108	碗	中碗	丸形	表層	10.0	5.4	5.7	茶褐色	鉄・茶褐色	畳付以外総釉　高台内面に巳あり	35
109	碗	中碗	？	2	10.0	4.9	4.7	褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉　焼成不良	35
110	碗	中碗	？	表層	11.1	5.5	5.2	赤褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉	35
111	碗	中碗	？	D－3土坑2	12.5	4.9	5.7	褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉	35
112	碗	中碗	端反	4	11.6	5.6	－	褐色	鉄・緑褐色	畳付以外総釉	36
113	碗	中碗	？	1	11.6	6.8	6.6	黒褐色	鉄・黒色	畳付以外総釉	36
114	碗	中碗	？	C－3土坑2	10.2	5.4	5.6	赤褐色	鉄・緑褐色	畳付，高台内面は無釉	36
115	碗	中碗	浅半球	2	12.1	－	4.3	赤褐色	鉄・黒色		36
116	碗	中碗	？	3	11.0	－	4.3	灰色	鉄・緑褐色		36
117	碗	中碗	丸形	C－3土坑2	10.6	4.9	5.5	灰白色	鉄・茶褐色	畳付以外総釉	36
118	碗	小碗	丸形	4	8.0	3.4	4.2	白色	鉄・茶褐色	畳付以外総釉	36
119	碗	小碗	筒丸形	4	8.0	4.0	6.0	灰白色	鉄・茶褐色	畳付以外総釉	36



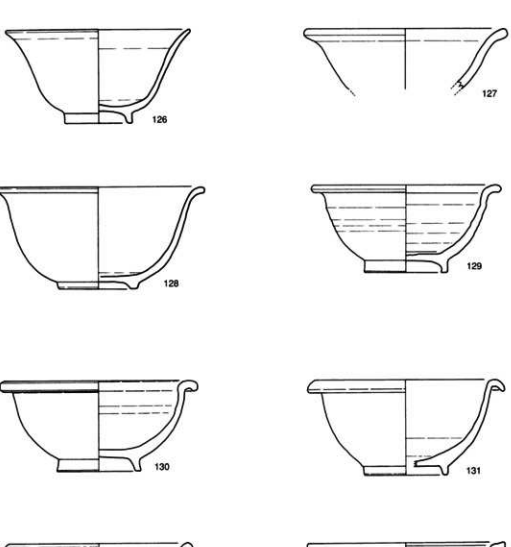
第37図　皿類

皿（第37図）

皿の出土量は多くない。釉薬は，鉄釉が畳付を除き総釉で掛けられるものが中心で，120・124は畳付と高台内面が無釉となっている。120は見込みにガンギの目跡が3ヶ所残り，高台内面には渦巻き状の削り（巴）が残される。121は見込みにガンギの目跡と使用痕が看取される。122は，高台内面に段を有するもので，見込みには使用痕が見られる。123は輪花皿である。124は厚手で粗雑な作りの皿である。125は焼成不良で釉薬の発色が悪く，外面には重ね焼きをした際の，他の製品の口唇部が熔着している。

第8表　皿

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	法量 口径	法量 底径	法量 器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
120	皿	中皿	丸形	−	17.8	4.1	4.0	茶褐色	鉄・褐色	見込みにガンギの目跡あり　畳付，高台内面無釉 高台内面に巴あり	37
121	皿	五寸皿	丸形	C−3土坑2	13.6	6.0	5.0	赤褐色	鉄・茶褐色	見込みにガンギの目跡あり　使用跡あり　畳付以外総釉	37
122	皿	五寸皿	丸形	C−3土坑2	12.8	5.9	3.7	茶褐色	鉄・茶褐色		37
123	皿	五寸皿	輪花	1	12.7	8.7	3.4	茶褐色	鉄・黒色	高台内面に他の遺物の付着あり　畳付以外総釉	37
124	皿	五寸皿	折縁	2	14.2	5.8	3.9	茶褐色	鉄・褐色		37
125	皿	小皿	丸形	2	9.5	5.2	3.1	茶褐色	鉄・緑褐色	側面に重ね焼きの跡あり　畳付以外総釉　焼成不良	37

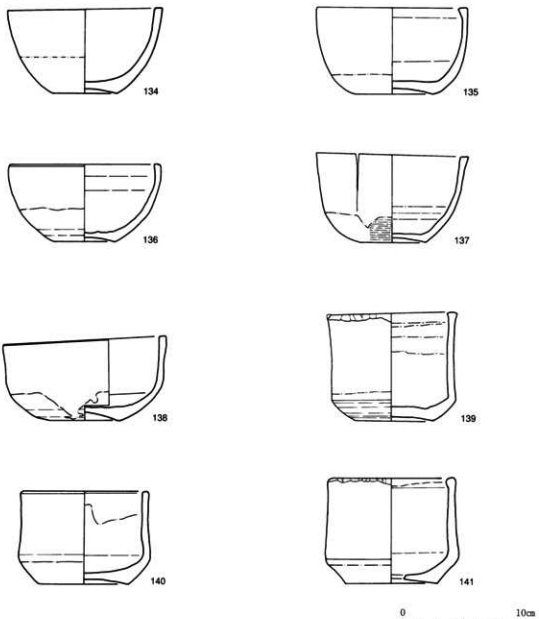


第38図　鉢類（1）

鉢類（第38図～第39図）

鉢（126～133）

126～132は民俗例で飯鉢に該当すると思われるものである。126～129は口縁部が外反するもの，130～132は口縁部が逆「し」の字状に垂れ下がるものである。126・130・131は畳付以外鉄釉が総釉で掛けられているが，128・129は畳付と高台内面が露胎する。133は外面中位から底部にかけて露胎する。釉薬が外面は中位まで掛けられるもので，底部はやや上げ底を成す。



第39図　鉢類（2）

ソバキ（ソバ掻き）（134～138）

蕎麦粉に砂糖を入れ，熱湯を注いで掻き回してから食べるものを鹿児島では「ソバキ」と言うが，134～138はソバキをつくる鉢である。137は焼成時に入ったと考えられる亀裂が体部に看取され，138は体部に焼け歪みが見られる資料である。

灰吹（139～141）

139・141は口唇部にパイプによる叩打痕が残っていることから，使用していたものと思われる。140は底部に二次穿孔が施されている。

第９表　鉢

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
126	鉢	中鉢	3	15.1	5.5	7.6	褐色	鉄・黒褐色	畳付以外総釉	38
127	鉢	中鉢	4	16.5	－	5.0	褐色	鉄・黒褐色		38
128	鉢	中鉢	C－3土坑2	17.2	6.3	8.4	茶褐色	鉄・黒褐色	畳付，高台内面は無釉	38
129	鉢	中鉢	4	16.0	6.8	7.0	赤褐色	鉄・緑褐色	畳付，高台内面は無釉	38
130	鉢	中鉢	3	7.1	6.8	7.3	黒褐色	鉄・淡褐色	畳付以外総釉	38
131	鉢	中鉢	3	16.0	6.8	7.7	黒褐色	鉄・黒褐色	畳付以外総釉	38
132	鉢	中鉢	表層	12.8	－	3.9	黒褐色	鉄・黒褐色		38
133	鉢	中鉢	2	16.0	5.5	6.3	茶褐色	鉄・黒褐色	口唇部は釉を掻き取る	38
134	鉢	ソバガキ	C－3土坑2	12.4	5.2	6.9	灰褐色	鉄・黒褐色	口唇部は釉を掻き取る	39
135	鉢	ソバガキ	－	12.4	7.6	7.0	灰褐色	鉄・褐色	口唇部は釉を掻き取る	39
136	鉢	ソバガキ	表層	12.4	5.0	6.3	茶褐色	鉄・褐色	口唇部は釉を掻き取る	39
137	鉢	ソバガキ	2	12.4	5.2	7.4	茶褐色	鉄・褐色	口唇部は釉を掻き取る	39
138	鉢	ソバガキ	C－3土坑2	13.2	5.3	6.8	茶褐色	鉄・褐色	口唇部は釉を掻き取る　外面に歪み	39
139	鉢	灰吹	C－3土坑2	10.6	6.3	7.0	赤褐色	外面鉄・緑褐色	口唇部に叩打跡あり	39
140	鉢	灰吹	表層	10.6	7.4	7.6	黒褐色	外面鉄・緑褐色		39
141	鉢	灰吹	表層	10.2	7.4	8.6	褐色	外面鉄・黒褐色	底部に二次穿孔あり　口唇部に叩打跡あり	39

蓋（第40図～第43図）

遺跡からは大量の蓋が出土した。窯詰方法としては，163・168のように重ね焼きされていたと思われ，外面天井部に，上に重ねた蓋の口唇部痕が残るものが多く見られる。146は大型の蓋の上面に小型の蓋を３個並べて焼成したと思われる資料である。また，142・143は，上面にマガイゴマの目跡が残るもので，153はヒラゴマが熔着したものである。つまみの形状から蓋A～蓋Dに分類した。

蓋A（142・143）

外面天井部に紐状のつまみが付くものである。民俗例より，鍋類の蓋に用いられたと考えられる。

蓋B（145～163）

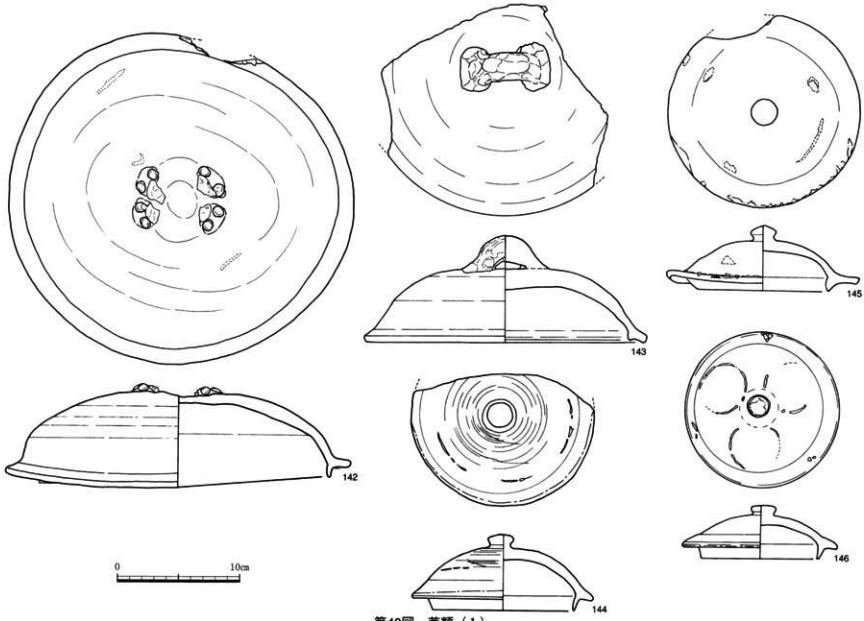
外面天井部にボタン型のつまみが付くものである。民俗例から，鍋類・土瓶類・壺類等に用いられていたと考えられる。

蓋C（164～168）

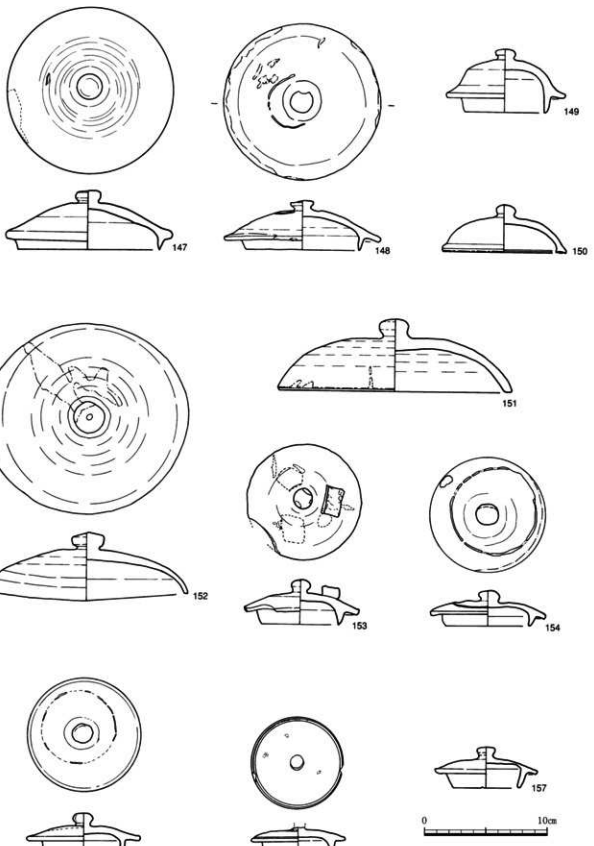
つまみを持たないタイプのものである。壺類の蓋として使用されたと考えられる。

蓋D（170～172）

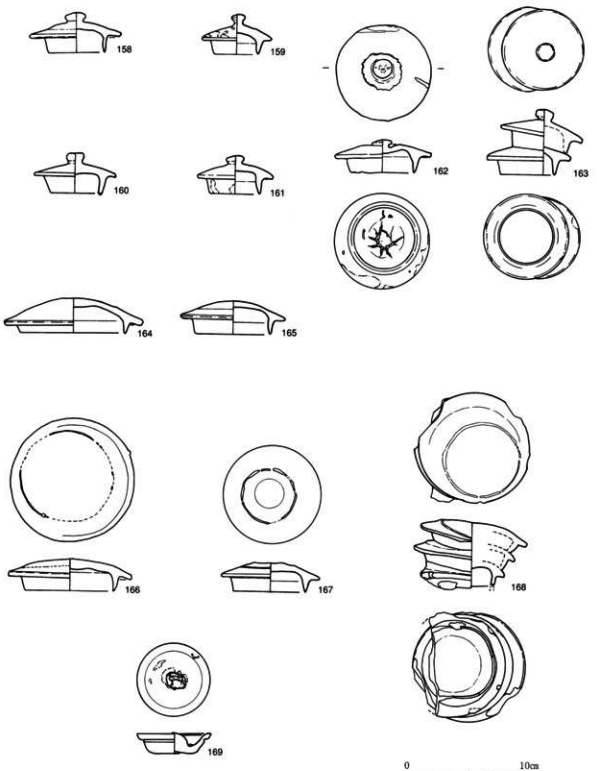
天井部に高台状のつまみを有する蓋で，鍋類に使用されたと考えられる。170は口唇部に団子目が付着した資料で，鉄釉は上面は肩部まで掛けられ，つまみ部は露胎する。内面は口縁部上付近まで施釉され，天井部は露胎する。171は鉄釉が外面に，170と同様に掛けられているが，内面は全面施釉されるものと思われる。



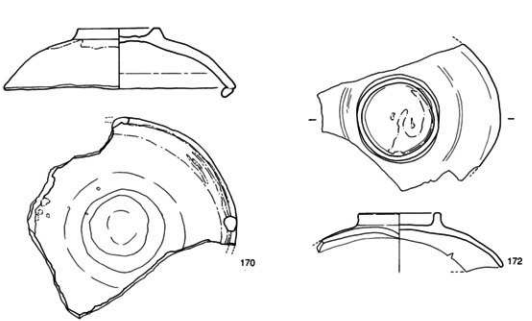
第40図　蓋類（1）



第41図　蓋類（2）



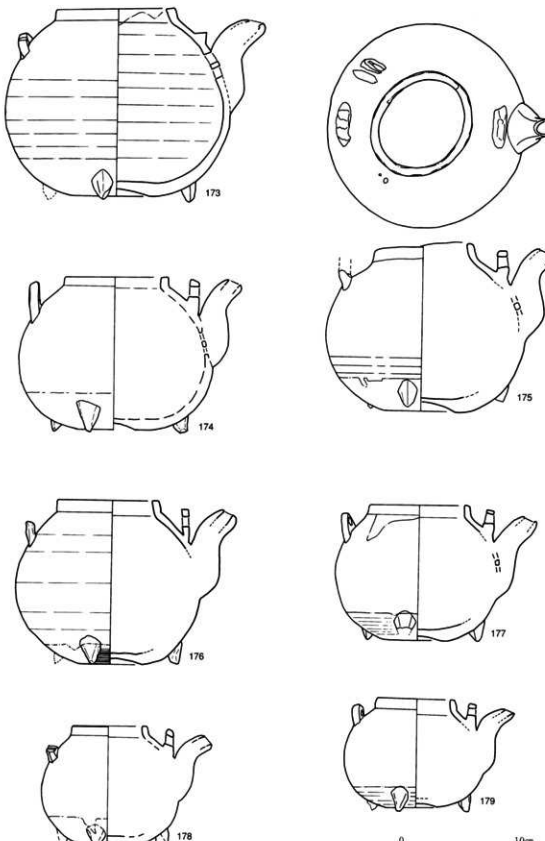
第42図　蓋類（3）



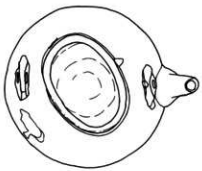
第43図　蓋類（4）

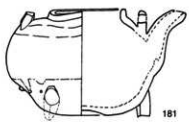
第10表　蓋

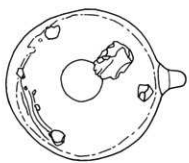
レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 口径	底径	つまみ径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
142	蓋	蓋	4	25.2	28.2	–	8.4	緑褐色	上面鉄・褐色	つまみ欠損	40
143	蓋	蓋	–	22.4	22.9	7.3	8.7	茶褐色	上面鉄・茶褐色	天井部に煤付着	40
144	蓋	蓋	2	11.4	14.7	2.1	6.1	黒褐色	上面鉄・褐色	上面に重ね焼きの跡あり	40
145	蓋	蓋	3	10.7	15.7	2.1	4.3	茶褐色	上面鉄・黒色	上面に3ヶ所　重ね焼きの跡あり	40
146	蓋	蓋	2	9.7	12.7	2.0	4.3	黒褐色	上面鉄・黒色	上面に丸形の目跡が3ヶ所あり	40
147	蓋	蓋	4	11.4	13.6	2.1	4.8	黒褐色	上面鉄・茶褐色		41
148	蓋	蓋	–	9.4	12.8	1.9	4.0	黒褐色	上面鉄・黒褐色		41
149	蓋	蓋	2	6.6	9.7	1.6	5.2	赤褐色	上面鉄・黒褐色	上面に重ね焼きの跡あり	41
150	蓋	蓋	C–3土坑2	8.4	–	1.5	3.8	赤褐色	上面鉄・緑褐色		41
151	蓋	蓋	C–3土坑2	19.0	–	2.3	5.9	赤褐色	上面鉄・黒褐色	庇部なし	41
152	蓋	蓋	4	16.4	–	2.6	5.6	茶褐色	上面鉄・褐色	庇部なし	41
153	蓋	蓋	表層	6.2	9.4	1.5	3.6	褐色	上面鉄・赤褐色	上面にヒラゴマ付着	41
154	蓋	蓋	2	6.6	9.4	1.9	2.9	黒褐色	上面鉄・黒褐色	上面に重ね焼きの跡あり	41
155	蓋	蓋	表層	6.4	9.3	1.6	3.4	黒褐色	上面鉄・茶褐色	上面に重ね焼きの跡あり	41
156	蓋	蓋	1	5.5	7.5	1.1	2.4	黄褐色	上面鉄・緑褐色	つまみ欠損　焼成不良	41
157	蓋	蓋	2	5.4	8.2	1.4	3.3	褐色	上面鉄・茶褐色		41
158	蓋	蓋	2	4.7	7.5	1.7	3.3	黒褐色	上面鉄・褐色		42
159	蓋	蓋	1	3.6	5.7	1.1	3.2	黒褐色	上面鉄・黒褐色		42
160	蓋	蓋	2	4.2	6.6	1.4	3.4	黒褐色	上面鉄・褐色		42
161	蓋	蓋	2	3.9	6.2	1.4	3.1	黒褐色	上面鉄・茶褐色		42
162	蓋	蓋	2	5.2	7.7	1.5	2.6	赤褐色	上面施釉	重ね焼きの跡あり	42
163	蓋	蓋	2	–	–	–	–	灰褐色	上面鉄・褐色	2個体熔着	42
164	蓋	蓋	2	8.6	11.3	–	2.8	茶褐色	上面鉄・褐色	つまみなし	42
165	蓋	蓋	2	6.1	8.0	–	2.7	赤褐色	上面鉄・褐色	つまみなし	42
166	蓋	蓋	2	7.2	10.0	–	2.6	赤褐色	上面鉄・黒褐色	重ね焼きの跡あり　つまみなし	42
167	蓋	蓋	2	5.9	7.9	–	2.3	黄褐色	上面鉄・黒褐色	重ね焼きの跡あり　つまみなし	42
168	蓋	蓋	表層	–	–	–	–	黒褐色	上面鉄・黒褐色	つまみなし　3個体熔着	42
169	蓋	おとし蓋	C–3土坑2	–	6.0	–	1.7	赤褐色	上面鉄・黒褐色		42
170	蓋	鍋蓋	2	–	18.8	6.7	4.9	褐色	鉄・緑褐色	上面中位から内面口縁付近まで施釉 口縁部にダンゴ目が付着	43
171	蓋	鍋蓋	表層	–	14.5	5.8	3.1	黒褐色	鉄・褐色	上面中位から内面にかけて施釉	43
172	蓋	鍋蓋	表層	–	16.8	6.6	4.9	褐色	鉄・褐色	つまみ内と蓋内面は無釉	43

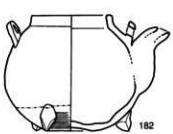


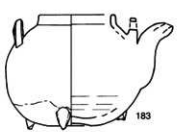
第44図　水注類（1）土瓶

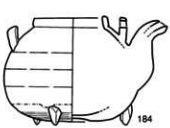


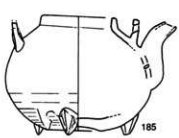


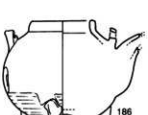


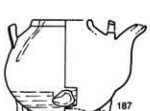




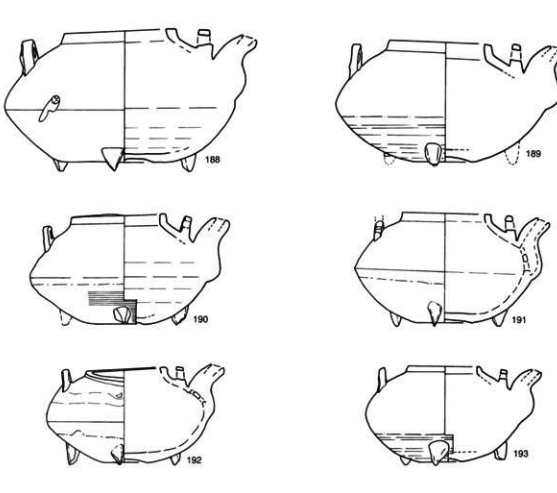








第45図　水注類（2）土瓶

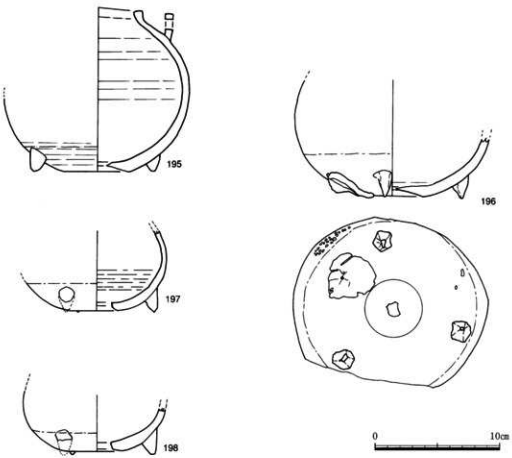


第46図　水注類（３）土瓶

土瓶（第44図～第46図）

土瓶は蓋と共に大量に出土している。丸形の器形を呈するものとソロバン玉形状を呈する平形のものに大別できる。中には外底面に煤が付着し，使用が認められるものや，焼成後底部に二次穿孔を施したものも見られる。出土量は個体数を数えられるものだけでも165個体出土しており，大量に生産されていたものと思われる。丸形とソロバン玉形の割合は丸形が約８割を占める。

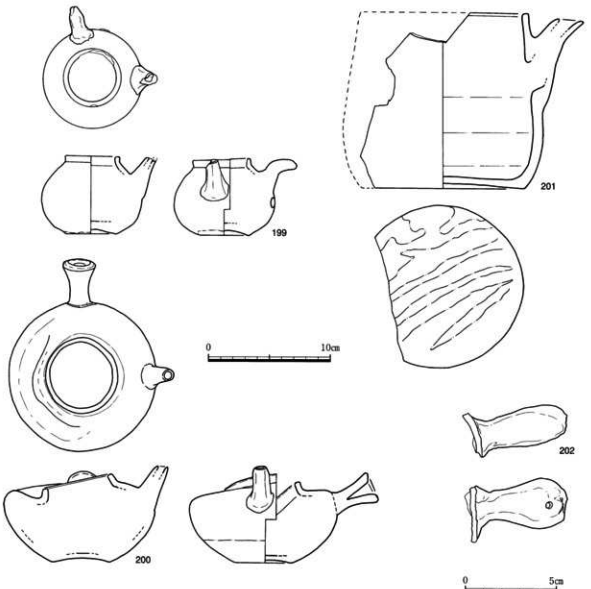
どちらのタイプも注口はＳ字状の溜め口を呈し，端部は丸く作られ，注口内の茶止穴は３か所設けられている。底部は，中心部でやや上げ底となりその周りにはヘラ状工具で調整された細い沈線が看取される。また，３ヶ所に円錐状の足が付けられ，注口に近い足は注口に対してやや右寄りに付く。釉薬は内外面とも鉄釉が掛けられ，外面は脚部上位付近まで施釉され，底部は露胎



第47図　水注類（4）土瓶

を呈する。内面は白濁した鉄釉と思われる釉が全体に掛かる。口唇部の釉薬は掻き取られている。注口と口縁部の間とその対角線上には，把手を付けるための型抜きで作られた三角形の耳が付けられている。窯詰方法としては，土瓶の口唇部の上に別の土瓶の底部をのせて数段の重ね焼きをしたものと思われ，底部に口唇部の跡が残るものや，底部の露胎部分が重ねた口唇部の内側に入り込む部分と外に出る部分で色調が異なるもの等が見られる。190・186・179は外底面に煤が付着しており使用していたものと思われる。

195～198は，全体の器形が不明であるが，丸形の土瓶の一部であると思われる。焼成後底部に外側から二次穿孔が施されている。



第48図　水注類（５）急須・水注

水注（第48図）

円柱状の器形を呈する水注で，出土品の中で器形が判別できたものはこの１点のみであった。生活用品として使用されていた可能性もある。内外面には鉄釉が掛けられ，口唇部は掻き取られている。外底部に釉薬を掻き取った跡が縞状に残り，ガンギの環状部分の目跡がわずかに看取できる。注口内の穿孔は一つで，土瓶で見られるような把手を付ける耳は見られないが，注口の反対側に把手部が付くものと考えられる。

急須（第48図）

出土品の中で急須と確認できたものは二点のみであった。内外面には鉄釉が掛けられ，口唇部は掻き取られる。外面は腰部まで施釉され，底部は露胎している。口縁部から体部にかけて，焼成時の変形が見られる。

第11表　水注

レイアウト番号	器類	器種	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
173	水注	土瓶	丸形	C－3土坑2	9.6	6.4	15.8	赤褐色	内外面鉄・黒色		44
174	水注	土瓶	丸形	3	8.4	4.3	12.7	赤褐色	内外面鉄・茶褐色	側面に焼成時に入ったと思われる亀裂が入る	44
175	水注	土瓶	丸形	3	－	5.5	13.6	茶褐色	内外面鉄・褐色	口径部変形	44
176	水注	土瓶	丸形	3	8.6	5.0	13.4	赤褐色	内外面鉄・褐色		44
177	水注	土瓶	丸形	3	8.2	5.2	11.0	茶褐色	内外面鉄・褐色	口縁部変形	44
178	水注	土瓶	丸形	表層	6.1	4.5	10.1	赤褐色	内外面鉄・黒褐色		44
179	水注	土瓶	丸形	C－3土坑2	6.2	3.6	9.1	赤褐色	内外面鉄・褐色	外底面に煤付着	44
180	水注	土瓶	丸形	2	(6.6)	3.8	9.9	赤褐色	内外面鉄・褐色	側面に他の製品付着　口縁部変形	45
181	水注	－	丸形	4	6.2	3.5	8.9	赤褐色	内外面鉄・黒色	底部に粘土塊が付着	45
182	水注	土瓶	丸形	表層	6.7	3.1	9.4	赤褐色	内外面鉄・褐色		45
183	水注	土瓶	丸形	3	6.3	3.3	9.3	茶褐色	内外面鉄・褐色	底部に重ね焼きの跡あり	45
184	水注	土瓶	丸形	3	6.0	3.0	8.9	赤褐色	内外面鉄・褐色	底部に重ね焼きの跡あり	45
185	水注	土瓶	丸形	表層	6.1	4.0	9.7	茶褐色	内外面鉄・黒色		45
186	水注	土瓶	丸形	3	5.0	3.0	8.5	黒褐色	内外面鉄・褐色	外底面に煤付着　注口は欠損	45
187	水注	土瓶	丸形	－	4.4	3.0	8.1	茶褐色	内外面鉄・茶褐色		45
188	水注	土瓶	平形	3	9.1	4.6	11.6	赤褐色	内外面鉄・茶褐色	側面に窯傷あり　底部中央に歪みによる亀裂が入る　底部に重ね焼きの跡あり	46
189	水注	土瓶	平形	表層	－	(4.6)	10.3/M	褐色	内外面鉄・黒色		46
190	水注	土瓶	平形	3	7.7	4.0	9.0	茶褐色	内外面鉄・黒色	底面に煤付着　灰かぶり	46
191	水注	土瓶	平形	4	7.2	4.5	9.3	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		46
192	水注	土瓶	平形	－	6.6	3.7	8.2	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	口縁部付近変形	46
193	水注	土瓶	平形	2	－	3.5	7.8	茶褐色	内外面鉄・茶褐色		46
194	水注	土瓶	平形	3	－	3.0	8.1	茶褐色	内外面鉄・茶褐色	外底に窯傷あり　底部に重ね焼きの跡あり	46
195	水注	土瓶	丸形	表層	－	4.8	13.0	黒褐色	内外面鉄・黒褐色	注口は欠損　底部に二次穿孔あり	47
196	水注	土瓶	丸形	3	－	5.0	－	赤褐色	内外面鉄・黒褐色	底部に二次穿孔あり，また他の製品が付着	47
197	水注	土瓶	丸形	表層	－	3.6	－	赤褐色	内外面鉄・褐色	底部に二次穿孔あり	47
198	水注	土瓶	丸形	3	－	3.8	－	赤褐色	内外面鉄	焼成不良のため発色が悪い　底部に二次穿孔あり	47
199	水注	急須	－	C－3土坑2	4.4	4.2	6.1	茶褐色	内外面鉄・褐色		48
200	水注	急須	－	－	6.1	4.6	7.8	黒褐色	内外面鉄・褐色	口縁部変形	48
201	水注	水注	－	C－3土坑2	13.8	13.2	14.2	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	外底面釉の掻き取り	48
202	水注	把手	－	－	最5.6	幅2.8	－	褐色	鉄・緑褐色	下部に穿孔あり	48

鍋類（第49図）

203～218は土鍋である。把手を付けるための耳が口縁部脇に一対付けられており，付け根には鉄鍋の留め具を模造したと思われる装飾が付けられる（203・207・210）。窯詰方法としては，鍋の口唇部に別の鍋の底部をのせて数段の重ね焼きをしたものと思われ，底部に口唇部痕が残るもの（213）や，底部の露胎部分が重ねた口唇部の内側に入り込む部分と外に出る部分で胎土の色調が異なるもの（203・210）が見られる。器形や大きさ，民俗例などから土鍋A～土鍋Dに分類した。

土鍋A（203～209）

民俗例では山茶家と呼ばれるものである。203～206は片口が付くタイプの資料である。

204は外底面に煤が付着しており使用されていたものと思われる。207～209は片口が付かない丸形の器形を呈するものである。209は底部に焼成後外側から空けられた二次穿孔が看取される。

土鍋B（210～212）

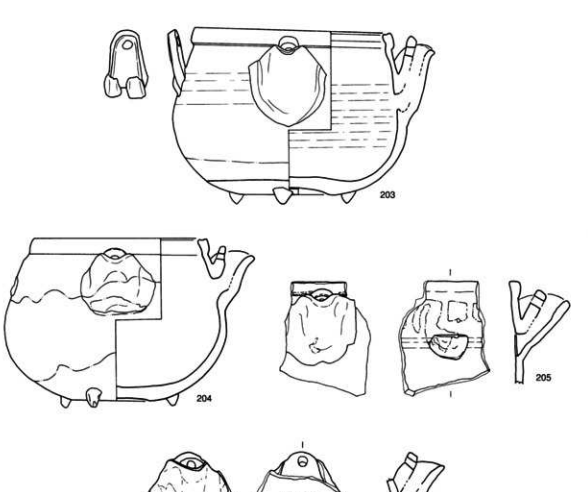
民俗例でお初茶家と呼ばれる小形の土鍋である。

土鍋C（213）

足も耳も付かないタイプのものである。（土鍋に分類したが，他の用途も考えられる。）

土鍋D（214～218）

民俗例でも土鍋と呼ばれるタイプのものである。鉄釉が内面全体と外面腰部まで掛けられ，蓋の当たる口唇部は掻き取られている。破片が小さく全体の器形がわかりにくいものが多いが，216・218のように一対の耳が付くと思われる。218は底面に3足の脚が付くものである。



第49図　鍋類（1）土鍋

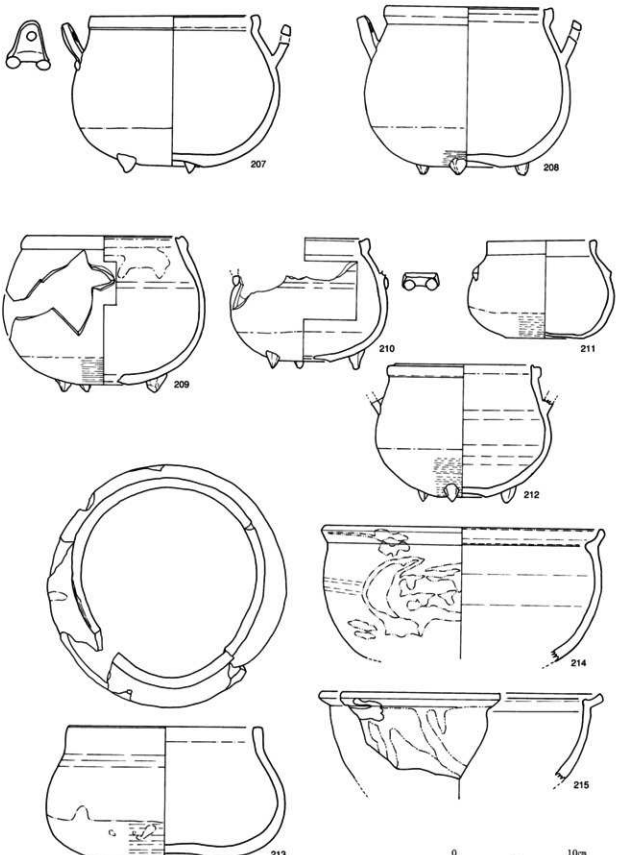
釜類（第51・52図）

羽釜（219～224）

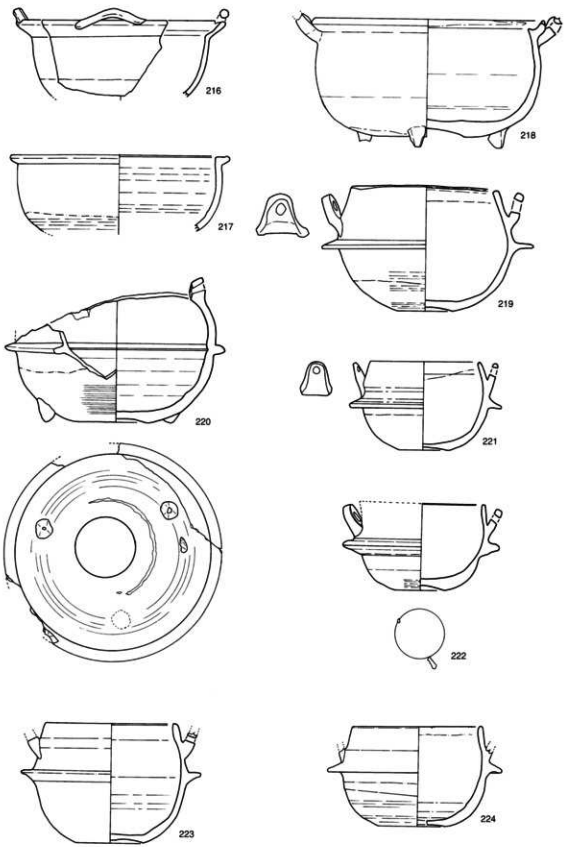
釉薬は鉄釉が内面全体と外面は底部下位まで掛けられるが，223は底部上面まで施釉される。220は底面に3足の脚が付く。224は底面に焼成後外側から空けられた二次穿孔が看取される。

甑（225・226）

半胴形の器形を呈し，側面の上位に一対の把手が付けられる。底面には中央に1ヶ所とその周りに7ヶ所の穴が空けられている。施釉は外底面と口唇部以外鉄釉が掛けられる。226はすでに空いていたと思われる中央の穴をさらに外側から力を加えて大きく加工しているものと思われる。



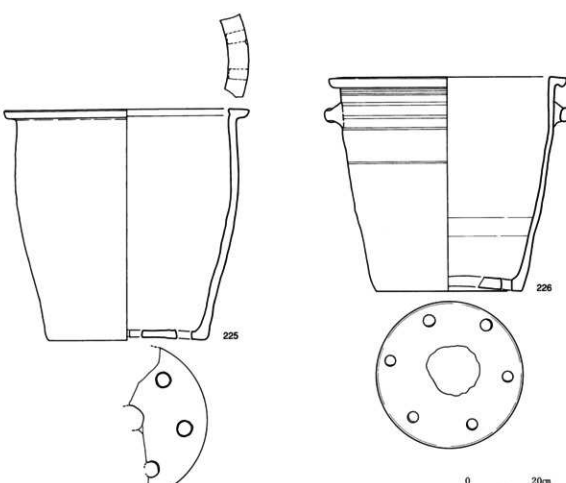
第50図　鍋類（２）土鍋



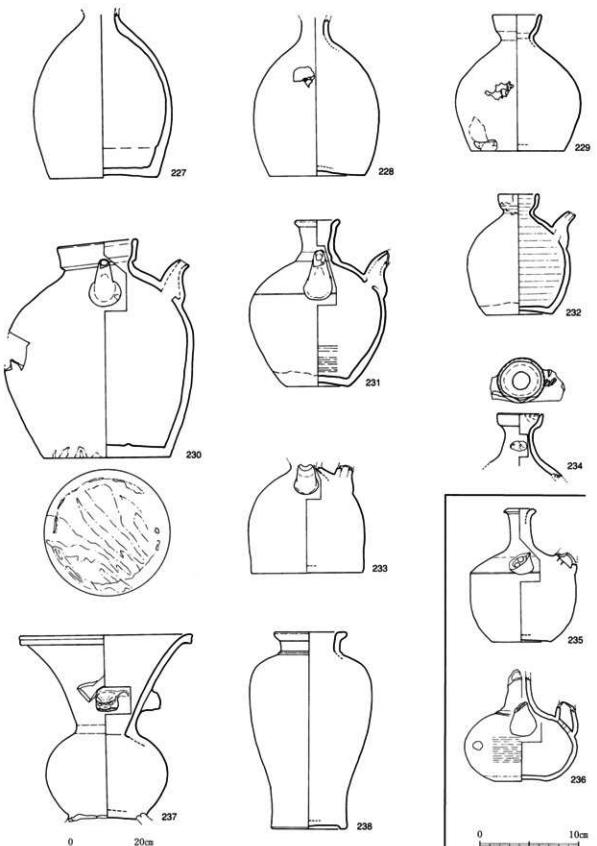
第51図　鍋類（3）土鍋・釜鍋（1）羽釜

第12表　鍋・釜

レイアウト番号	器種	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
203	鍋	土師	1	16.1	6.6	14.3	赤褐色	内外面鉄・褐色		49
204	鍋	土師	C−3土坑2	14.3	6.3	13.6	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	底部に煤付着	49
205	鍋	土師	4	−	−	−	褐色	内外面鉄・緑褐色	片口部のみ	49
206	鍋	土師	4	−	−	−	−	内外面鉄・黒褐色	片口部のみ	49
207	鍋	土師	表層	13.8	4.8	12.8	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	焼成不良　耳部の付け根に金属製品の止め金の構造と思われる装飾が付いている	50
208	鍋	土師	C−3土坑2	13.4	5.4	13.6	黒褐色	内外面鉄・褐色	外底面に重ね焼きのため色調ムラあり	50
209	鍋	土師	C−3土坑2	12.7	3.9	12.6	赤褐色	内外面鉄・赤褐色	底部に二次穿孔あり	50
210	鍋	土師	3	(10.4)	4.1	10.6	赤褐色	内外面鉄・黒褐色	底部に二次穿孔あり	50
211	鍋	土師	D−3土坑2	8.8	6.0	8.0	赤褐色	内外面鉄・赤褐色	焼成不良	50
212	鍋	土師	C−3土坑2	12.4	3.8	11.2	赤褐色	内外面鉄・黒褐色		50
213	鍋	土師	C−3土坑2	15.8	7.0	10.8	褐色	内外面鉄・黒褐色		50
214	鍋	土師	4	22.6	−	−	褐色	内外面鉄・褐色		50
215	鍋	土師	1	22.8	−	−	褐色	内外面鉄・褐色		50
216	鍋	土師	−	17.0	−	−	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		51
217	鍋	土師	2	17.8	−	6.1	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		51
218	鍋	土師	C−3土坑2	18.7	6.1	10.4	褐色	内外面鉄・黒褐色		51
219	釜	羽釜	表層	12.2	4.2	10.0	赤褐色	内外面鉄・黒褐色	外面は羽根部上面まで施釉　重ね焼きのため色調ムラあり	51
220	釜	羽釜	1	−	50.1	11.8	黒褐色	内外面鉄・褐色	外面は羽根部やや下から露胎　底部に重ね焼きの跡あり	51
221	釜	羽釜	3	8.8	3.8	7.1	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	耳付き　羽根部やや下まで施釉	51
222	釜	羽釜	2、表層	10.4	4.0	7.0	茶褐色	内外面鉄・褐色		51
223	釜		2	10.4	5.5	9.8	黒褐色	内外面鉄・緑褐色	羽根部上面まで施釉　底部に重ね焼きのため色調ムラあり	51
224	釜	羽釜	表層	10.7	4.8	8.1	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	外面は羽根部ややや下から施釉　底部に二次穿孔あり　耳は欠損	51
225	釜	甑	4	33.2	21.2	31.4	褐色	内外面鉄・褐色	底部中央に穿孔１ヶ所、周辺に７ヶ所あり	52
226	釜	甑	C−3土坑2	32.2	19.8	28.9	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	底部に二次穿孔あり	52



第52図　釜類（２）



第53図　瓶類

瓶類（第53図）

227～229は徳利，231～233は民俗例で雲助と呼ばれる徳利で，注口が付く。234は，徳利の上部で，頸部に貝目が残る資料である。235・236は薩摩で「からから」と呼ばれる焼酎用の酒注である。237・238は仏花器と思われる資料で，237は頸部に一対の獅子頭が装飾され，高台が付くものと思われるが欠損している。238は梅瓶形を呈するものである。どちらも1点のみの出土であり，生活用品である可能性も考えられる。

第13表　瓶

レイアウト番号	器類	器種	出土区/層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
227	瓶	徳利	C－3土坑2	－	14.4	(22.3)	褐色	鉄・緑褐色	外底面の釉薬は掻き取る	53
228	瓶	徳利	4	－	13.2	21.3	茶褐色	鉄・緑褐色	外底面の釉薬は掻き取る	53
229	瓶	徳利	－	6.6	12.6	18.6	茶褐色	鉄・緑褐色	外底面の釉薬は掻き取る	53
230	瓶	雲助徳利	C－3土坑2	－	17.2	(26.6)	茶褐色	鉄・褐色	外底面の釉薬は掻き取る　外底面にガンギの目跡あり	53
231	瓶	雲助徳利	表層	6.1	8.4	22.5	赤褐色	鉄・緑褐色	外面は腰部まで施釉	53
232	瓶	雲助徳利	C－3土坑2	5.3	9.1	16.5	褐色	鉄・緑褐色	外面は腰部まで施釉	53
233	瓶	雲助徳利	－	－	15.2	－	茶褐色	鉄・緑褐色	外底面の釉薬は掻き取る	53
234	瓶	雲助徳利	4	6.4	－	(8.6)	灰色	鉄・緑褐色	外面頸部に貝目あり	53
235	瓶	カラカラ	表層	2.7	6.0	13.4	茶褐色	鉄・黒褐色	注口部欠損	53
236	瓶	カラカラ	－	2.8	5.2	11.4	茶褐色	鉄・褐色	外面は腰部まで施釉	53
237	瓶	仏花器	表層	23.5	8.5	25.1	赤褐色	鉄・緑褐色	外面に一対の獅子頭　高台欠損	53
238	瓶	仏花器	表層	9.8	10.0	26.9	茶褐色	鉄・緑褐色		53

鉢（第54～56図）

調理具としての練鉢は口縁部の形態と外面の施釉位置，器形等から分類した。

鉢A（239・240）

口縁部が断面三角形を呈し，口縁部直下に一条の凸帯が巡るもので，外面の施釉は腰部付近まで掛けられる。

鉢B（241～243）

外面の施釉は腰部付近まで掛けられ，口縁部外面に三条の浅い沈線が巡るもので，241・242は口縁部が断面三角形を呈するもので，243は口縁部の断面が逆L字形を呈するものである。

鉢C（244～246）

器高の低いタイプのもので，外面は全て施釉される。244・246は口縁部が断面三角形を呈し，内面にマガイゴマの目跡が残る。また，246には内面口縁部付近にもヒラゴマが熔着していることから，合口（かっぷら）で内部に他の製品を入れて窯詰されたものと考えられる。鉢として分類したが，酢甕の蓋の可能性も考えられる。245は口縁部がT字状の鍔縁を呈し，底面に貝目が残る。

鉢D（247～249）

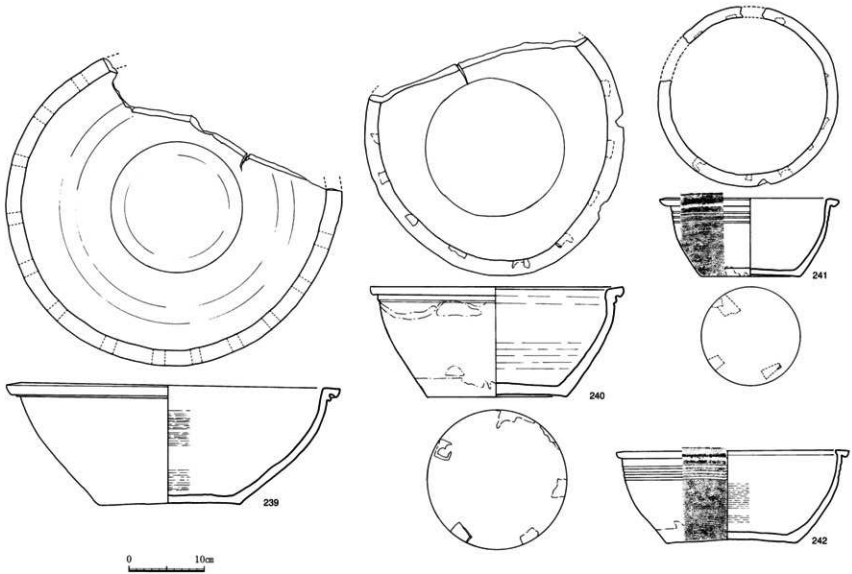
口縁部が断面三角形を呈し，底面が回転ヘラ切りされたもので，247以外はわずかに上げ底を成し，249は底面に焼成後外側から空けられたと思われる二次穿孔が見られる。施釉は外面腰部まで掛けられる。

鉢E（251・252）

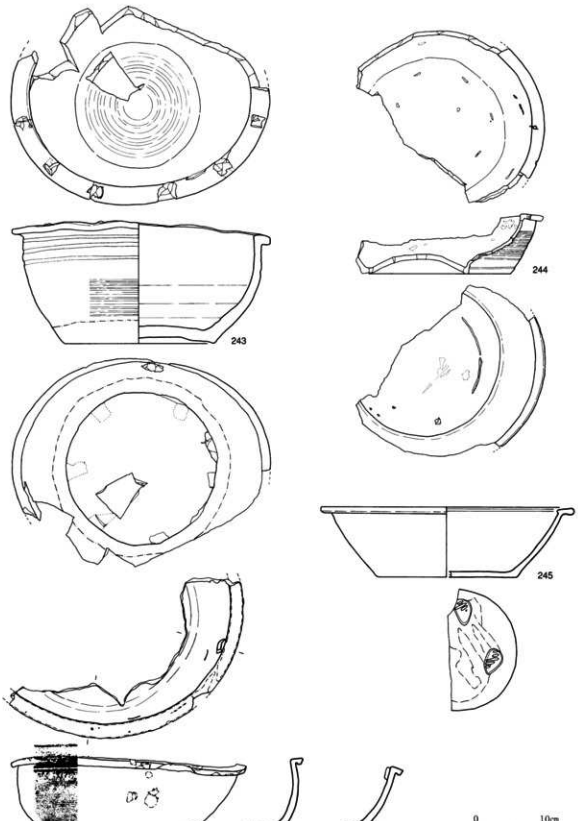
口縁部先端を等間隔でつまみ，波状の装飾を施したものである。

鉢F（253～256）

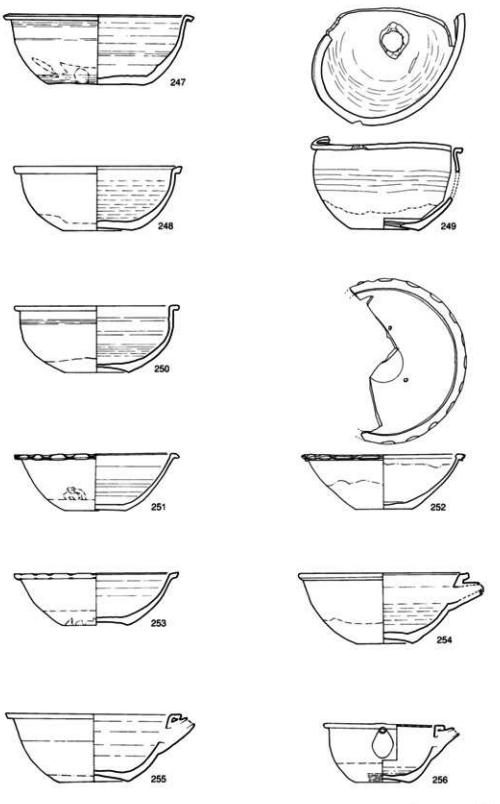
注口を持つ片口である。253は注口部が欠損しているものと思われる。



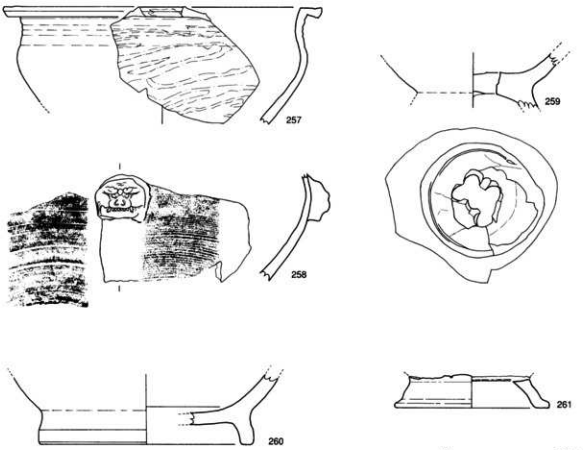
第54図　鉢類（1）練鉢



第55図　鉢類（2）練鉢



第56図　鉢類（3）練鉢



第57図　鉢類（4）練鉢

その他の鉢（第57図）

257～261は，他の器類とも考えられるが鉢として分類した。257は外面の釉薬が掻き取られ縞状を呈する。258は外面中位に獅子頭の貼り付けが施されたものである。259～261は高台が付くタイプの鉢の底部である。259は底面に数ヶ所穿孔が看取され，鉢に分類したが他の用途も考えられる。

第14表　鉢

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬	備考	挿図番号
239	鉢	練鉢	C－3土坑2	45.0	19.7	16.7	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　口縁部直下に1条の突帯　口唇部にヒラゴマの目跡あり	54
240	鉢	練鉢	C－3土坑2	34.2	19.0	14.8	黒褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　口縁部直下に1条の突帯　口唇部にヒラゴマの目跡あり	54
241	鉢	練鉢	C－3土坑2	24.1	13.6	10.7	赤褐色	内外面鉄	口唇部，底部にヒラゴマの目跡あり　外底，口縁部直下には3条の浅い沈線が巡る　細かいクシ状の工具で器面調整がおこなわれている	54
242	鉢	練鉢	C－3土坑2	32.0	17.5	12.5	茶褐色	内外面鉄	口縁部直下に3条の浅い沈線が巡る	54
243	鉢	練鉢	表層	－	15.0	12.4	黒褐色	内外面鉄	器形が変形　底部，口唇部にヒラゴマの目跡あり　口縁部直下に3条の浅い沈線が巡る　外面は腰部まで施釉	55
244	鉢	練鉢	－	30.4	21.4	8.4	茶褐色	内外面鉄	口唇部横ぎ取り　底面に重ね焼きの跡あり　内面にマガイゴマの目跡あり	55
245	鉢	練鉢	表層	34.4	19.0	9.5	茶褐色	内外面鉄	外底部に貝目あり	55
246	鉢	練鉢	4	－	－	－	茶褐色	内外面鉄	口唇部内面にヒラゴマ付着　内面にマガイゴマの目跡あり	55
247	鉢	練鉢	C－3土坑2	25.4	12.5	9.5	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉	56
248	鉢	練鉢	C－3土坑2	23.0	9.8	8.7	赤褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉	56
249	鉢	練鉢	2	(20.8)	9.3	12.6	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　底部に二次穿孔あり	56
250	鉢	練鉢	4	22.5	8.5	9.0	灰，赤	内外面鉄	外面は腰部まで施釉	56

第15表　鉢

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 口径	法量 底径	法量 器高	胎土	釉薬	備考	掲図番号
251	鉢	練鉢	C−3土坑2	22.7	8.3	7.8	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　口縁はつまんで飾りを付ける	56
252	鉢	練鉢	3	22.2	7.6	7.5	茶褐色	内外面鉄	外面は中央まで施釉　口縁はつまんで飾りを付ける	56
253	鉢	練鉢	4	22.2	8.4	7.2	赤褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　口縁はつまんで飾りを付ける	56
254	鉢	片口	表層	23.4	7.4	9.5	褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　側面に注口が付く	56
255	鉢	片口	C−3土坑2	24.0	9.4	9.4	赤褐色	内外面鉄	側面に注口が付く	56
256	鉢	片口	3	16.4	7.3	8.0	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　側面に注口が付く	56
257	鉢	？	3	34.8	−	12.7	茶褐色	内外面鉄		57
258	鉢	？	4	−	−	11.6	赤橙色	内外面鉄	体部側面に獅子頭付き	57
259	鉢	？	3	(13.8)	−	4.5	赤褐色	内外面施釉	底部に数個の穿孔あり，高台が付くものと思われる	57
260	鉢	？	C−3土坑2	−	17.2	5.7	黒褐色	内外面鉄	畳付，高台内面は無釉	57
261	鉢	？	4	−	12.4	2.7	茶褐色	鉄	高台部分は無釉	57

擂鉢（第58・59・79・81図）

出土遺物中，蓋・土瓶等と並んで大量に出土した。口唇部及び外底面にヒラゴマの目跡が残るものが多い。窯詰方法としては，合口（かっぷら）で行われていたと考えられる。また，内底にマガイゴマが熔着した資料も見られることから，合口をした擂鉢の内部に他の製品を入れ，サヤ鉢の代用として利用していたことが窺える。口縁部の形状から，擂鉢A～Dに分類した。

擂鉢A（262～267）

口縁部の形状がT字状を呈するものである。262・263は大小の差はあるものの同類と考えられ，外面は細いヘラ状工具で調整されたと思われる横方向の調整の上から全面に鉄釉が施される。また，口唇部には釉薬を掻き取る際に付いたと思われる浅い沈線が3条残る。264は内面に他製品が熔着した資料である。265は器高が低いものである。266は口縁径と器高がほぼ同じになるやや小型のもので，外面の施釉は腰部まで掛けられる。267は，胎土に白い小石が多く含まれ，内面が無釉で，乱雑な擂り目が引かれる。

擂鉢B（268）

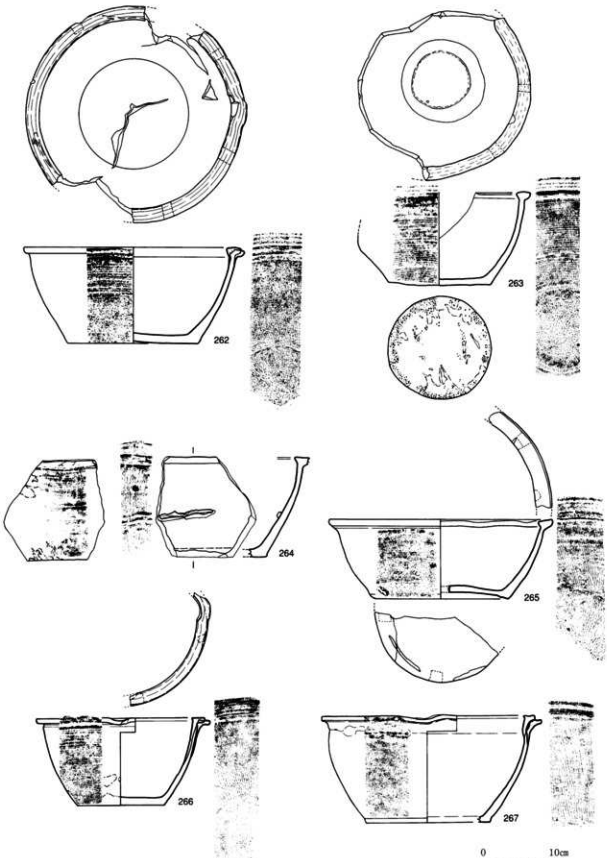
口縁部の形状が逆L字状を呈し，外面腰部に円錐状の小さな突起が等間隔で巡るものと思われる。施釉は突起の下付近まで掛けられる。外底面には，ヒラゴマが熔着している。

擂鉢C（269～274）

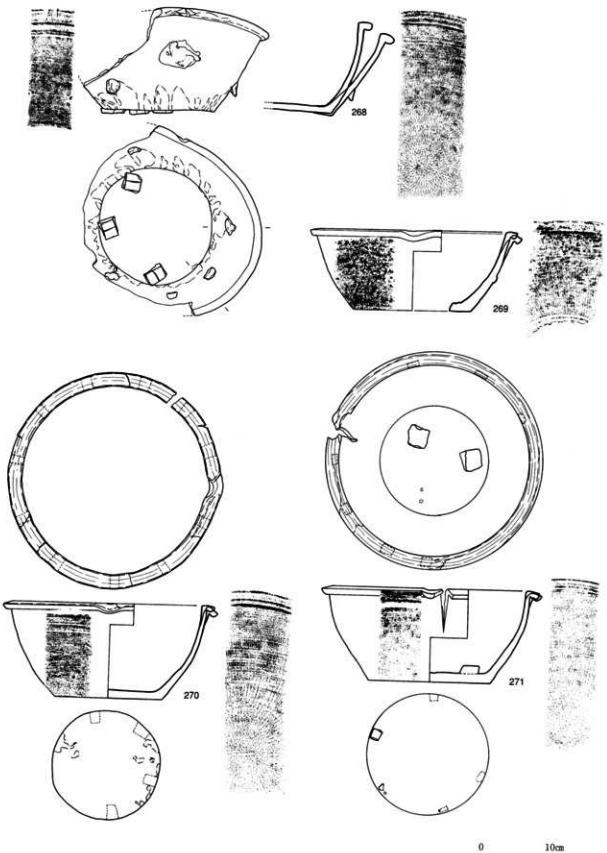
口縁部の形状が断面逆三角形を呈するものである。269が1点だけ器高が低く，外面の釉薬は全面に掛かるもので，270～274は外面の釉薬は腰部までである。274は外面腰部に円錐状の突起が7個巡る。

擂鉢D（275～279）

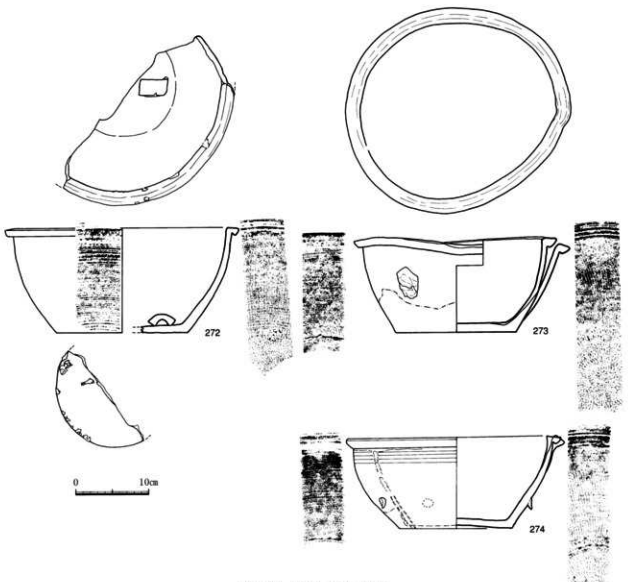
口縁部の形状がT字状に作り出しさらに先端を断面三角形に肥厚させるものである。口径と底径の差があまりないバケツ形状の器形を呈し，277は外面腰部に円錐状の突起が等間隔で7ヶ所付けられる。280～282は底部の資料で，280は底面に焼成後外側から空けられた二次穿孔が看取される。283～285は餌擂鉢である。



第58図　鉢類（1）擂鉢



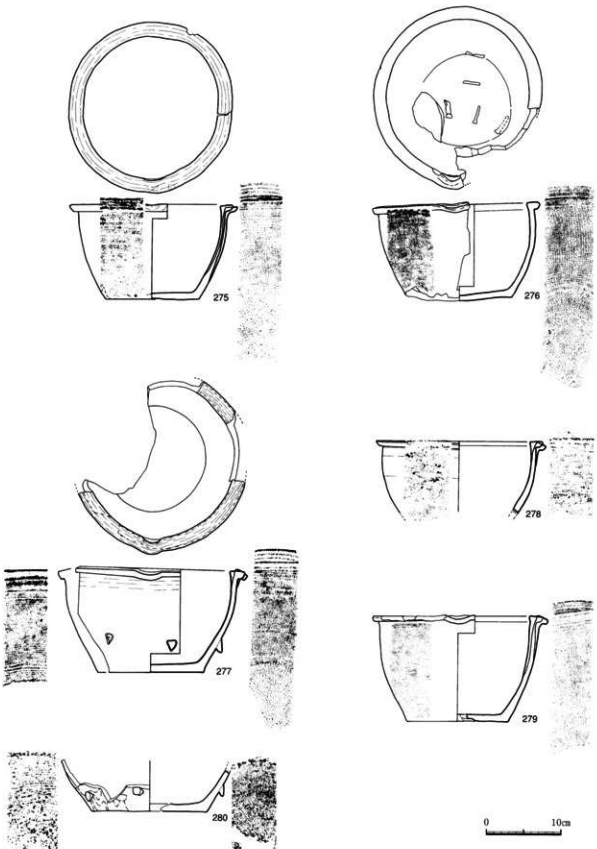
第59図　鉢類（2）擂鉢



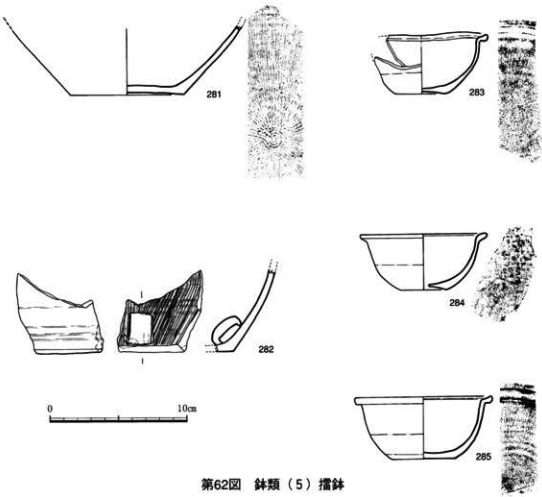
第60図　鉢類（３）擂鉢

第16表　擂鉢

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬	備考	挿図番号
262	鉢	擂鉢	2	30.2	17.8	13.2	茶褐色	内外面鉄	口唇部にヒラゴマの目跡あり	58
263	鉢	擂鉢	C－３土坑2	－	14.0	12.9	黒褐色	内外面鉄	口唇部にヒラゴマの目跡あり　底部に砂付着	58
264	鉢	擂鉢	2	－	－	13.5	赤褐色	内外面鉄	内面に他の遺物の付着が認められる	58
265	鉢	擂鉢	－	30.4	18.2	10.9	黒褐色	内外面鉄	底面、口唇部にヒラゴマの目跡あり	58
266	鉢	擂鉢	表層	22.8	11.8	11.9	茶褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉	58
267	鉢	擂鉢	3	29.1	16.8	14.5	茶褐色	内外面鉄	胎土に１mm程度の小石が混じる	58
268	鉢	擂鉢	－	－	16.0	14.0	赤褐色	内外面鉄	腰部に７個の突起が巡る。その下まで施釉　変形が著しい底部にコマ付着	59
269	鉢	擂鉢	－	28.0	16.0	10.5	茶褐色	内外面鉄		59
270	鉢	擂鉢	C－３土坑2	29.5	14.8	12.9	黒褐色	内外面鉄	内底面にマガイゴマらしき目跡あり　外面は腰部まで施釉	59
271	鉢	擂鉢	3	29.4	16.4	12.6	黒褐色	内外面鉄	口唇部・外底部にヒラゴマの目跡あり　内底面にマガイゴマが付着　３個付いていたものと思われる	59
272	鉢	擂鉢	表層	32.0	18.0	14.1	茶褐色	内外面鉄	口唇部にヒラゴマの目跡あり　見込みにマガイゴマが付着	60
273	鉢	擂鉢	3	30.2	16.5	12.9	茶褐色	内外面鉄	外面は中央付近まで施釉　口縁部変形	60
274	鉢	擂鉢	－	29.4	15.2	12.4	黒褐色	内外面鉄	外面は腰部まで施釉　突起物が付着	60



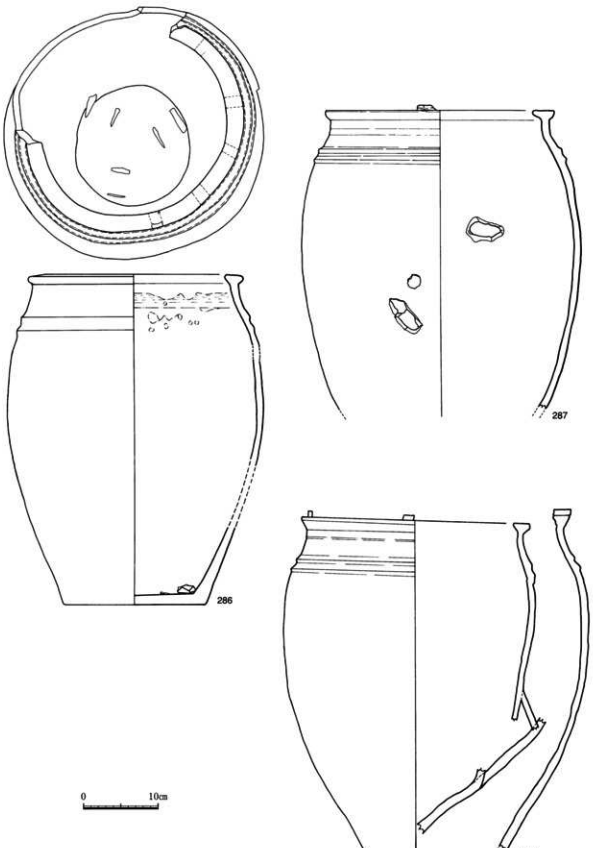
第61図　鉢類（4）擂鉢



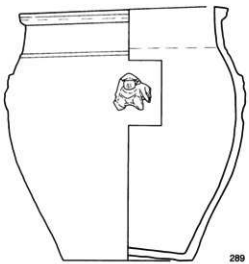
第62図　鉢類（5）擂鉢

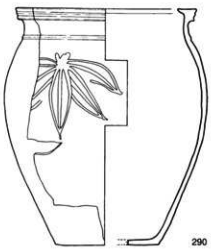
第17表　擂鉢

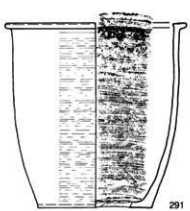
レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 口径	法量 底径	法量 器高	胎土	釉薬	備考	挿図番号
275	鉢	擂鉢	3	22.9	12.8	12.8	赤褐色	内外面鉄		61
276	鉢	擂鉢	表層	23.0	14.0	13.4	赤褐色	内外面鉄	内底にマガイゴマの目跡あり	61
277	鉢	擂鉢	3	25.5	14.4	14.5	赤褐色	内外面鉄	外面腰部に7個の突起が巡る	61
278	鉢	擂鉢	−	22.6	−	−	赤褐色	内外面鉄		61
279	鉢	擂鉢	C−3土坑2	23.1	13.8	14.3	赤褐色	内外面鉄	焼成不良のため釉薬の溶けが悪い	61
280	鉢	擂鉢	3	−	15.8	−	茶褐色	内外面鉄	外面腰部に7個の突起が巡る　底部に二次穿孔あり	61
281	鉢	擂鉢	3	−	12.4	−	赤橙色	内外面鉄	焼成不良	62
282	鉢	擂鉢	表層	−	−	−	黒褐色	内外面鉄	内面の腰部にマガイゴマ付着	62
283	鉢	擂鉢	4	15.4	5.3	6.7	黒褐色	内外面鉄	外面は中央部まで施釉	62
284	鉢	擂鉢	−	13.8	5.0	6.1	茶褐色	内外面鉄	外面は中央部まで施釉	62
285	鉢	擂鉢	−	14.8	6.8	6.8	茶褐色	内外面鉄	外面は中央部まで施釉	62

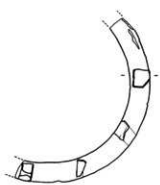


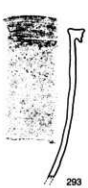
第63図　壺類（1）

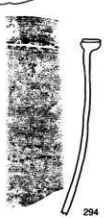


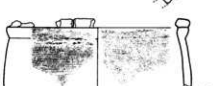




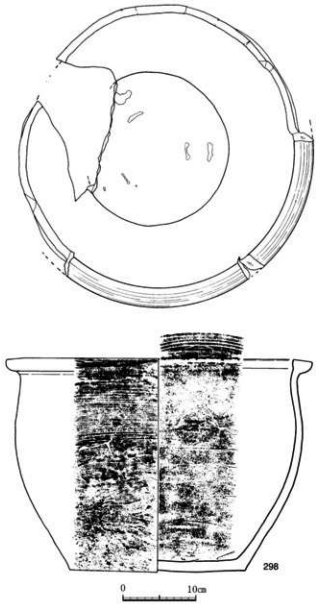








第64図　壺類（2）



第65図　甕類（3）

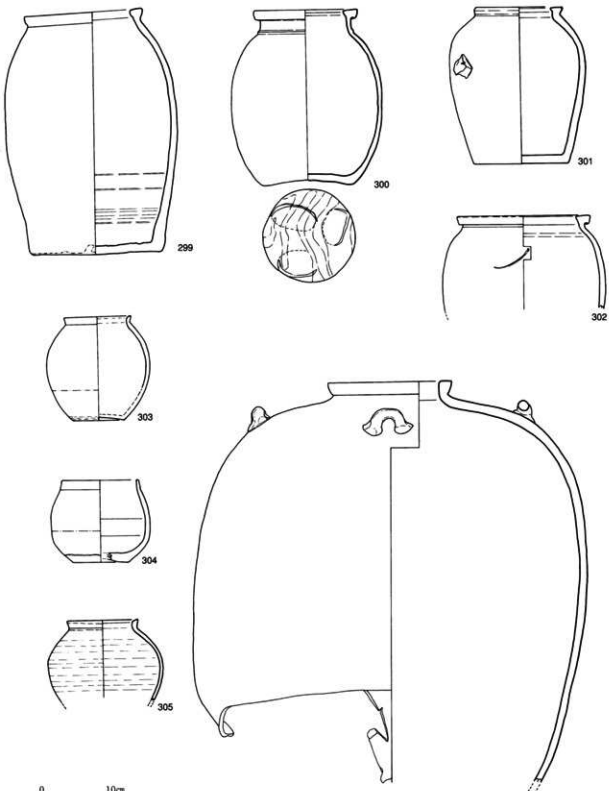
甕類（第63～65図）

甕の出土量は，それほど多くはなく，復元が可能で全体の器形がわかる資料を中心に掲載した。窯詰方法としては，擂鉢等と同様に，内底部に別の製品を詰め，合口（かっぷら）にして焼成されたものと思われ，内底面にマガイゴマの目跡が残る資料が見られる（286・289・298）

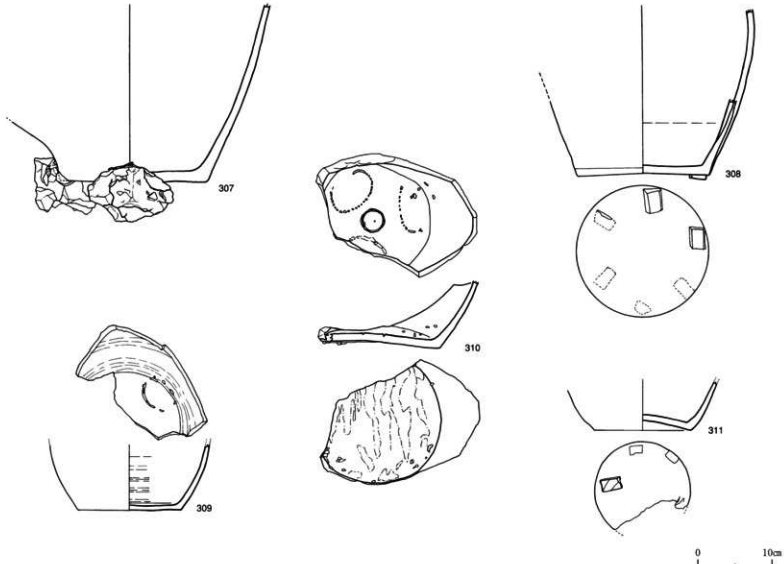
286～294，291・293・294は半胴形の甕である。286は口唇部にヒラゴマの目跡が残り，口縁部内側の釉薬は帯状に掻き取られている。287は底部が欠損しているが，内外面とも中位付近に他の遺物の破片が熔着しており，甕の内部にも製品を窯詰したものと思われる。288は焼け歪みの強い資料である。口唇部にはヒラゴマが熔着している。289は外面に「大黒」が3ヶ所貼り付けられた資料で，民俗例では「甘酒半胴」と呼ばれるものである。290は，外面中央に掻き落としで笹と思われる文様が描かれている資料である。口縁部内面は帯状に釉掻きされている。民俗例では「つ半胴」と呼ばれるものである。291・293・294は内外面にヘラ状工具による細かい横方向の調整が入る。291の施釉は鉄釉が外面全体と内面は雑に底面付近まで掛けられる。294は内面は口縁部付近まで施釉され，以下は露胎する。292・295は全面無釉のものである。296は鉢としても分類可能な資料であるが全体像が不明なため甕として分類した。298は大型の甕で，外面には釉薬が刷毛もしくは手で横方向に塗布されており，その痕跡が縞状に残る。

壺類（第66図）

大小様々な大きさの壺が出土しているが，数量的には多くはない。299は内底面に円形の窯道具（ガンギの円形部分と思われる）を置き他の製品を入れサヤ鉢代わりに使用したと考えられる跡が残る。外底面には，釉薬を掻き取った跡が看取される。300は外底面に貝目が3ヶ所付いた



第66図　壺類（1）



第67図　蓋・壺類　底部

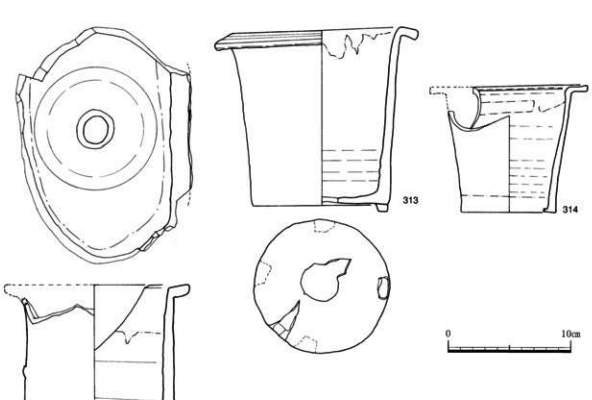
資料である。301は外面中程に他遺物の破片が熔着している。303は鉄釉が外面腰部まで掛けられ，内面は無釉となっている。303・304は，やや上げ底の底部に，重ね焼きの結果できたと思われる胎土の色調差が見られる。305は胴部の張ったもので，口唇部以外内外面とも鉄釉が施釉される。306は肩部に４ヶ所把手が付く大型の四耳壺で，焼け歪みが強い。

甕・壺類底部（第67図）

307～311は甕・壺類の底部である。307は底部に窯壁を窯道具として転用したと思われる耐火レンガが熔着した資料である。傾斜の強い窯の中に直立した製品を窯詰するために耐火レンガ等も使用されていたことが窺える。309・310は内底面に貝目が３ヶ所看取されるものである。310は内底面中央に焼成前についたリング状の圧痕が残るが，目的等は不明である。外底面は，釉薬が掻き取られている。308・311は外底面にヒラゴマが熔着し，またコマ目も残る資料である。

第18表　甕・壺

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
286	甕	半胴	C－3土坑２	29.0	19.6	44.9	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	内底面にマガイゴマの目跡３カ所あり　口唇部にヒラゴマの目跡あり　内面口縁部下は等伏に釉掻きされている	63
287	甕	半胴	3	31.0	－	－	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	口唇部にヒラゴマ付着	63
288	甕	半胴	2	31.0	(36.2)	(45.9)	淡褐色	内外面鉄・淡黄褐色		63
289	甕	半胴	2	28.4	17.6	34.4	赤褐色	内外面鉄・褐色	口唇部にヒラゴマ付着　変形著しい	64
290	甕	半胴	2	24.6	14.5	32.2	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	外面掻き落し文あり	64
291	甕	半胴	表層	24.8	15.3	25.2	茶褐色	内外面鉄・褐色	内面は露胎となるが一部釉がかかる　内外面ともヘラ状工具による調整痕あり	64
292	甕	－	4	23.0	－	－	褐色	内外面無釉		64
293	甕	半胴	－	34.0	－	－	赤褐色	内外面鉄・緑褐色	ヘラ状工具による調整痕あり	64
294	甕	半胴	－	30.0	－	24.0	茶褐色	内外面鉄・褐色	口唇部にヒラゴマ付着　内面は露胎　内外面ともヘラ状工具による調整痕あり	64
295	甕	－	表層	24.8	－	－	茶褐色	内外面無釉	口唇部にヒラゴマ付着　内面は露胎　内外面ともヘラ状工具による調整痕あり　胎土に白色黒色小石つぶを多く含む	64
296	甕	－	表層	－	－	－	褐色	内外面鉄・褐色	外面はヘラ状工具による調整痕あり	64
297	甕	－	4	－	－	－	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		64
298	甕	－	3	41.9	23.8	29.0	褐色	内外面黒釉・淡緑褐色	口唇部にヒラゴマの目跡あり　内底面にマガイゴマの目跡３カ所あり	65
299	壺	－	C－3土坑２	15.7	17.8	33.2	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	外底面は釉薬掻き取り　内底面にマガイゴマの目跡３カ所あり	66
300	壺	－	1	14.2	12.6	23.5	茶褐色	内外面鉄・黒褐色	外底面に貝目３カ所あり　内底にガンギの目跡あり	66
301	壺	－	C－3土坑２	14.5	12.6	26.4	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	外底面は釉薬掻き取り　内面に目跡あり　倒面に他製品熔着	66
302	壺	－	2	18.2	－	－	茶褐色	内外面鉄・緑褐色		66
303	壺	－	1	9.2	6.7	14.1	赤褐色	内外面鉄・緑褐色		66
304	壺	－	4	8.0	5.8	8.3	茶褐色	内外面鉄・褐色	外面は中位まで施釉　底部はお切り	66
305	壺	－	－	－	－	－	黒褐色	内外面鉄・黒褐色		66
306	壺	四耳壺	2	16.5	－	－	赤褐色	内外面鉄・黒褐色	胴部に耳が４カ所付く　変形著しい	66
307	甕・壺	底部	－	－	21.0	24.1	茶褐色	内外面鉄・黒	外底面に耐火レンガが熔着　底部の釉薬は掻き取る	67
308	甕・壺	底部	表層	－	17.9	(22.7)	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	外底面にヒラゴマ付着　外底面の釉薬は掻き取る	67
309	甕・壺	底部	4	－	14.2	9.0	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	内底面に貝目あり　外底面の釉薬は掻き取る	67
310	甕・壺	底部	4	－	－	(9.0)	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	内底面に貝目あり　外底面の釉薬は掻き取る	67
311	甕・壺	底部	表層	－	13.0	－	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	外底面にヒラゴマ付着　外底面の釉薬は掻き取る	67

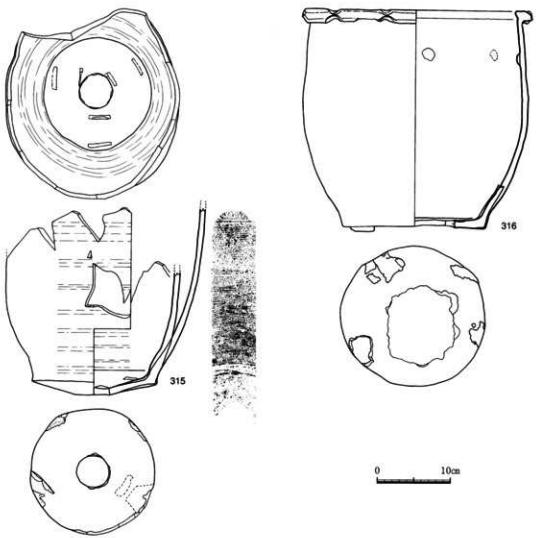


第68図　鉢類（1）植木鉢

植木鉢（第68・69図）

312～314は植木鉢で，民俗例でラン鉢と呼ばれるものである。312は焼き歪みが強い資料である。釉薬は鉄釉が側面は高台脇まで施され，内面は口縁部下まで掛けられる。口唇部は掻き取られている。315は外底面にヒラゴマの一部と思われる小片が熔着している資料で，釉薬は鉄釉が外面全面に掛けられ，内面は一部掛かるが，基本的には無釉である。口唇部の釉は掻き取られる。316は底部が欠損しているが，中央に円形の穴が開いていたと思われる。施釉は，内側は内底面を除く全て，外面は底部脇やや上方まで鉄釉が掛けられ，口唇部は掻き取られる。

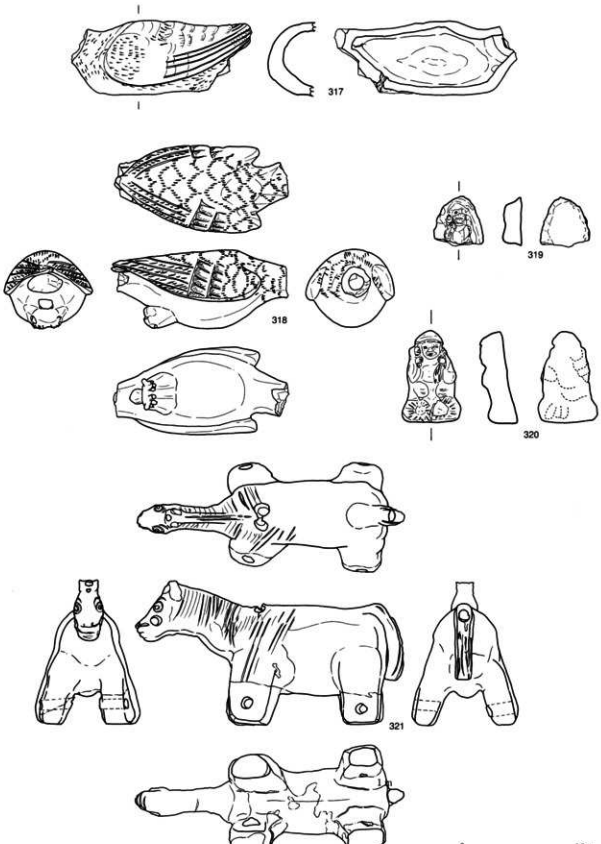
315・316は大型の植木鉢である。315は口縁部が欠損しており，底面中央には焼成前から円形の穴が空けられている。316は口縁部先端に装飾が施されたもので，底面には焼成後空けられたと思われる二次穿孔が看取されるが，器形等から焼成前に空けられていた穴を，さらに二次穿孔したものと思われる。外底面にはヒラゴマの熔着が看取され，内面には他製品の一部と思われる破片が熔着している。サヤ鉢の代用として使用し，内部にも製品を詰めて焼成したことが窺える。



第69図　鉢類（２）植木鉢

第19表　鉢

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 口径	法量 底径	法量 器高	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
312	鉢	植木鉢	表層	－	－	16.9	茶褐色	内外面鉄・黒	内面は口縁部やや下まで施釉　高台には３カ所円型の抉りが入る	68
313	鉢	植木鉢	－	16.5	11.0	15.1	黒褐色	内外面鉄・黒	外底面にヒラゴマ付着	68
314	鉢	植木鉢	C－3土坑2	12.4	7.5	10.3	茶褐色	内外面鉄・黒	外面は腰部まで施釉	68
315	鉢	植木鉢	C－3土坑2	－	17.0	－	茶褐色	内外面鉄・黒	内面はヘラ状工具による調整痕あり	69
316	鉢	植木鉢	C－3土坑2	－	19.5	－	茶褐色	内外面鉄・黒	底部に二次穿孔あり　口唇部端はつまんで装色する	69



第70図　土製品

土製品（第70図）

317・318は鳥形の土製品である。型抜きで作られており，中空で，釉薬は掛からず素焼きである。頭部は欠損しており，臀部に穿孔が空けられている。319・320は「大黒」の土製品で，319は鉢や甕の側面に貼り付けられたものが剥落したものと思われ，外面に鉄が掛けられている。320は無釉である。321は鬣等も詳細に表現された陶製の馬で，足の先端部分以外は緑褐色の釉薬が掛けられている。背中側の首付近と尾付近には円形の穴が空けられ，また４本の足の先端にも穴が空けられている。

第20表　土製品

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 幅	法量 長さ	法量 高さ	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
317	土製品	鳥形	3	6.0	13.7	6.0	淡茶褐色	－	片側のみ	70
318	土製品	鳥形	表層	7.0	6.3	14.5	淡茶褐色	－	中空　頭部欠損	70
319	土製品	－	4	4.0	1.5	3.9	淡茶褐色	外面鉄・黒	甕等に貼り付ける大黒	70
320	土製品	人形	1	4.8	2.3	7.4	黄橙色	無釉	型造りの大黒	70
321	土製品	土馬	－	8.5	21.9	11.8	茶褐色	鉄・緑褐色	足部先端は無釉	70

窯道具

コマ（第71図）

製品を窯詰する際，製品と製品の間に挟んで熔着を防ぐ道具である。製品に接する面にはアルミナが塗布され，コマと製品の熔着も防いでいる。本遺跡から形状の異なる２タイプのコマが出土しており，コマＡとコマＢに分類した。

コマＡ（322～327）

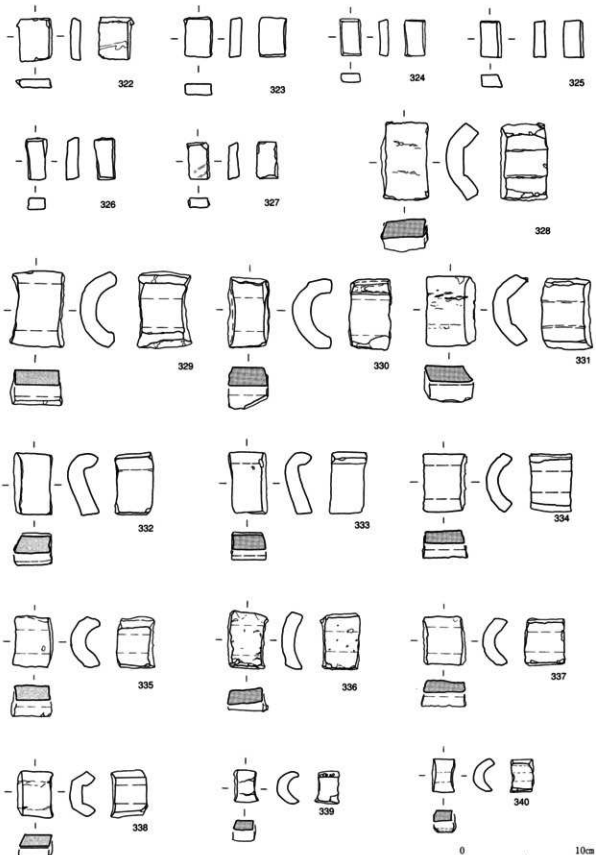
平面長方形の薄く小さいタイプのもので，『薩摩焼の研究』では「長方形小隔板」と紹介されているが，苗代川では「ヒラゴマ（平ゴマ）」と呼ばれる。本書の文章中もヒラゴマで統一した。コマ自体も多く出土しているが，製品の底部や口唇部に熔着して出土している例も多い。また，コマに塗布されていたアルミナが白くコマ目となって残っている資料も見られる。

コマＢ（328～340）

断面半円形のコマで，苗代川で「マガイゴマ」と呼ばれる道具で，本書の文章中も「マガイゴマ」で統一した。長さ６cm幅３cm厚さ1.5cm程度の大きめのものから，長さ2.5cm幅1.0cm厚さ８mm程度の小型のものまであり，製品の大きさや重量等に応じて使い分けていたものと思われる。また，製品の重量で歪んでしまったものも見られる（332・333）。コマＢの用途としては，鉢・擂鉢・壺・甕等を合口（かっぷら）にし，その内部に他の製品を入れる際，内底に３ヶ所マガイゴマを置き，その上に製品をのせて窯詰したものと思われる。これは，これらの製品の内底にマガイゴマの目跡が３ヶ所残っている資料などから窺い知ることができる。

第21表　窯道具

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 縦	法量 横	法量 厚さ	胎土	備考	挿図番号
322	窯道具	ヒラゴマ	表層	3.5	2.9	0.8	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
323	窯道具	ヒラゴマ	1	3.2	2.2	0.9	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
324	窯道具	ヒラゴマ	4	3.0	1.6	0.7	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
325	窯道具	ヒラゴマ	－	3.0	1.6	1.0	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
326	窯道具	ヒラゴマ	4	3.2	1.5	0.9	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
327	窯道具	ヒラゴマ	表層	3.0	1.6	0.7	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
328	窯道具	マガイゴマ	－	6.3	3.8	2.7	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
329	窯道具	マガイゴマ	C－３土坑２	6.2	4.4	1.2	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
330	窯道具	マガイゴマ	4	5.7	3.4	3.3	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
331	窯道具	マガイゴマ	－	5.7	3.9	1.2	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
332	窯道具	マガイゴマ	C－３土坑２	4.9	3.0	1.3	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
333	窯道具	マガイゴマ	－	5.0	2.8	1.2	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
334	窯道具	マガイゴマ	1	4.6	3.6	0.9	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
335	窯道具	マガイゴマ	4	4.1	3.0	1.2	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
336	窯道具	マガイゴマ	4	4.5	2.9	1.1	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
337	窯道具	マガイゴマ	1	3.9	3.3	1.0	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
338	窯道具	マガイゴマ	4	3.6	2.8	1.0	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
339	窯道具	マガイゴマ	C－３土坑２	2.6	2.0	1.7	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71
340	窯道具	マガイゴマ	C－３土坑２	2.7	1.7	1.6	灰褐色	両面にアルミナ塗布	71



第71図　窯道具（1）ヒラゴマ・マガイゴマ

チャツ（第72図）

製品の下に据える道具で，『日本陶磁大辞典』によると，「磁器焼成の窯積みの道具で，磁器原料土で作られた小型のハマ（焼台）で肉を厚くし，高台内面側の蛇ノ目状に釉剥ぎした部分に当てて使用する。畳付に釉の掛かった器物を焼成する時に使用する。」とあるが，本遺跡から出土したチャツは，346を除き全て陶土で作られている。341・342は他に比べてやや背の高いものである。

センベイ（第72図）

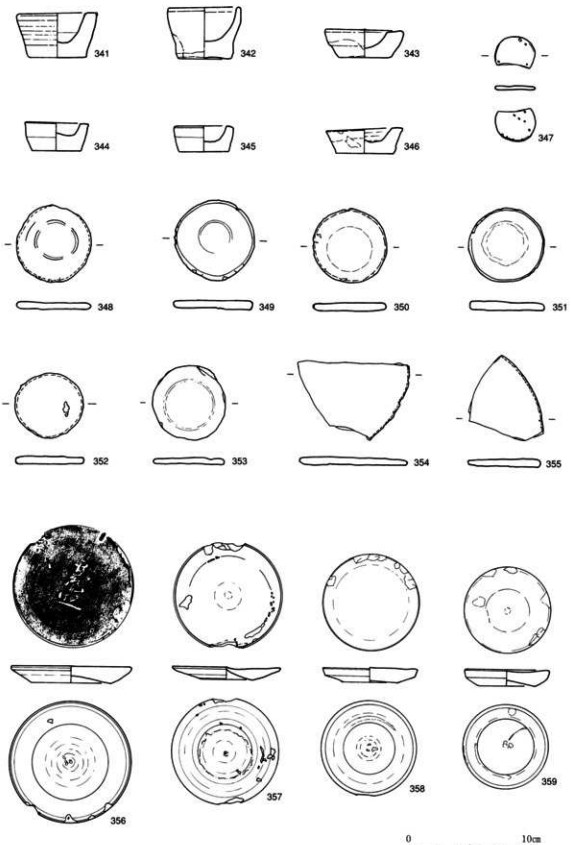
薄い円板状を呈する道具で，製品の下に敷いて高さを微調整するものであると思われる。348～353は上面に高台痕が残る資料である。354・355は大型のセンベイになるものと思われる。

逆台形型ハマ（第72図）

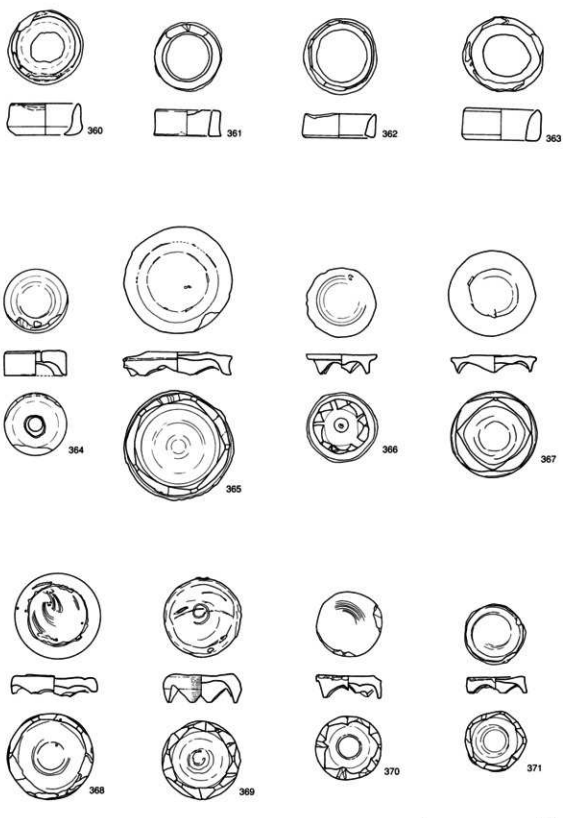
上径に対して下径が小さく，断面が逆台形型を呈する磁製のもので，製品の下に挟んで使用する道具である。本遺跡で出土した窯道具の中では，逆台形型のハマの出土量は少ない。356は，上面に釘彫りで「臺皿」と書かれている資料である。357は上径と下径の差が大きく，側面に透明釉が掛けられている。上面に，灰黒色の畳付部が熔着していることから，磁器窯で使用されるハマを使い陶器を焼いていたと考えられる。

第22表　窯道具

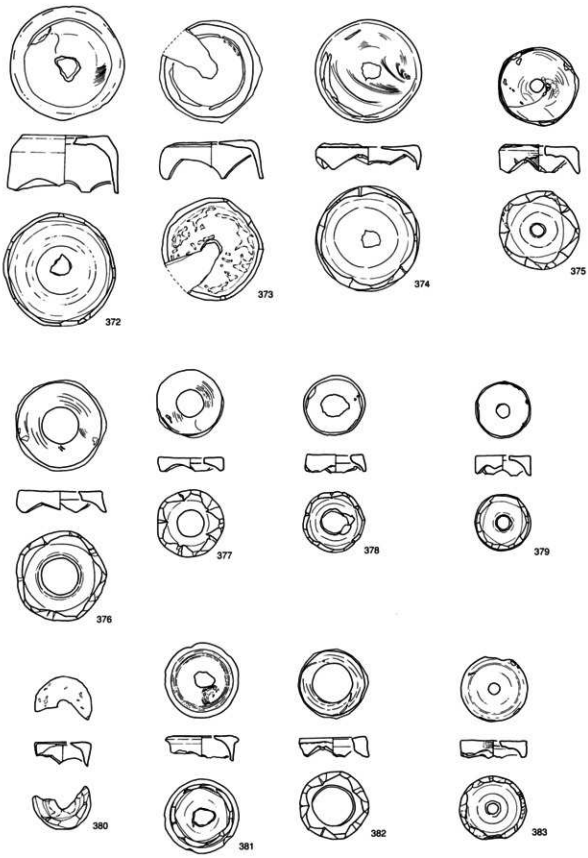
レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 上径	法量 底径	器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
341	窯道具	チャツ	3	5.5	4.6	3.6	灰褐色	－	陶製底部糸切り	72
342	窯道具	チャツ	1	5.8	4.2	4.3	黒褐色	－	陶製底部アルミナ塗布	72
343	窯道具	チャツ	1	6.5	4.5	2.2	灰白色	－	陶製上面・側面ともにアルミナ塗布　底部糸切り	72
344	窯道具	チャツ	3	5.2	4.0	2.4	灰白色	透明釉	陶製上面のみ施釉　上面・側面ともにアルミナ塗布　底部糸切り	72
345	窯道具	チャツ	表層	4.9	4.1	2.1	灰褐色	－	陶製上面にアルミナ塗布　底部糸切り	72
346	窯道具	チャツ	表層	6.2	4.6	2.1	灰褐色	－	磁製上面にアルミナ塗布　底部糸切り	72
347	窯道具	センベイ	2	径3.3	－	厚さ0.3	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
348	窯道具	センベイ	2	径6.1	－	厚さ0.7	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
349	窯道具	センベイ	3	径6.5	－	厚さ0.8	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
350	窯道具	センベイ	3	径6.0	－	厚さ0.7	－	－	磁製	72
351	窯道具	センベイ	2	径6.1	－	厚さ0.7	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
352	窯道具	センベイ	3	径5.6	－	厚さ0.7	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
353	窯道具	センベイ	2	径5.8	－	厚さ0.5	－	－	磁製上面に高台痕が残る	72
354	窯道具	センベイ	3	－	－	厚さ0.7	－	－	磁製	72
355	窯道具	センベイ	3	－	－	厚さ0.7	－	－	磁製	72
356	窯道具	逆台形型ハマ	－	9.8	6.4	1.4	白色	－	磁製	72
357	窯道具	逆台形型ハマ	－	8.8	4.5	1.0	灰白色	－	磁製高台痕あり	72
358	窯道具	逆台形型ハマ	2	4.2	7.8	1.2	白色	－	磁製	72
359	窯道具	逆台形型ハマ	表層	6.8	5.5	1.3	灰色	－	磁製高台痕あり	72



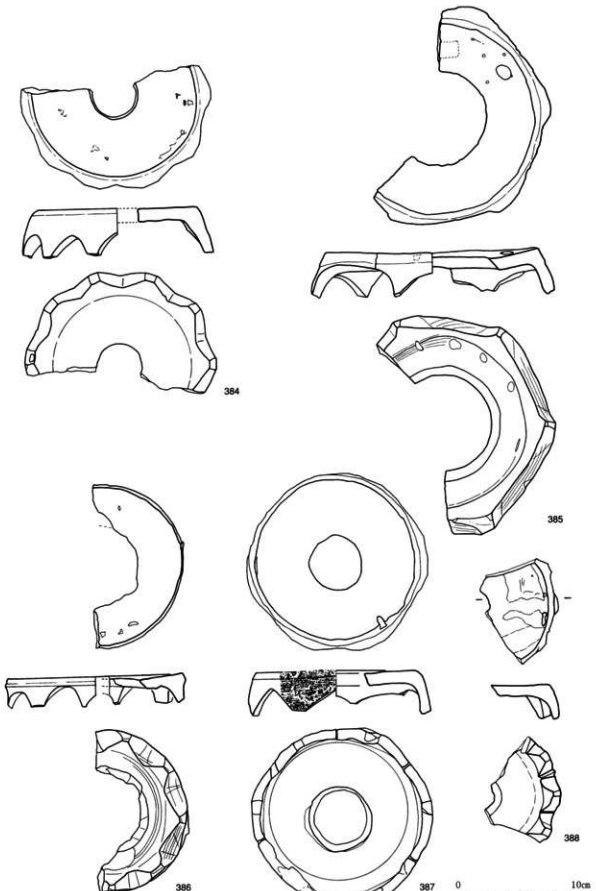
第72図　窯道具（2）チャツ・センベイ・逆台形型ハマ



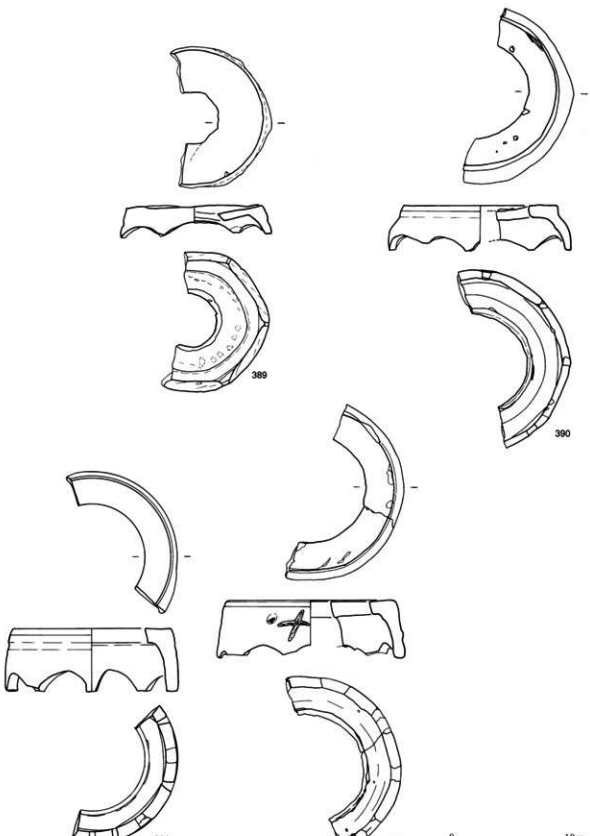
第73図　窯道具（3）リング型ハマ・ガンギ（切高台付ハマ）



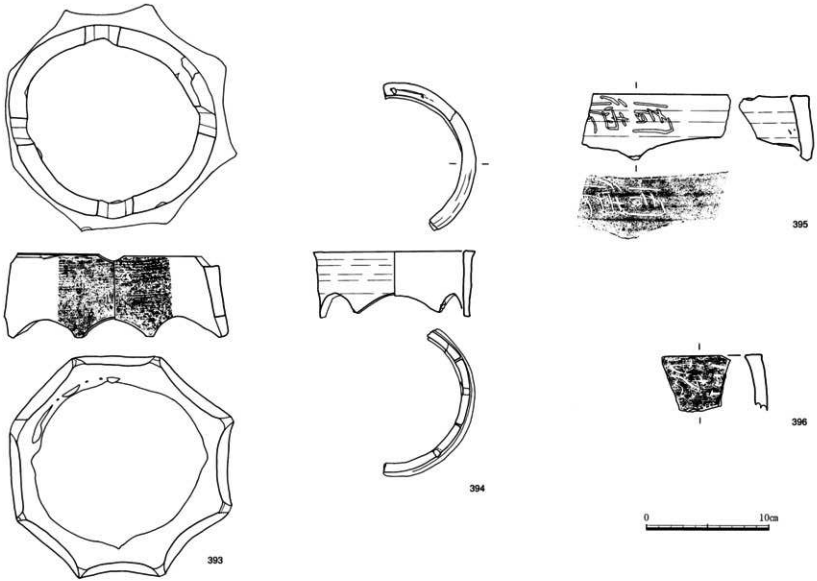
第74図　窯道具（4）ガンギ（切高台付ハマ）



第75図　窯道具（５）ガンギ（切高台付ハマ）



第76図　窯道具（6）ガンギ（切高台付ハマ）



第77図　窯道具（7）ガンギ（切高台付ハマ）

リング型ハマ（第73図）

360～364は環状を呈するハマで，『薩摩焼の研究』には「環状隔板」と紹介されている。367のみ磁製で，他は陶製である。360は外面に釉薬が付着しており，上に置いた製品の釉薬が流れたものと考えられることから，先端の細い方を上にして使用したのではないかと思われる。

ガンギ（雁木）（第73図）

本遺跡から出土した窯道具の中で出土量の多いものである。製品と製品の間に挟んで使用した道具で，苗代川では「ガンギ」と呼ぶことから，本書の中では「ガンギ」として統一した。碗・皿等の製品に用いたと思われる小型のもの（365～383）をガンギA，練鉢・擂鉢等の製品に用いたと思われる大型のもの（384～396）をガンギBとして分類した。

ガンギA

『薩摩焼の研究』で，円板形抉足隔板と紹介されているものと同類のものと思われる。切高台付きハマ，切り出しハマとも呼ばれ，一般的には磁器窯で使用され，磁製のものであるが，本遺跡から出土したものは陶製のものが多い。円板の中央に穿孔が施されないタイプ（1）と穿孔が施されるタイプ（2）に細分できる。

ガンギA－1（365～371）

円板の中央に穿孔が施されないもので，陶製のもの（365～369）と磁製のもの（370・371）があり，脚部は4足（367）と5足（365・366，370・371）と，6足（368・369）のものがある。

ガンギA－2（372～383）

円板の中央に穿孔が施されるもので，焼成前に空けられたもの（375～379・382・383）と焼成後二次穿孔されたもの（372～374・380・381）がある。陶製のもの（372～381）と磁製のもの（382・383）がある。脚部の数は全て5足である。375・386・390は全面に鉄釉と思われる釉が掛けられており，ハマの役割を考えると，珍しい資料である。

ガンギB（387～397）

形状としては，ガンギAを大型にしたもので，全て素焼きの陶製である。脚部は鋭い刃物状の道具で山型に足が造り出されている。使用方法としては，練鉢や擂鉢を同じ向きで重ね焼きする際に製品と製品の間に挟んで用いたと思われる。上面の中央に穴が空くもの（1）と環状を呈するもの（2）があり，さらに細分した。

ガンギB－1（385～393）

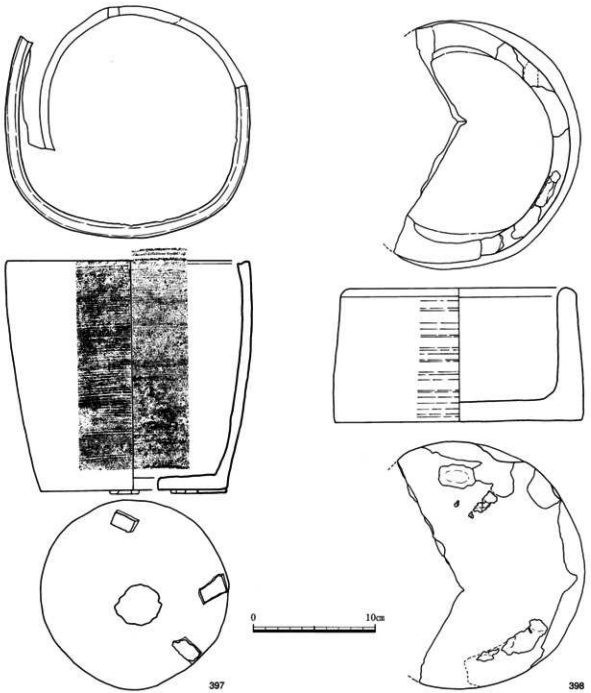
ガンギBの中では2のタイプよりこのタイプの出土量が多い。上面にはガンギと製品の熔着を防ぐためアルミナが塗布されている。

ガンギB－2（394～397）

394は完形の資料で，環状を呈する体部の上部には半円状の浅い抉りが4ヶ所入れられている。396・397は側面に「周徳」という陶工名が釘彫りされた資料で，同一人物であろう。

第23表　窯道具

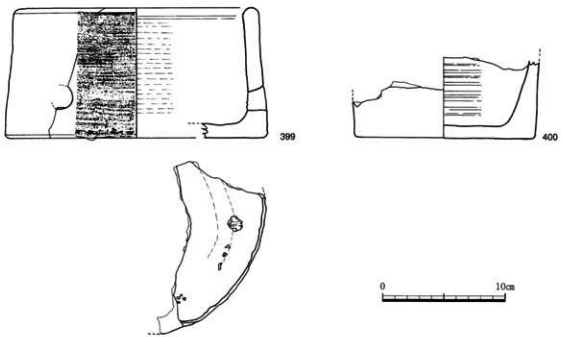
レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 上径	法量 底径	法量 器高	胎土		備考	挿図番号
360	窯道具	リング型ハマ	2	5.6	6.1	2.6	淡褐色	陶製	外面に釉付着　底面糸切り	73
361	窯道具	リング型ハマ	−	5.4	5.5	2.1	淡褐色	陶製		73
362	窯道具	リング型ハマ	表層	5.6	6.0	1.9	淡褐色	陶製		73
363	窯道具	リング型ハマ	4	5.6	6.3	2.6	淡褐色	陶製		73
364	窯道具	リング型ハマ	2	5.0	5.0	2.0	白色	磁製	底面糸切り	73
365	窯道具	ガンギ	表層	8.8	8.1	1.9	赤褐色	陶製	5足	73
366	窯道具	ガンギ	2	5.9	4.4	1.6	黒褐色	陶製	5足	73
367	窯道具	ガンギ	2	6.9	5.8	1.5	褐色	陶製	4足	73
368	窯道具	ガンギ	表層	7.0	6.9	2.6	茶褐色	陶製	6足か?	73
369	窯道具	ガンギ	2	6.3	5.5	2.4	褐色	陶製	6足	73
370	窯道具	ガンギ	2	5.3	5.2	1.9	灰白色	磁製	5足	73
371	窯道具	ガンギ	2	4.7	4.6	1.3	白色	磁製	5足　上面に高台痕あり　上面糸切り	73
372	窯道具	ガンギ	表層	7.0	9.0	4.6	茶褐色	陶製	5足	74
373	窯道具	ガンギ	2	7.5	8.3	3.1	−	陶製	5足　全面褐釉	74
374	窯道具	ガンギ	3	8.5	8.0	2.2	にぶい褐色	陶製	上面に高台痕あり　上面糸切り	74
375	窯道具	ガンギ	2	6.5	6.3	2.4	にぶい褐色	陶製	5足　上面に高台痕あり　上面糸切り	74
376	窯道具	ガンギ	2	6.7	6.8	1.8	にぶい褐色	陶製	5足	74
377	窯道具	ガンギ	4	5.3	5.2	1.2	黒褐色	陶製	5足	74
378	窯道具	ガンギ	4	4.6	5.0	1.5	黒褐色	陶製	5足　全面鉄釉	74
379	窯道具	ガンギ	−	4.4	4.5	1.6	黒褐色	陶製	5足	74
380	窯道具	ガンギ	2	4.6	4.4	1.9	黒褐色	陶製	全面鉄釉	74
381	窯道具	ガンギ	4	6.0	5.1	2.1	褐色	磁製	5足　上面糸切り	74
382	窯道具	ガンギ	2	5.5	4.1	1.7	白色	磁製	5足	74
383	窯道具	ガンギ	3	5.3	5.2	1.5	白色	磁製	5足か?　上面に高台痕あり	74
384	窯道具	ガンギ	3表層	13.0	15.6	4.0	黒褐色	陶製		75
385	窯道具	ガンギ	3表層	17.3	18.6	3.7	茶褐色	陶製	上面に釉付着	75
386	窯道具	ガンギ	C−3土坑2	14.2	14.6	2.4	白色	陶製	上面にアルミナ塗布	75
387	窯道具	ガンギ	3	13.0	15.2	3.6	褐色	陶製	6足　上面にアルミナ塗布	75
388	窯道具	ガンギ	4	6.1	−	2.9	黒褐色	陶製		75
389	窯道具	ガンギ	表層	11.0	11.8	2.5	茶褐色	陶製	上面にアルミナ塗布	76
390	窯道具	ガンギ	2	12.4	14.8	3.7	茶褐色	陶製		76
391	窯道具	ガンギ	2	12.9	14.0	5.1	褐色	陶製	上面にアルミナ塗布	76
392	窯道具	ガンギ	2	13.8	15.2	4.7	黒褐色	陶製		76
393	窯道具	ガンギ	1，3	14.9	18.0	7.0	黒褐色	陶製	8足　上部にも4ヶ所の抉りあり	77
394	窯道具	ガンギ	C−3土坑2	13.0	12.2	5.3	黒褐色	陶製		77
395	窯道具	ガンギ	表層	−	−	−	茶褐色	陶製	側面に「周徳」の訂彫りあり	77
396	窯道具	ガンギ	−	−	−	−	茶褐色	陶製	側面に「周徳」の訂彫りあり	77



第78図　窯道具（8）サヤ鉢

サヤ鉢（第78図）

398・399は，灰白色の色調を呈する粗雑な砂質の胎土で作られたサヤ鉢である。筒状の器形で，器高が比較的低く，内底にはアルミナが付着している。口唇部と外底には，粘土と思われる目土が熔着しており何段にも積み重ね上げて使用したものと思われる。399は胴部の下位に円形の穿孔が空けられている。400は，白色の小石を粗に含む赤褐色の色調を呈する粗雑な胎土のもので，サヤ鉢以外の用途も考えられる。



第79図　窯道具（9）サヤ鉢

第24表　窯道具

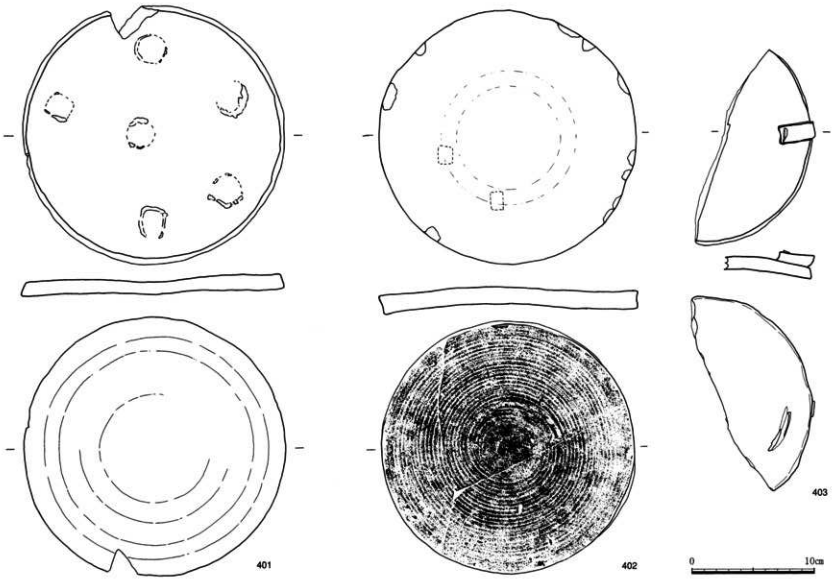
レイアウト番号	器種	器種	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	備考	挿図番号
397	窯道具	サヤ鉢	3	26.4	20.3	25.4	灰褐色	内外面無釉　胎土に白い小石を多く含む　外底面にヒラゴマ付着　二次穿孔あり	78
398	窯道具	サヤ鉢	−	−	20.0	10.8	灰白色	口唇部と外底部に粘土跡あり　内底面にアルミナ塗布	78
399	窯道具	サヤ鉢	4	20.1	21.5	10.5	灰白色	側面に穿孔あり　口唇部と外底部に粘土跡あり	79
400	窯道具	サヤ鉢	2	−	14.7	6.5	赤褐色		79

サヤ蓋（第80図）

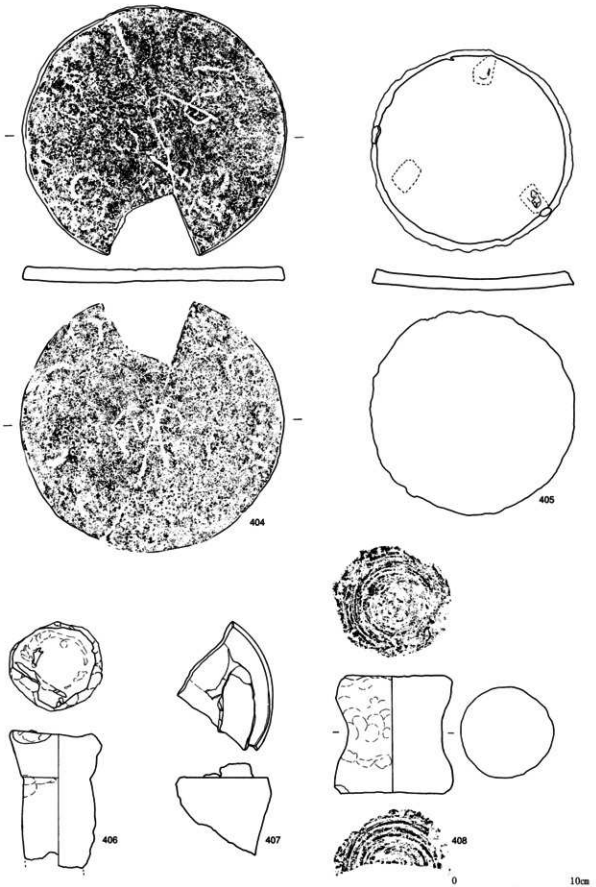
401～405は円板状を呈するサヤ鉢の蓋である。401は上面にアルミナと砂粒，コマ目が付着し，下面にはアルミナと砂粒が付着する。405は上面にコマ目が付着し，下面にはアルミナが付着する。403は上面にコマとわずかではあるが砂粒が付着し，下面はアルミナと砂粒が付着し，さらに皿の高台痕も残っている。404は両面に文字が釘彫りされている資料で，片面には「伸」と思われる文字が，もう片面には「伸五拾枚」と思われる文字が書かれている。この他に図化できなかった資料の中にも，両面に使用した跡が残るものが多く見られ，複数回の使用が推察される。

トチン（第81図）

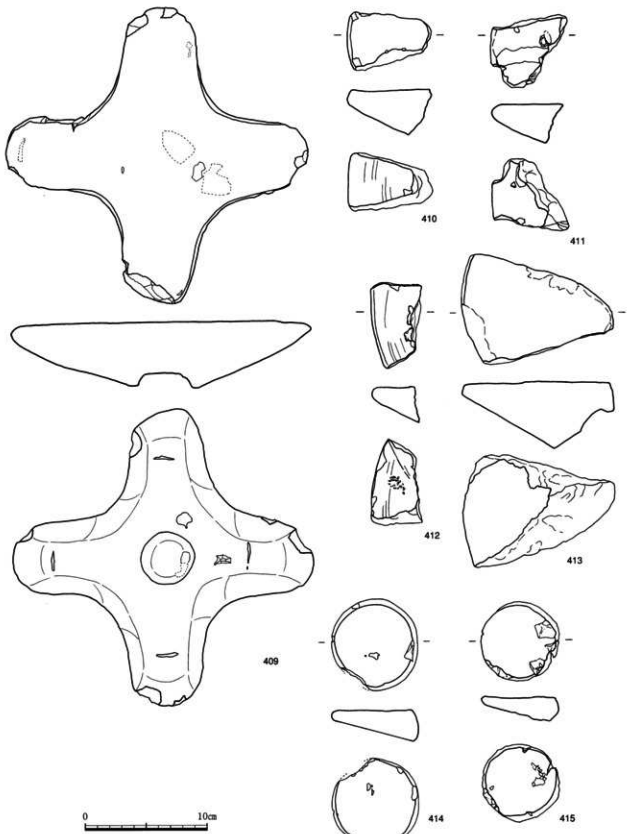
トチンの出土量は少なく，数点である。406は糸巻形トチンと呼ばれる背が高く胴部の細いタイプのもので，上面には碗の高台痕が残っている。407・408は鼓形トチンと呼ばれる胴部のくびれが不明確なずんぐりとしたタイプのもので，407は上面には器種の不明な底部が熔着している。



第80図　窯道具（10）サヤ蓋



第81図　窯道具（11）サヤ蓋・トチン



第82図　窯道具（12）その他

十字形トチン・円盤形トチン（第82図）

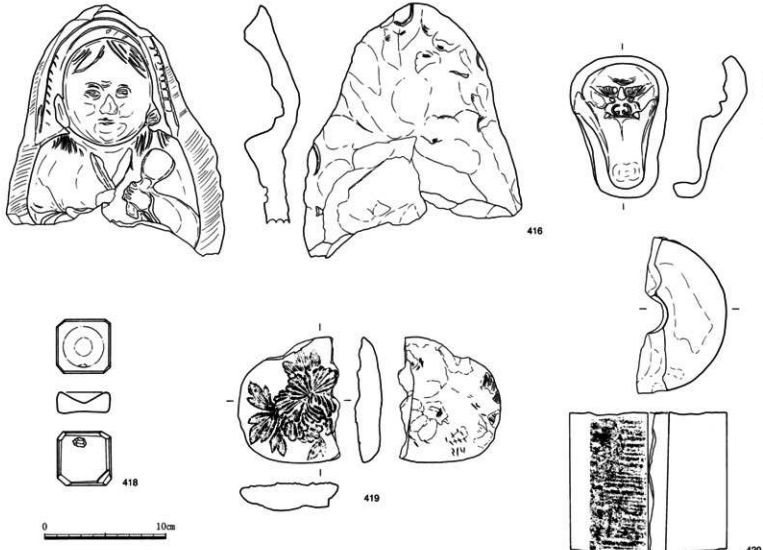
409はタコハマとも呼ばれ，耐火粘土で作られた十字型を呈する大型のものである。裏面中央にはツク（支柱）をはめ込むための凹みが作られている。410～413は十字形トチンまたは円盤形トチンの一部と思われる資料である。

馬蹄型トチン（第82図）

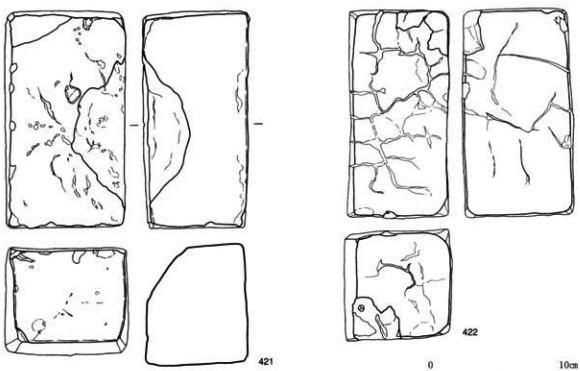
414・415は窯詰めした製品の水平を保つために使用された道具である。

第25表　窯道具

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	法量 径	法量 下部径	法量 高さ	胎土	備考	挿図番号
401	窯道具	サヤ蓋	－	2	21.0	－	厚さ1.0	黒褐色	上面にヒラゴマの目跡，アルミナ，砂粒付着下面にアルミナ，砂粒付着	80
402	窯道具	サヤ蓋	－	C-3土坑2	20.8	－	厚さ1.5	茶褐色	下面に砂粒付着	80
403	窯道具	サヤ蓋	－	4	18.6	－	厚さ1.0	黒褐色	上面にヒラゴマ熔着，砂粒付着　下面にアルミナ，砂粒，高台痕付着	80
404	窯道具	サヤ蓋	－	C-3土坑2	21.4	－	厚さ1.1	茶褐色	両面に釘彫りあり	81
405	窯道具	サヤ蓋	－	C-3土坑2	16.5	－	厚さ1.0	黒褐色	上面にヒラゴマの目跡付着　下面にアルミナ，砂粒付着	81
406	窯道具	トチン	－	2	胴部径6.0	7.5	9.8	赤褐色	上面に高台痕あり	81
407	窯道具	トチン	－	－	幅7.8	10.1	6.5	淡褐色	上面に熔着物あり　胎土に白色の小石粒を多く含む	81
408	窯道具	トチン	－	C-3土坑2	上部径9.7 中部径7.5	9.5	9.6	褐色	上面と下面に年輪状の沈線が入る	81
409	窯道具	トチン	十字型	2	幅24.5	－	5.4	褐色	中心に凹みあり	82
410	窯道具	トチン	円盤形?	2	幅6.8	－	3.7	赤褐色	十字型または円盤型トチンの一部	82
411	窯道具	トチン	円盤形?	C-3土坑2	幅5.3	－	3.2	黒褐色	十字型または円盤型トチンの一部	82
412	窯道具	トチン	円盤形?	C-3土坑2	－	－	2.9	－	十字型または円盤型トチンの一部	82
413	窯道具	トチン	円盤形?	2	幅12.1	縦8.9	5.4	黒褐色	円盤型トチンの一部	82
414	窯道具	トチン	馬蹄型	－	－	－	－	灰褐色		82
415	窯道具	トチン	馬蹄型	C-3土坑2	－	－	2.2	褐色		82



第83図　製作用具



第84図　窯壁　トンバイ

製作用具（第83図）

窯道具に混在して，製作時に使用したと考えられる道具が出土している。

416・417は陶製の型である。416は手にしゃもじを持ち，背に簑をかぶる田の神である。417は香炉の脚部の型と考えられ，獅子頭が付く。418は轆轤の軸受けで，磁製で，上面中央部のくぼみ部分にのみ透明釉が掛けられている。419・420は使用方法は不明であるが，製作に関連する用具ではないかと思われ，ここに置いた。

トンバイ（第84図）

窯壁として用いられていた資料である。この他にも窯壁の一部と思われる資料は多く出土している。どちらも直方体の形を呈するが，421は長い方の一辺の中央が丸く切り取られており，その裏側に当たる面が焼成を受け黒く変色している。422は正面及び裏面が焼成を受け黒く変色している。

第26表　製作用具・窯壁

レイアウト番号	器類	器種	出土区層	法量 幅	長さ	厚さ	胎土	釉薬・釉調	備考	挿図番号
416	製作用具	抜き型	C－3土坑2	17.7	17.9	3.2	赤褐色	－	田の神	83
417	製作用具	抜き型	C－3土坑2	7.9	11.5	2.5	赤褐色	－	香炉等の獅子頭の足部の型と思われる	83
418	製作用具	軸受け	3	縦4.4	横4.4	高さ1.7	－	中心部に透明釉・白色	磁製　轆轤の軸受け	83
419	製作用具？	型？	－	8.2	10.1	2.2	磁石	－	磁製　型作りのための型か	83
420	製作用具？	ツク？	3	縦11.8	横12.9	6.3	褐色	－	ツク（支柱）の可能性有り	83
421	窯壁	トンバイ	－	縦11.7	横23.6	高さ13.1	茶褐色	－	少量の煤が付着	84
422	窯壁	トンバイ	－	縦11.8	横22.6	高さ10.8	褐色	－		84

消費遺跡的様相を示す遺物（生活用品）

本遺跡の出土遺物の中で，消費地的様相が強い遺物については生活用品として一括して掲載した。

生活用品としては，陶磁器，かわらけ，土製品，鉄製品，石製品等多種多様な遺物が出土している。陶磁器類は胎土区分により，磁製と陶製に大別して掲載した。また，陶器はさらに薩摩でいうところの「白もの」（白色陶土のもの）と「黒もの」（褐色系の陶土のもの）に細分して掲載した。

なお，陶製の遺物の中には，生産地的様相を併せ持つ資料も混在するが，出土量が極端に少なく，使用痕の残るものに関しては，生活用品として取り上げた。

磁器類（第85図～第93図）

磁器類については染付の碗・皿・鉢・蓋と，白磁の小坏・茶托，近代青磁等が出土した。白色の胎土に透明釉が畳付を除いて総釉で掛けられ，文様の大部分は呉須で描かれているが，中にはコバルトを使用したものや，色絵等も見られる。コバルトを使用したものの中には，銅板転写で絵付けされた資料もある。呉須で描かれたものは「くらわんか」と呼ばれる幕末の大量生産された雑器に相当するものが多い。呉須以外の資料に関しては近代以降の資料と考えられるが，本遺跡の時期を考える上での一資料として割愛せず掲載した。

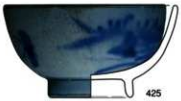
生産地としては，本遺跡の近隣には幕末頃肥前系磁器を生産する窯跡が所在するため，在地産のものと考えられる。しかし，銅板転写の技法については現在のところ在地の窯跡では確認されておらず，肥前ないしは瀬戸・美濃の製品の可能性が考えられる。なお，459は土坑３内出土遺物である。

白薩摩（第94・95図）

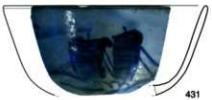
471～488は通称「白薩摩」と呼ばれる白色系の緻密な胎土を呈する陶器と，灰白色系の胎土を呈する陶器である。471～477は碗である。471・472は見込みにガンギの目跡が看取される。471は外面はヘラ状工具で軽く面取りされ，透明度の高い釉薬が畳付以外総釉で掛けられる。472は外面に呉須で家紋と思われる文様が一対描かれている。473は外面に呉須で文様が描かれ，474は鉄絵が描かれている。478は大皿もしくは盤であると思われる。481は餌猪口である。482は急須と思われ，外面には，灰色の胎土に白色土で象嵌が施される。484は土瓶の底部で，外底面は無釉である。483は小鉢である。筒状の蓋が被るものと考えられ，蓋と接する部分から筒状部の外面にかけては無釉となる。485は用途不明のもので，磁製である。486は口縁部が輪花を成す高坏である。487・488は上面に呉須で花文が描かれた薄手のもので，全体の器形が不明である。土坑３内出土の遺物である。

その他の陶器・土製品・石製品（第96図～第98図）

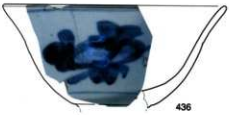
489は中碗で，灰色の陶胎に白化粧土を掛け，その上から呉須で文様を描き，透明釉を畳付以外総釉で掛ける資料である。490は高台部が欠損しているが，白化粧土の上から褐釉を掛けた竜門司焼の二彩の碗である。491は白色の緻密な陶土に褐釉が畳付以外総釉で掛けられた資料で，半筒形の器形を呈する碗である。492は小坏である。493・494は口唇部や口縁部内面の釉薬が

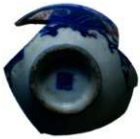


第85図　生活用品（1）磁器



第86図　生活用品（2）磁器





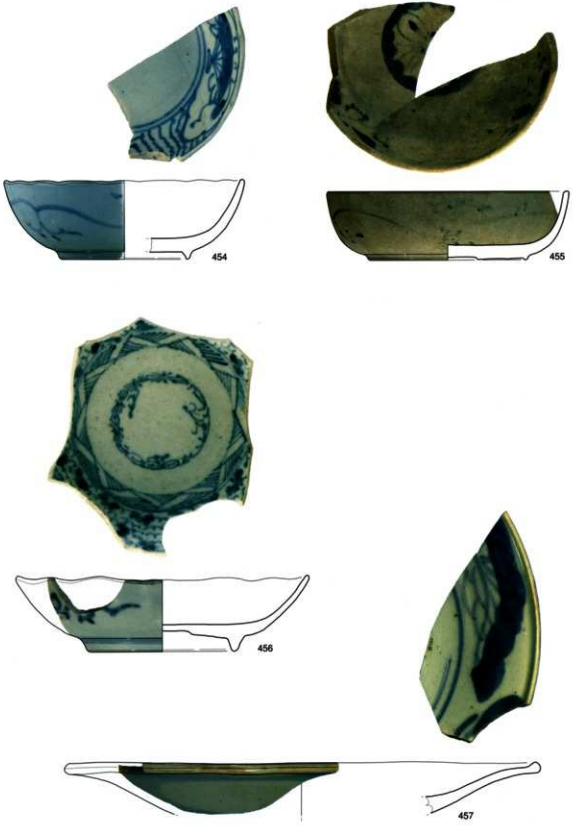
第87図　生活用品（3）磁器

第88図　生活用品（4）磁器

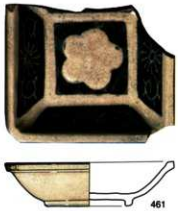
第89図　生活用品（5）磁器

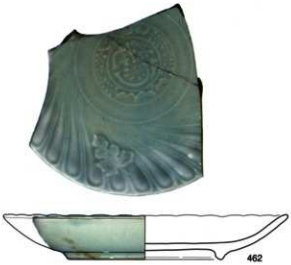
第27表　生活用品

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	産地	備考	掲図番号
423	碗	中碗	−	2	10.1	5.8	6.7	白色	在地	雞・ひよこ文　高台内面に「石」	85
424	碗	中碗	−	表採	−	5.6	−	白色	在地	425と同種	85
425	碗	中碗	浅半球形	2	9.4	4.4	5.0	白色	在地	やや青味を帯びた釉調	85
426	碗	中碗	−	2	9.4	−	−	白色	在地	宝文？	85
427	碗	中碗	−	3	10.3	3.2	5.0	灰色	在地	見込み蛇ノ目釉剥ぎ　格子文	86
428	碗	中碗	端反形	3	9.6	3.7	6.1	灰色	在地	窓絵花文　見込みに重ね焼きの跡残る	86
429	碗	中碗	端反形	3	9.9	3.7	5.7	白色	在地	山水文	86
430	碗	中碗	端反形	1	9.7	4.0	5.9	白色	在地	力士文　見込みの器壁が荒れている	86
431	碗	中碗	−	表採	11.0	−	−	淡灰白色	在地	帆掛け舟文	86
432	碗	中碗	端反形	3	10.4	−	−	白色	在地	やや青味を帯びた釉調	86
433	碗	中碗	−	2	10.0	3.7	5.0	白色	不明	銅版転写　コバルト　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	87
434	碗	中碗	平形	3	11.1	3.4	4.5	白色	不明	プリント？	87
435	碗	中碗	−	土坑2・2	9.3	−	−	白色	不明	銅版転写　コバルト	87
436	碗	中碗	平形	2・表採	12.0	−	−	白色	在地	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	87
437	碗	中碗	平形	2	−	3.6	−	白色	不明	銅版転写　コバルト　見込みくずれた松竹梅文	87
438	碗	小碗	端反形	3	6.8	2.8	4.3	白色	不明	銅版転写？　コバルト	87
439	碗	小碗	丸形	表採	7.4	3.4	4.7	白色	不明	銅版転写？	87
440	碗	小碗	端反形	2	7.2	3.0	4.3	白色	不明	銅版転写？　菊文	88
441	碗	小碗	−	2	−	3.2	−	白色	在地		88
442	碗	小碗	浅半球形	3	6.5	2.3	3.2	白色	不明	笹文に文字	88
443	碗	小碗	筒丸形	1	7.2	4.6	7.0	−	在地		88
444	碗	小碗	筒丸形	1	7.0	4.4	6.3	白色	在地		88
445	碗	小碗	筒丸形	3	6.5	3.4	5.4	淡灰白色	在地		88
446	碗	小碗	筒丸形	2	5.3	3.2	5.0	白色	不明	丸文　銅版転写？	88
447	碗	小碗	筒丸形	表採	5.5	3.0	5.0	白色	不明	丸文　448と同種　銅版転写？	88
448	碗	小碗	筒丸形	土坑2・表採	6.0	3.4	4.8	白色	不明		88
449	碗	−	腰張形	−	7.5	3.0	5.2	白色	在地		89
450	碗	−	−	−	−	5.0	−	白色	在地		89
451	碗	−	−	表採	−	2.7	−	白色	不明	440と同種　銅版転写？	89
452	碗	小杯	端反形	表採	4.2	2.2	3.1	白色	在地	白磁	89
453	碗	小杯	椀形	−	4.3	3.2	3.0	白色	在地	白磁	89

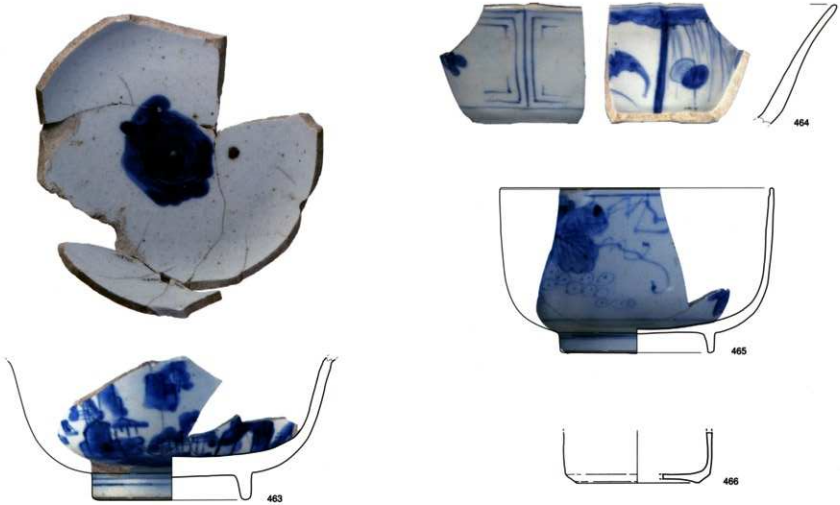


第90図　生活用品（6）磁器

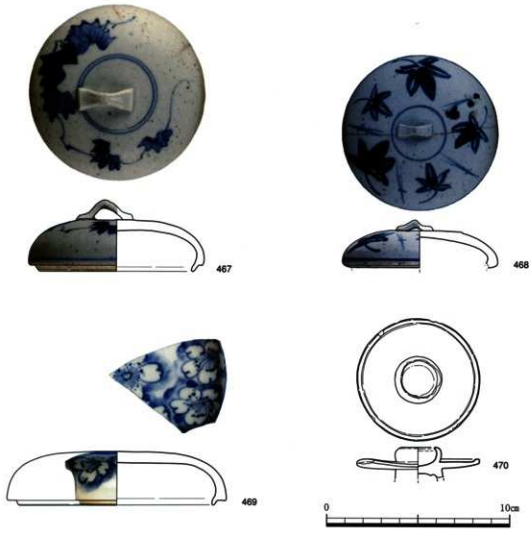




第91図　生活用品（7）磁器



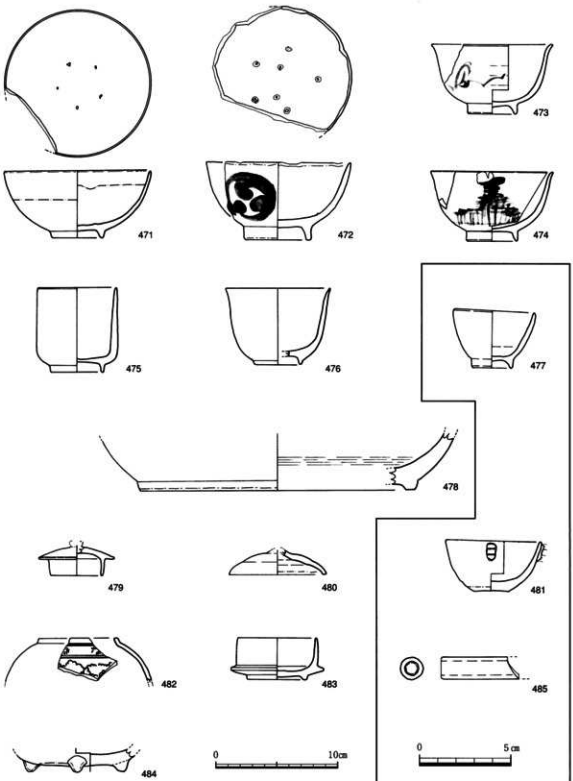
第92図　生活用品（8）磁器



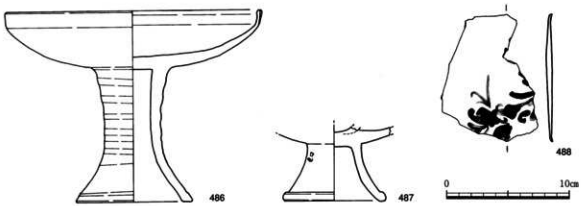
第93図　生活用品（9）磁器

第28表　生活用品

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	口径	法量 底径	器高	胎土	産地	備考	挿図番号
454	皿	五寸皿	輪花	表採	13.0	6.9	4.3	淡灰白色	在地	窓絵扇文	90
455	皿	五寸皿	輪花	表採	13.0	8.5	3.7	灰色	在地	蛇ノ目凹型高台	90
456	皿	五寸皿	輪花	3	15.9	7.9	4.0	白色	在地	唐草文　松竹梅文　蛇ノ目凹型高台	90
457	皿	大皿	折端形	2	15.5	－	－	白色	在地		90
458	皿	小皿	丸形	1	9.5	3.3	1.9	白色	在地	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	91
459	皿	小皿	丸形	D－2土坑3	9.1	4.9	2.4	－	在地	山水文	91
460	皿	小皿	丸形	3	8.8	3.9	2.9	－	在地	山水文	91
461	皿	小皿	角形	C－3土坑2	9.2	4.6	2.4	灰色	瀬戸・美濃?	花文？	91
462	皿	五寸皿	端反形	3	15.4	8.9	2.4	白色	不明	近代青磁	91
463	鉢	－	－	表採	－	7.4	－	白色	不明	山水文	92
464	鉢	－	－	4	－	－	－	白色	不明		92
465	鉢	中鉢	腰張形	1・表採	14.8	8.1	9.0	白色	不明	口縁部内側釉剥ぎ　蓋	92
466	鉢	－	－	表採	－	6.7	－	白色	肥前系	外面青磁釉	92
467	蓋	蓋物蓋	－	4	最小8.4	最大 9.5	3.9	白色	在地		93
468	蓋	蓋物蓋	－	3	最小7.4	最大 8.4	2.6	白色	在地	楓文	93
469	蓋	蓋物蓋	－	2	最小10.5	最大11.9	2.9	白色	在地	花文　つまみなし	93
470	器台	茶托	－	3	つまみ2.0	最大 6.7	－	白色	在地	白磁　歪みあり	93



第94図　生活用品（10）白薩摩

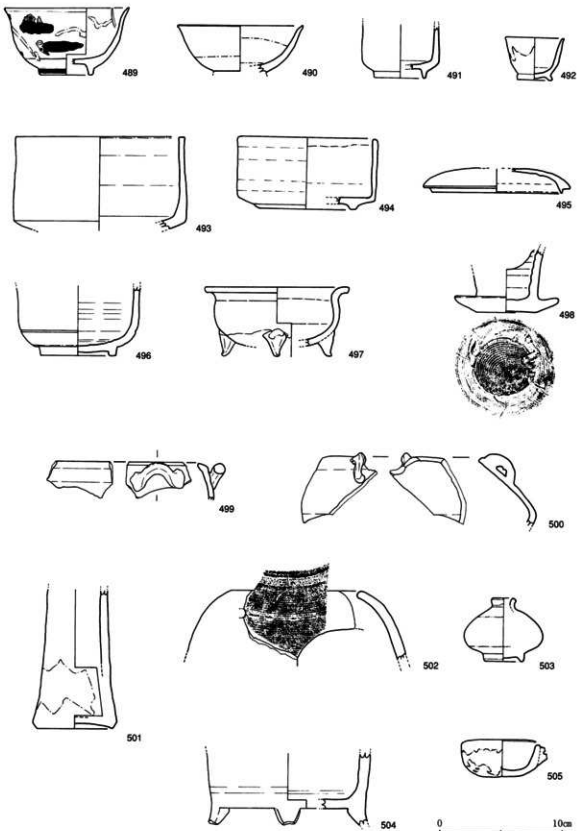


第95図　生活用品（11）白薩摩

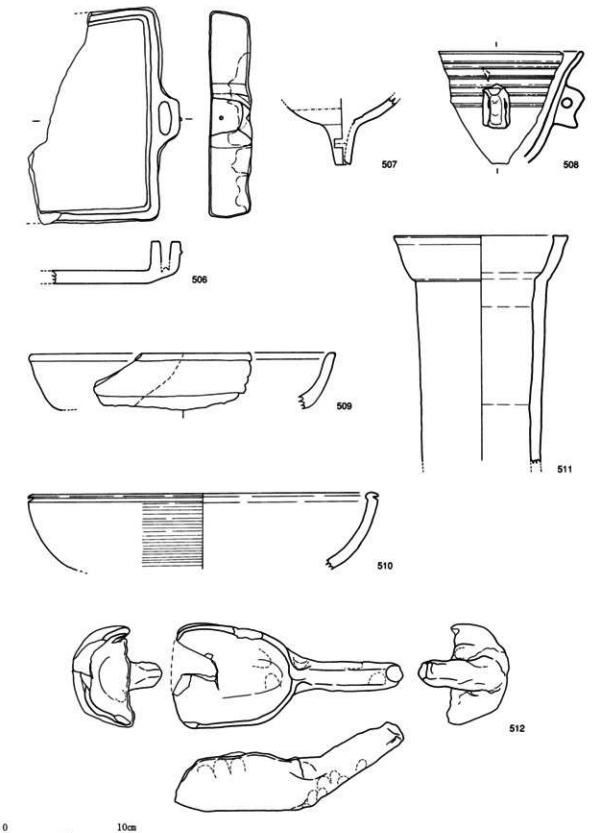
第29表　生活用品

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	法量 口径	法量 底径	法量 器高	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
471	碗	中碗	半球	3	12.0	4.2	5.4	白色	透明釉	見込にガンギの目跡5ヶ所あり　畳付以外総釉	94
472	碗	中碗	丸形	表層	11.7	5.2	6.3	黄白色	透明釉	貫入が密に入る　外面に家紋と思われる紋が一対鉄須で描かれている　見込にガンギの目跡5カ所あり　畳付以外総釉	94
473	碗	中碗	端反	3	9.8	3.9	5.7	灰白色	透明釉	外面に鉄須の文様あり　畳付以外総釉	94
474	碗	中碗	端反	−	6.6	2.8	3.8	灰白色	透明釉	畳付以外総釉　外面に鉄絵あり	94
475	碗	小碗	丸胴	C−3土坑2	6.4	4.4	6.9	白色	透明釉	見込に灰かぶりの跡が見られる　畳付以外総釉	94
476	碗	小碗	半胴	3	8.5	3.8	6.3	白色	透明釉	畳付以外総釉	94
477	碗	小杯	−	−	4.4	2.1	3.1	白色	透明釉		94
478	皿か盤	−	−	表層	(28.5)	22.4	(4.5)	灰白色	透明釉	畳付以外総釉	94
479	蓋	−	−	1	4.4	6.0	−	白色	内面透明釉	つまみ部欠損　庇部下位から無釉	94
480	蓋	−	−	2	8.0	−	−	白色	透明釉	つまみ部欠損　口唇部は無釉	94
481	鉢	餌猪口	−	−	5.1	1.8	2.8	灰白色	透明釉	把手が付く	94
482	水注	急須	−	1	6.4	−	−	灰色	透明釉	口縁部内面は無釉　外面は象嵌	94
483	鉢	小鉢	−	3	7.6	4.9	3.4	灰白色	透明釉		94
484	水注	土瓶	−	C−3土坑2	−	6.7	−	灰白色	透明釉	外底面は無釉	94
485	不明	不明	不明	2	1.2	−	4.2	白色	外面透明釉	磁製　用途不明	94
486	鉢台	高坏	−	−	13.8	6.2	10.4	淡黄橙色	透明釉	畳付以外総釉	95
487	不明	不明	不明	−	−	5.4	−	白色	透明釉		95
488	不明	不明	不明	D−2土坑3	7.5	−	10.4	白色	透明釉	上面に鉄絵	95

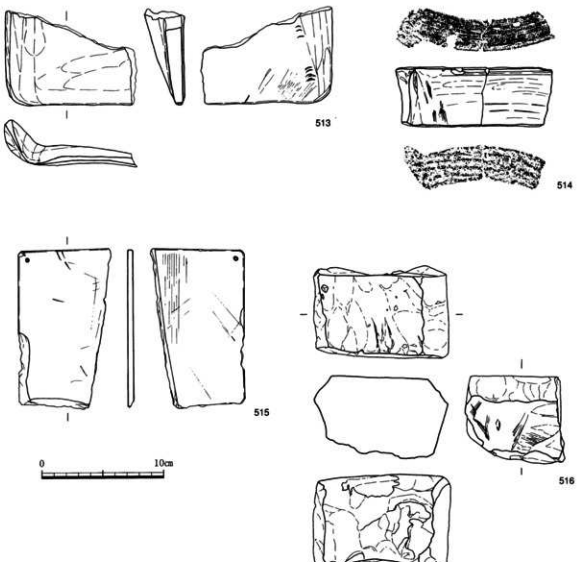
掻き取られており，蓋が付くものと思われる。495は白色の緻密な陶土に褐釉が掛けられた蓋物の蓋と思われる資料である。496は鉢と思われるもので，497は円錐状の脚が3足付く香炉である。498は灯明皿受け台である。外底面には糸切りの跡が残る。499・500は小壺と思われる資料である。501は花器で，外底面は糸切りされている。502は火消し壺もしくは小型の火舎と思われる資料で，無釉である。503は油壺で，白化粧土に褐釉が掛けられた二彩で竜門司焼の資料である。504は火舎の底部で，3足の脚が付くものと思われる。505は餌猪口である。



第96図　生活用品（12）陶器



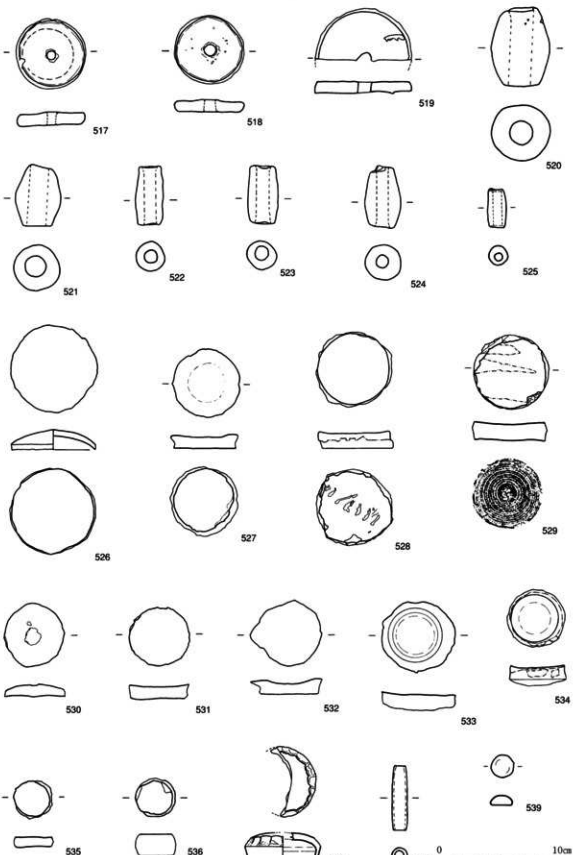
第97図　生活用品（13）陶器・土製品



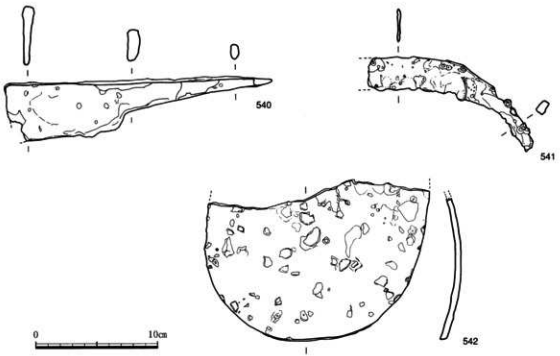
第98図　生活用品（14）その他

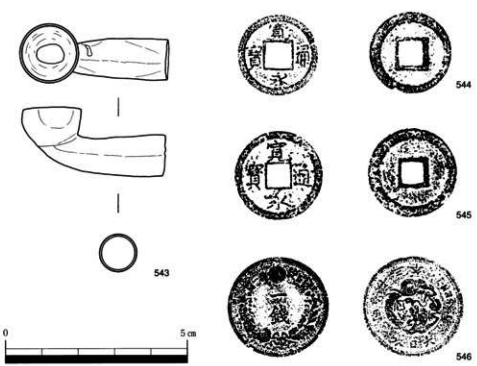
506は把手が付くと思われる角皿で，側面に把手を差し込んだと思われる溝があり，外側から釘状のもので留めた痕跡が残る。507は陶器製の漏斗である。内外面とも注口部は露胎している。508は鉢の口縁部と思われる資料で，外面口縁部下には把手が付く。509・510はかわらけの焙烙である。外面には煤が付着している。511は土管である。外面は緑褐色に発色した鉄釉が掛けられるが，内面は中位までと思われる。長さ等は不明である。512は手づくねで製作された杓子である。土坑３内出土の遺物である。

513・514は用途不明の製品である。515は石版で，片隅には小さな穿孔が施されている。516は磁石を利用した砥石であろうと思われる。

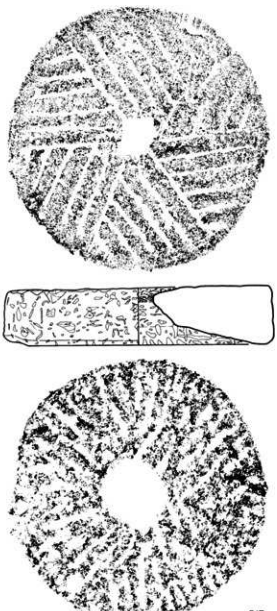


第99図　生活用品（15）紡錘車・土錘・メンコ他





第100図　生活用品（16）鉄製品・古銭



第101図　生活用品（17）石臼

紡錘車・土錘（第99図）

517～519は素焼きの紡錘車である。

520～525は土錘で，大小様々な大きさのものが出土している。

メンコ他（第99図）

526～536はメンコである。526・530は蓋を転用したもので，つまみの痕跡が看取される。526は内面全体に煤が付着している。527～529・537～535は陶器底部を転用したもので，536は瓦を転用したものである。

537は蓋の底部を打ち欠いてメンコ状に丸くした資料であるが，口縁部はそのまま残している。

538・539は用途不明の磁製の資料で，538は外面に透明釉が掛けられる。

539はボタン状の器形を呈し，上面にのみ透明釉が掛けられる。

鉄製品・古銭（第100図）

540～542は鉄製品で，540は包丁の刃部分であると思われる。511・512は詳細不明である。　543は真鍮製のキセルの火皿部である。

544・545は寛永通宝で，裏面に文字等は見られない。546は一銭で，表面に「大日本明治13年」と「1　SEN」とかかれている。

石臼（第101図）

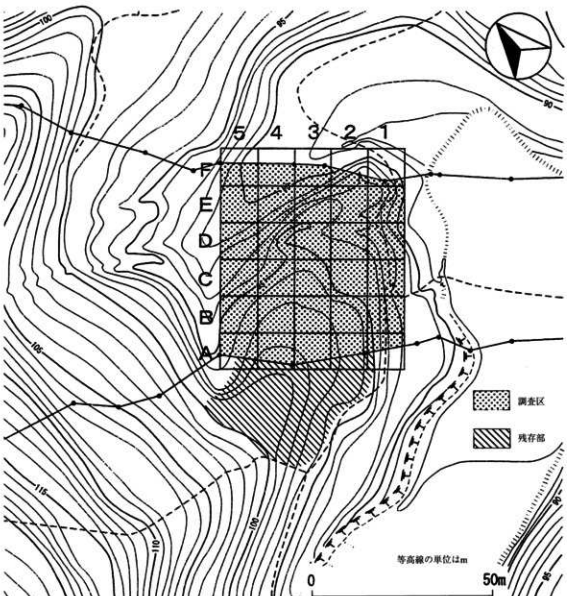
547は石臼の下段部である。上面には浅く彫り込まれた1単位6条の溝が，中心から放射状に6方向に施される。

第30表　生活用品

レイアウト番号	器類	器種	器形	出土区層	法量 長さ・径	法量 幅	法量 厚さ	胎土	釉薬・釉調	備考	掲図番号
489	碗	中碗	端反	C－3土坑2	10.2	4.4	5.5	灰色	透明釉	白化粧土の上に長須で文様を描き量付以外総釉でかける	96
490	碗	中碗	端反	表層	10.2	－	3.7	灰褐色	白化粧土に褐釉	竜門焼の二彩　見込に蛇ノ目釉剥ぎ	96
491	碗	小碗	半筒	4	－	4.2	－	白色	鉄	量付以外総釉	96
492	碗	小杯	端反	表層	4.8	2.8	4.5	淡茶褐色	鉄・褐色	量付以外総釉	96
493	鉢	植物	半筒	1	13.2	－	7.5	灰白色	内外面鉄か？・褐色	口唇部は無釉	96
494	鉢	植物	半筒	4	11.5	8.1	5.8	白色	鉄	量付以外総釉	96
495	皿	植物の皿	－	－	－	－	－	白色	鉄・褐色	底部下と口縁部外側無釉　やや緑がかった透明釉がかかる	96
496	鉢	？	－	C－3土坑2	最大10.1	6.2	5.5	褐色	内外面鉄	外面量付脇まで施釉	96
497	鉢	香炉	偏平かな	2	11.8	－	5.6	赤褐色	鉄・緑褐色	内面口縁部やや下から外面腰部まで施釉　3足と思われる	96
498	器台	灯明皿受台	－	2	最大8.4	4.8	5.2	褐色	鉄・褐色	皿部外面と外底面は無釉　底部糸切り	96
499	壺	小壺	－	3	幅5.2	－	2.9	黒褐色	鉄・緑褐色	双耳と思われる	96
500	壺	小壺	－	C－3土坑2	－	－	5.7	灰色	鉄・緑褐色	双耳と思われる	96
501	瓶	仏花器	－	2	－	6.2	11.3	褐色	鉄・黒色	底部無釉　糸切り	96
502	鉢	火消し壺？	－	表層	11.0	－	5.5	黒褐色	－	内面煤付着	96
503	瓶	油壺	－	1	最大6.4	3.2	5.2	灰褐色	白化粧土に褐釉	竜門焼　二彩	96
504	鉢	火鉢	－	3	－	12.5	－	赤褐色	外面鉄？	底部3足	96
505	鉢	鍋焼口	－	2	6.4	1.4	3.0	黒褐色	内外面鉄・黒色	鳥の摂入れ	96
506	皿	手付き角皿	角	2	－	－	3.4	茶褐色	内外面鉄・黒色	口唇部と外底面は無釉　把手が付くと思われる	97
507	灼子	漏斗	－	表層	－	－	－	黒褐色	鉄・黒色		97
508	鉢	？	－	4	－	－	－	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	側面に耳が付く	97
509	鏑	焙烙	－	表層	25.2	－	－	茶褐色	－	外面ヘラ状工具による調整　煤付着	97
510	鏑	焙烙	－	1	29.0	－	－	にぶい黄橙色	－	外面ヘラ状工具による調整　煤付着	97
511	土管	土管	－	C－3土坑2	14.0	－	－	淡褐色	鉄・淡黄緑色		97
512	灼子	灼子	－	D－2土坑3	長さ18.7	幅8.5	－	淡褐色	－	手づくね	97
513	土製品	不明	－	C－3土坑2	－	－	1.5	褐色	－	用途不明	98
514	土製品	不明	－	3	－	－	3.6	黄褐色	－	用途不明	98
515	石製品	石板	－	C－3土坑2	－	－	0.5	－	－	角に穿孔1つあり	98
516	石製品	磁石？	－	－	－	－	6.5	白色	－	白色の磁石　磁石か	98
517	土製品	紡錘車	－	2	3.7	0.9	－	黒褐色	－		99
518	土製品	紡錘車	－	3	3.7	0.9	－	黒褐色	－		99
519	土製品	紡錘車	－	3	7.8	0.9	－	にぶい黄橙色	－		99
520	土製品	土錘	－	1	4.8	長さ7.6	－	黒褐色	－		99
521	土製品	土錘	－	3	3.2	長さ5.0	－	黒褐色	－		99
522	土製品	土錘	－	2	2.3	長さ4.8	－	赤褐色	－		99
523	土製品	土錘	－	2	2.4	長さ4.7	－	赤褐色	－		99
524	土製品	土錘	－	4	2.9	長さ5.0	－	赤褐色	－		99
525	土製品	土錘	－	表層	1.5	長さ3.2	－	黒褐色	－		99
526	？	？	－	4	6.9	1.7	－	黒褐色	上面のみ鉄・黒色	量の転用　内面に煤付着	99
527	メンコ	－	－	表層	5.5	1.1	－	黒褐色	上面のみ鉄・褐色	陶器の転用	99
528	メンコ	－	－	2	6.1	1.4	－	黒褐色	上面のみ鉄・緑褐色	側面に釉だれあり　陶器の転用	99
529	メンコ	－	－	2	6.1	1.5	－	赤褐色	上面鉄？・黒褐色	陶器の転用	99
530	メンコ	－	－	4	4.9	1.0	－	黒褐色	上面鉄	量の転用	99
531	メンコ	－	－	4	4.9	1.1	－	茶褐色	上面鉄・淡黄緑色	陶器の転用	99
532	メンコ	－	－	2	5.8	1.2	－	黒褐色	鉄・褐色	陶器の転用	99
533	メンコ	－	－	－	6.0	1.3	－	茶褐色	鉄・淡黄緑色	陶器の転用	99
534	メンコ	－	－	2	4.6	1.4	－	赤褐色	鉄・淡黄緑色	側面に釉だれあり　陶器の転用	99
535	メンコ	－	－	2	3.2	0.8	－	褐色	無釉	陶器の転用	99
536	メンコ	－	－	4	3.3	1.8	－	白色	－	瓦の転用	99
537	不明	－	－	3	6.2	2.7	－	茶褐色	上面のみ鉄	用途不明　量の転用　底部を打ち欠いている	99
538	不明	－	－	C－3土坑2	1.2	長さ5.3	－	白色	無釉	磁製　馬の装飾品か	99
539	不明	－	－	表層	1.8	0.8	－	白色	上面のみ透明釉	磁製　用途不明	99
540	鉄製品	包丁	－	－	22.0	－	－	－	－		100
541	鉄製品	不明	－	－	－	－	0.2	－	－		100
542	鉄製品	不明	－	－	－	－	－	－	－		100
543	銅製品	キセル	－	－	4.0	－	－	－	－	キセルの先端部	100
544	古銭	寛永通寶	－	－	2.2	－	0.1	－	－		100
545	古銭	寛永通寶	－	－	2.4	－	0.1	－	－		100
546	古銭	一銭	－	－	2.8	－	0.15	－	－		100
547	石製品	石臼	－	－	36.6	－	－	－	－	石臼の下の部分	101

第４節　調査後の遺跡概要

雪山遺跡の遺跡範囲のうち，今回本調査を実施した範囲については調査を終了したので遺跡は消滅した。調査後，南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設工事が進められ，平成13年４月６日に供用が開始されている。ただし，遺跡西側の緩斜面には縄文時代早期を中心とする遺跡が残存している可能性が高い。また，遺跡周辺には近世から近代の陶磁器類が散布している状況があることから『東市来町郷土史』などによると，遺跡周辺には，雪ノ山窯跡・高山窯跡が存在したことに関する記述がみられることなどから，範囲外の地点に遺跡が拡がる可能性が高い。遺跡北東側斜面ついても陶磁器類の散布が認められたことから，付近に窯跡もしくは物原等が存在する可能性が考えられる。



第102図　遺跡残存状況図

第４章　まとめ

第１節　縄文時代の遺物について

Ⅰ類土器について

Ⅰ類土器は，「胴部の文様が，貝殻条痕文の上に貝殻条痕文や貝殻刺突文を重ねるタイプである。地の貝殻条痕文が文様の主体を占めている。円筒形土器と角筒形土器が出土している。」というものである。一般的には，縄文時代早期の前平式土器と呼称されている土器の範疇に属する。

河口貞徳は，南州神社の調査で角筒土器と同じ２重施文がみられる円筒形土器の存在を指摘していた。しかしながら，その後の調査で２重施文がみられる円筒形土器が出土しなかったために，その存在が疑問視されていた。

近年，資料の増加により円筒形土器に２重施文を施すタイプの存在が，明らかになりつつあり，宇治野原遺跡，志風頭遺跡，建昌城跡，永野遺跡で報告されている。松本町前原遺跡や伊集院町上山路山遺跡でも出土しているようであるが，現在のところ未報告である。

各研究者のこの土器に対する呼称は，「前平第２類（河口貞徳）」，「南州神社タイプ（本田道輝）」「（仮称）前原式土器（新東晃一）」，「志風頭式土器（上杉彰紀）」，「前平式土器（志風頭タイプ）（黒川忠広）」となっている。

Ⅱ類土器について

Ⅱ類土器は，「胴部の文様が，貝殻条痕文の上に刺突文が密に施されるタイプである。円筒形土器と角筒形土器が出土している。」というものである。一般的には，縄文時代早期の吉田式土器と呼称されている土器の範疇に属する。

この土器は，胴部文様は前平式土器に類似しており，器形や楔形凸帯が貼り付けられることがあるという点は吉田式土器に類似している。両者の中間に位置する土器という点では，各研究者は一致している。

各研究者のこの土器に対する呼称は，「加栗山式土器（長野真一・前迫亮一）」，「椿ノ原タイプ（本田道輝）」，「知覧式土器（新東晃一）」，「前平第1類（河口貞徳）」となっている。

Ⅲ類土器について

Ⅲ類土器は，「幅広い肥厚部を有し，キャタピラ状の押し引き文が施される。その間に指頭による凹線がみられる。」というものである。文様の描き方に関しては，並木式土器に類似しているが，鹿児島県内で肥厚部に施文する並木式土器の出土例はみられない。

肥厚部に施文する例として，横川町中尾田遺跡出土のⅢ類土器がある。佐賀県平原遺跡にこのタイプの出土例があり，徳永紹貞は，並木式土器に先行する可能性が高いことを指摘している。東和幸は，並木式土器と中尾田Ⅲ類土器の間に共通の様相がみられる例があることと，肥厚部を作るのは大平式土器の特徴であることから，中尾田Ⅲ類土器を春日式土器の終末と大平式土器の中間に位置付けている。

雪山Ⅲ類土器は，文様の描き方は並木式土器の影響を受け，器形は中尾田Ⅲ類土器の影響を受けた土器といえる。縄文時代中期末の土器であると考えられる。

Ⅳ類土器について

Ⅳ類土器は，「口縁肥厚部に沈線文を有し，口唇部をやや平坦に調整し，刺突が施されている。」というものである。

口縁肥厚部に文様を有し，口唇部をやや平坦に調整し，刺突を施すという点は南福寺式土器と共通している。異なっている点は，胎土に滑石を含まない。沈線が比較的細い。ケズリが明瞭でないなどである。後期前半に位置する土器であると考えられる。

Ⅴ類土器について

Ⅴ類土器は，「残存部には，文様がみられず，ナデ調整が施される。胴部の屈曲が弱い。」というものである。縄文時代晩期の黒川式土器の深鉢であると考えられる。

（文中　敬称略）

引用・参考文献

河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」『鹿児島県考古学会紀要』第４号　1955
河口貞徳「南九州の早期縄文土器－吉田式と前平式について－」
『乙益重隆先生古希記念・九州上代文化論集』　1990
黒川忠広「南九州貝殻文系土器１鹿児島県」　南九州縄文研究会　2002
新東晃一「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木義昌先生古希記念論集・考古学と関連科学』　1988
新東晃一ほか「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（15）　鹿児島県教育委員会　1981
徳永貞紹ほか「平原遺跡Ⅱ」『佐賀県文化財調査報告書』第120集　佐賀県教育委員会　1993
長野真一「上祇川遺跡群・上楠原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡」
『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』（１）　鹿屋市教育委員会　1984
東和幸「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』№８　南九州縄文研究会　1994
深野信之「鹿児島県姶良町建昌城跡の調査成果－南九州における縄文時代早期集落の１例－」
『関西大学考古学研究室６月例会』関西大学考古学研究室　2001
本田道輝「鹿児島県考古学の諸問題－縄文時代－」『鹿児島考古』第20号　鹿児島県考古学会　1986
前迫亮一「倉園Ｂ遺跡の再検討Ⅰ」『南九州縄文通信』№７　南九州縄文研究会　1993
「宇治野原遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）　金峰町教育委員会　1992
「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（16）　加世田市教育委員会　1999
「建昌城跡」『姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書』（４）　姶良町教育委員会　1991
「永野遺跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』（１）　知覧町教育委員会　1983

第２節　近世・近代の遺構について

この時期の遺構として，炉跡１基・土坑３基・ピット群・焼土域１ヶ所，軽石溜まり２基・シラス溜まり１基が検出されている。いずれも造成によって形成された平坦面（造成面１・２）上に構築されている。

炉跡は，炉の本体部から軽石，砂岩が出土している。これらの軽石類は火熱を受けたと思われ，赤褐色の変色が顕著に認められた。軽石間には粘土状のもので目積が行われているのが確認され，軽石類は炉内に組まれていたものと思われる。鉄滓などは炉内およびその周辺からも確認されて

いないが，鍛冶炉跡の可能性がある。

土坑は，３基検出された。そのうち土坑１・２については，埋土内の出土遺物等から現代に属するものと判断した。土坑３は，埋土内から陶磁器類・耐火煉瓦（トンバイ）・窯道具・寛永通宝などの遺物が出土している。これらの遺物は，土坑の利用が行われなくなった後に投げ込まれたものと考えられる。断面観察の結果，土坑の床面から掘り込み層にかけて水成作用によって形成されたと思われる鉄分層が顕著に認められることから，井戸など水に関連した利用が考えられる。

軽石溜まりは，内部には大きいもので拳大ほどの白色軽石塊と砂状となった軽石粒が詰め込まれていた。シラス溜まりは，形状は楕円形で検出面からの掘り込みは浅く，灰白色のシラスが入り込んでいる状況であった。表土や旧表土の土層と比較して，埋土の色調・性質が異なることから，人為的に掘られた可能性が高いものと判断した。なお，軽石溜まり・シラス溜まりの用途については，窯に関連する性格を持つことも十分に想定される。今後の類例の増加を待つこととしたい。

鮫島佐太郎氏の著書『苗代川のくらし』のなかには「･･･観音窯ができたのは明治の末期で，それまでは雪之山窯で焼いていたと聞かされていた。雪之山窯は，明治の中頃にできた。私の仕事場の後方北側にあたり，玉山神社の南側の小高い傾斜のところで，現在は檜山になっている。

また，『東市来町郷土誌』には，本遺跡付近に，「雪ノ山窯」・「高山窯」という古窯が記載されている。

これらのことから，発掘調査で検出された遺構は，苗代川焼の陶工が残したもので，生活の場あるいは作陶の場としてこの地を利用した際に構築されたものと考えられる。

本遺跡は，薩摩焼の生産地として名高い苗代川の歴史の一端を知る上で貴重な遺跡である。

（文責　三垣恵一）

〈参考・引用文献〉
『東市来町郷土誌』　東市来町教育委員会
『苗代川のくらし』　鮫島佐太郎　1987　南日本新聞開発センター

第３節　近世・近代の陶磁器から見た遺跡のまとめ

（１）遺跡の性格について

本遺跡の近世・近代の陶磁器については，遺構として窯体そのものを検出していないが，一般的な消費遺跡とは異なる様相を示す遺物が多数出土した。焼け歪みが強く使用に耐えられないと思われる資料や，生活品としては多すぎる同器種の資料などがそれにあたる。これらの遺物の様相からは，本遺跡が「生産地的」性格をもつ遺跡であることが想定される。

本遺跡の所在する鹿児島県日置郡東市来町は，文禄・慶長の役で招来された渡来陶工らによって窯業が始まり，連綿と現在に続く薩摩焼生産の中心地である。このため，17世紀の早い段階から元屋敷窯や堂平窯等の窯が開かれ，幕末にかけては南京皿山窯のような肥前系磁器を焼成する窯等も築窯された。近代になってからも各所に窯が築かれ，現代もなお意欲的にその火は消えることなく続いている。

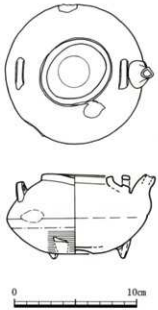
このような歴史的背景から，本遺跡の周辺にも窯跡が存在する可能性が考えられた。このため，文献を調査したところ，『東市来町郷土誌』と『苗代川のくらし』に，関係すると思われる「雪之山窯」という資料を見出した。

『東市来町郷土誌』では，本遺跡と同じ小字内に「雪ノ山窯」（註１）という窯跡の存在が「美山陶磁窯略図」内に掲載されていた。（第104図）

また『苗代川のくらし』には，「雪之山窯は私の仕事場の後方北側にあたり，玉山神社の南側の小高い斜面のところで，現在は檜山になっている。」と記載されているため，著者である鮫島佐太郎氏に聞き取り調査を実施し，多くの御教示を受けた。

・雪之山窯は，鮫島氏の祖父等が従事していた窯で，６軒の窯元からなる共同窯であった。共同窯では，陶工たちがおのおのの家を作業場とし，施釉まで済ませた製品を窯に持ちより焼成し，その後は各作業場に持ち帰り，仕上げ作業や出荷作業を行っていた。
・窯炊きの後，最上部の焼成室から出火し，火事を起こしてしまい，上屋が焼け落ち窯が崩れたため廃窯し，次は観音山窯に移った。
・雪之山窯跡は現在も残っており，佐太郎窯・民陶館の裏山に存在する。
・雪之山窯の開窯時期については，明治中頃から20数年くらいで，明治末期に使用可能な窯材等を運び，観音山窯を築いた。

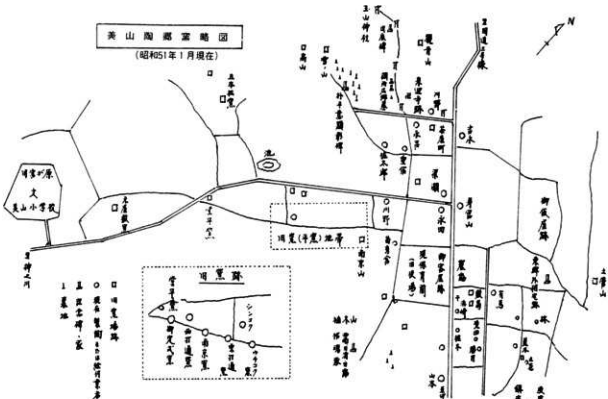
これをもとに，周辺踏査を行ったところ，調査地点から直線距離にして約150m離れた場所に窯跡が所在すると思われる地点を確認した。窯跡は南向きの斜面



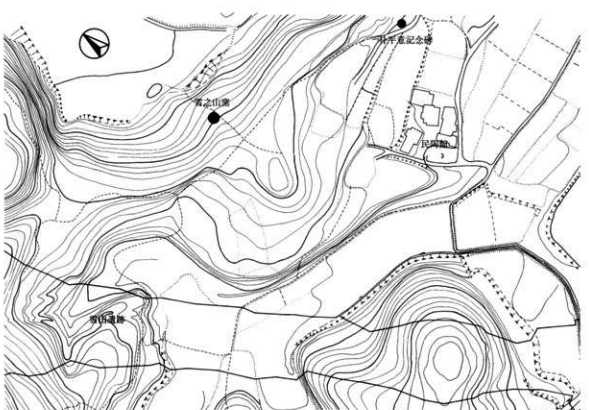
第103図　雪山窯　周辺表採資料

写真　1

写真　2



第104図　『東市来郷土誌（478頁）』より



第105図　雪之山窯　位置図

に築かれており，窯床等は確認していないが，周囲には細かく割れた陶片や激しく焼け歪んだ製品，無数の窯壁等が散乱しており，他の古窯跡と同様の様相であったため，ここが雪之山窯跡であると判断した。（第105図）『薩摩焼の研究』（168頁）ではこの付近に観音（山）窯跡（註2）が所在すると記載している地点である。観音山窯の位置は，鮫島氏の説明から『東市来町郷土誌』に記載されている位置（第104図）が正確と思われる。

今回位置を確認した雪之山窯跡から本遺跡まで，さらに周辺踏査を実施した結果，民家があったことを窺わせる石垣等が残存し，その敷地内には大量の同種同形の製品や，焼け歪みが強く製品として使用に耐えないと思われる資料が散乱しており，本遺跡で出土した遺物と類似する様相をもつ遺物であると思われる。（写真1・2，第103図・第105図）

また，ガンギBに当たる窯道具等も見られたことから，雪之山窯の周辺部にはこの窯に従事する陶工の家屋及び作業場が存在していたと言えよう。『苗代川のくらし』には，「当時この窯の周辺は，人家等があって農作物が作られていたという。しかし田は少なくて米はなかったそうだ。粟，からいも，そば等がつくられていたときかされていた。」とあることからも，この付近に民家があり，その家族の生活が営まれてきたことが窺われる。

雪之山窯跡から，本遺跡までの直線距離と鮫島氏の作業場まではほぼ等しい距離にある。鮫島氏の祖父が約150m離れた雪之山窯へ製品を運び，焼成していたことを考慮すると，本遺跡も雪山窯に従事していた陶工の家屋及び作業場が立地していたと判断することは易い。

このように考えると，本遺跡の出土遺物の年代域が幅広くないことから，本遺跡は雪之山窯の稼働期を中心としてその前後に営まれた生活遺跡と思われる。よって，『苗代川のくらし』に記載されている「明治の中頃から明治末期に窯が稼働していた。」という記録は重用である。また，『苗代川のくらし』には雪之山窯が火災のため廃窯した後，観音山窯が築かれたと記載があるが，『薩摩焼の研究』にも寄合窯として観音山窯の記録が見られる。それによると，観音山窯の築窯は40年前と紹介されており，明治34年（1901）の年代であることがわかる。雪之山窯が『苗代川のくらし』に書かれているように観音山窯の前時期に存在したとすれば，雪之山窯は明治34年の直前に閉窯したことになり，稼働期を20年間程とした記述を参考にすると，開窯は明治10年代ということになろう。いずれにしても，雪之山窯の稼働期は明治10年代から30年代にかけた頃と考えられ，近世～近代にかけての生活跡としての雪山遺跡はこの年代から大きく隔たるものではないと考えられる。

（2）出土遺物について

出土遺物については，陶磁器類が大量に出土した。磁器類は，碗・皿・小坏・蓋等，陶器類は碗・鉢・皿・蓋・土瓶・瓶類・練鉢・擂鉢・鍋・釜・甕・壺・植木鉢・土管等で，いわゆる薩摩焼の「黒もの」と呼ばれる資料である。その他土製品，窯道具，陶磁器の製作用具，窯壁と思われるトンバイなどが出土した。

本遺跡の出土品には，明らかに雪之山窯若しくは苗代川焼ではないと判断される資料が含まれる。これらは陶工等が日常的に使用していた生活用品と考えられるため，雪之山窯製品と生活用品を分類して報告した。しかし，生活用品とした中にも，自給自足の日用雑器として使用された

雪之山窯製品も混在するため，ここでは，雪之山窯の製品と生活用品について分類を試み，それぞれ特徴を箇条書きで述べる。

また出土品の器類又は器種ごとの出土数量・割合については，下表を参考にされたい。

雪之山窯の製品について

・胎土は鉄分を多く含んだやや粗目の陶土で，全般に茶褐色系の色調を呈する。混入粒子等はほとんど観察されず滑らかな胎土であるが，特に土瓶や蓋等の小物については，粘りの少ない陶土が使用されているためか，露胎部の器壁が粗い。鮫島氏の御教示によると，このような土を使用する場合は，器壁の粗れを隠し，当時貴重であった釉薬を節約するために，良質の陶土を水に溶かしたものを化粧土として掛け，その上から薄い釉薬を施釉したという。本遺跡の遺物の中にも，釉薬の下に化粧土が観察される資料（51）もあるが，そのほとんどは判断に苦慮するものである。しかし小形の資料で，粗い胎土の割に施釉面が滑らかに仕上がっているものに関しては，化粧土が掛けられている可能性が高い。

・『苗代川のくらし』によると，苗代川の近隣で良質の陶土が取れる場所として，伊作田・神ノ川日置の川之口地区が紹介されている。伊作田の土は耐火度の強い砂混じりの荒土で，神之川の土は粘りが強くてきめが小さいため，粘りの少ない土のまぜ土として使われ，川之口の土はねばりがあり腰が強くて大形の製品を作るのに適していた最良の土であり，これらの土は昔から採掘されていたことも掲載されている。また，美山でも大穴水車の迫・打水・猿引・美山等の地区で陶土が採集されるが，良質の土ではなく小形の製品しかできなかったようである。また，宮山のも紹介されている。

・釉薬は焼成温度等によって差異が見られるが，基本的には褐色系に発色する光沢の強い鉄釉を使用している。

・『苗代川のくらし』には，「ばんぐすい」（黒釉のこと）と「つぼぐすい」（蕎麦釉のこと）の２種類が紹介されており，本遺跡の遺物にもこのような釉薬が使用されていたものと思われる。

・碗・皿・鉢類等の小形の製品については，統一された規格等はないが，この時期の龍門司焼に見られる見込みの蛇ノ目釉剥ぎの技法は全く見られず，その代わりにガンギの脚部の目跡が看取される。施釉は畳付以外総釉で掛けられるものがほとんどである。特に，碗・皿は土

【製品】

器類 器種	碗	皿	鉢	蓋	土瓶	鍋・釜	練鉢	擂鉢	瓶	甕・壺	植木鉢	計
数量	52	13	46	587	165	49	260	581	23	567	19	2362
%	2.2%	0.6%	1.9%	24.9%	7.0%	2.1%	11.0%	24.6%	1.0%	24.0%	0.8%	

【窯道具】

器類 器種	ヒラゴマ	マガイゴマ	チャツ	センベイ	逆台形型 ハマ	リング型 ハマ	ガンギ A	ガンギ B	サヤ鉢	サヤ蓋	トチン	計
数量	159	115	6	18	4	4	63	61	4	19	10	463
%	34.3%	24.8%	1.3%	3.9%	0.9%	0.9%	13.6%	13.2%	0.9%	4.1%	2.2%	

瓶等に比べて出土量も極端に少なく中には使用痕が認められる資料もあり，陶工らが自らの生活品として製作されたものと考えられる。

・蓋類については，完形品だけでも大量の遺物が出土している。ボタン形状のつまみを有するものであるが，用途としては，土瓶蓋だけでなく，土鍋蓋，羽釜蓋，壺蓋など多種多様である。窯詰方法としては，トンキンに重ね焼きしたものと思われる。（163・168）中にはヒラゴマを使用したと思われる資料も出土している。（153）

・土瓶については，丸形のものと平形のものが出土しているが，どちらも注口はS字状を呈する溜め口のもので，先端を丸く作る。肥前地方の研究で土瓶の編年は，注口の形状が溜め口からてっぽう口に変遷していくことが知られている（九州近世陶磁学会編2000）が，本遺跡では，てっぽう口の土瓶は出土せず，溜め口の注口土瓶しか確認できない。

・練鉢・擂鉢は，規格化された定形品が多く見られ，そのほとんどが使用に耐えられない焼け歪みの強いものであるため，商品として出荷できなかったものが廃棄されたものと思われる。

・擂鉢の特徴としては，内面は先端の鋭い工具で細い櫛目が施され，末端は掻き消さない。口縁部の形状は断面が三角形を呈するもの，T字状の鍔口を呈するものが中心であるが，L字状を呈するものも出土している。これは渡辺芳郎氏の19世紀後半と提唱する「仮称４型式」（渡辺2000ｃ）に相当するものと考えられる。

・擂鉢の外面胴部下位に円錐状の小突起が等間隔で７箇所に貼付された資料が見られる。特異な形状に思われ，用途的な時代性を繁栄しているようにも考えられる。この突起の性格について，鮫島氏から，窯詰する際，滑り止めのような役割をするのではないかと御教示いただいた。川内市の成岡遺跡からもこのタイプの擂鉢の出土例が報告されており，今後の調査例の増加を待ちたい。

・鍋・釜類は民俗例の分類を参考にすると山茶家・お初茶家・羽釜等多種多様な資料が出土した。陶製で金属製の留め具が表現されるなど,金属製品の影響を受けたと思われる製品も散見される。（註３）

・甕・壺については，大形の製品のためか焼け歪みが著しい。甕類は半胴形の大甕が中心で壺類は大形のものから小形のものまで様々な器形のものが作られている。

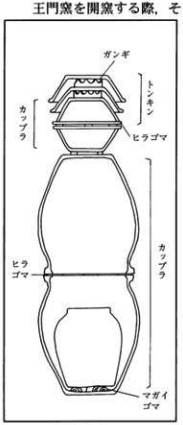
・遺物の中には，焼成後，二次的に外底部から穿孔した資料が見られる。これは商品としては焼け歪みが強く,本来の商品価値を失って出荷できないものに穿孔を施し，植木鉢として低価格で販売したという『苗代川のくらし』の記載内容を裏付けるものであろう。

・貝目技法については，様々な論考が述べられているが，その年代観については，橋口亘・上田耕・若松重弘氏等と，渡辺芳郎氏が，貝目技法が19世紀以降も用いられていた可能性を論じている（註４）。本遺跡の出土品の中で，貝目技法が用いられた資料は，生産地的様相を示す遺物の中で，５点と少ない。器高の低い練鉢の外底面にイタヤガイと思われる貝目が残るもの（245）と，徳利と思われる瓶の外面肩部にイタヤガイの一部と思われる貝目が残るもの（234）や壺の外底面に楕円形の貝目が３ヶ所残るもの（300），甕の底部と思われる資料の内底面に楕円形の貝目が３ヶ所看取されるもの（309・310）が見られる。貝目の有無がこれまで年代決定の基準となっていた薩摩焼の中で，確実な研究成果が徐々に蓄積さ

れつつあり，本遺跡の資料も貝目技法の存続期間を考える上で貴重な資料となろう。また,今後は貝目の存続期間が長期に渡るという薩摩焼の特殊性が確立された後の問題として更に検討を加え，窯詰技術の変遷や窯場ごとの独自性等を解明する必要性が考えられる。

・目跡を持つ資料としては貝目は多くなく，長方形のヒラゴマの目跡が多く見られる。貝目とコマ目の共用について，橋口氏らは，「貝目が製陶の際に，「必要」に応じた合理的選択取の一つとして使用された可能性もある。」（橋口・上田・若松2000）と述べ，さらに「設置別の目の種別集団化が見られることは，貝とコマが窯詰具機能に置いて近しい関係にありながらも，何らかの要因に関連して使い分けがなされたことを示唆している可能性がある。」（橋口2001）と論じている。本遺跡の場合，基本的にはコマを使用するが，出土量の比率から貝は,コマの不足時の代用品として使用したと考えられる。しかし,その使用方法には規則性が窺え，マガイゴマ若しくはガンギの代用として楕円形の貝を使用し，ヒラゴマの代用としてイタヤガイ使用している。

・少量であるが，土管が出土している。苗代川焼での土管生産については，渡辺氏は大正以降に刊行された窯業史に関する文献資料を検討し（註４），白薩摩の生産が衰退した明治後半の苗代川においては，「土管等の繁盛を来し」「土管等の雑器が主として作られている」（註５）という記述に着目し，さらに土管の生産について『鹿児島県統計書』（註６）の資料の整理を試み,苗代川焼における土管生産の様相について論じている。『苗代川のくらし』においても，雪之山窯から移窯した観音山窯が台風の被害を受け，昭和７年に閉窯の後，次に仁王門窯を開窯する際，その資金を窯業組合から借り受け，返済は土管を生産して返却したとの記述がある。明治以降，土管の生産は苗代川焼にとって確実な収入源であったとことが窺われ，今後,土管の生産がいつ頃から始められたのか詳細な調査を待ちたい。



第106図　窯詰復元図

・明治初期の苗代川焼の状況についてイギリスの外交官アーネスト・サトウの記録がある。その一部に，「労働の分離の原則は，充分に理解され，職工に応用されているようである。たとえば，一人で急須の本体の製作だけやると，１日に約150個作ることができる。２人目は蓋を作り，３人目は口を作り，４人目は耳，あるいは取っ手をつける部分を作り，５人目はこれらの部分品を一緒に集める。一般的に家族の者が協力して働く。このように共同的な一団が，他の一団と共に窯の持ち主となる。」（註７）という記述が見られる。これは，雪之山窯稼働期と同時期の見聞録であり，本遺跡で雪之山窯の生産品と思われる遺物についても同様の行程製作されたものと考えられる。

・窯詰方法としては，製品の口縁部や内・外底面に残る目跡と，『苗代川のくらし』のなかで，記述されている窯詰の様子から，ヒラゴマ・マガイゴマ・ガンギを使用しての窯詰方法の復元を試みた（第106図）。『山元窯』においても擂鉢の口唇部の目跡から，

合口の窯詰方法が紹介されている。苗代川焼では合口のことをカップラと呼び，口唇部の間にはヒラゴマを挟む。その内部にはマガイゴマを３か所置き，製品を入れる。本遺跡の遺物の内底にマガイゴマの目跡が残ることから，サヤ鉢の代用として使用したことが窺える。また，ガンギを使用したトンキンとは，口縁を下向きに重ねた窯詰法である。

生活用品について

生活用品については，生産地的様相と消費地的様相を併せ持つ資料，つまり，雪之山窯で生産された製品でありながら，陶工等が日常的に使用する雑器としての製品も含まれる。鮫島氏によると日常の生活に使用するもので陶器で製作できうるものは，ほとんど自給自足で生産していたという。また，苗代川内の南京皿山等の磁器窯で生産されたと思われる磁器類や，少量であるが，苗代川以外の産地の陶磁器も出土している。肥前，瀬戸・美濃製の磁器類や，龍門司焼等がそれにあたる。

（３）窯道具について

本遺跡では雪之山窯で使用されていたと思われる窯道具が大量に出土した。従前知られた窯道具の他に未知見の資料も含まれており，年代的・地域的な技術の差異と窯業史を考える上で興味深いものと考えられる。

コマ

形状の異なるコマが２タイプ出土し，コマＡとＢに分類した。苗代川焼で「ヒラゴマ」と呼ばれるコマＡは『薩摩焼の研究』に「長方形小隔板」として紹介されているもので，コマ自体が出土したのは本遺跡が初めてである。また，コマＢに関しては，『薩摩焼の研究』にも報告がなく，現在のところ鹿児島県内の窯跡でも類例のない資料である。『苗代川のくらし』の中で，「マガイゴマ」として掲載されている資料に相当する。「マガイゴマ」とは「曲がりゴマ」がなまったものである。

ヒラゴマ・マガイゴマを使用した窯詰方法としては，『苗代川のくらし』の中で，「カップラ（合口）の中にはマガイゴマを三つならべ，えんしゅつぼを入れた。」，「カップラは，口と口との間に二寸くらいの間隔でヒラゴマを並べてカップラ（合口）にし，……」と記載されており，本遺跡の出土遺物の中にも擂鉢や甕・壺などの口唇部や内底面に目跡の残る資料やコマそのものが熔着している資料が出土していることからもその使用方法が推測できる。（第106図）

ガンギ

小形のものと大形のものの２タイプに分類した。『原色陶器大辞典』によると，ガンギとは「古染付の山形の連続文」と掲載されているが，『広辞苑』では「雁の行列のようにギザギザの形をしたもの」とされていることから，ガンギの名の由来は脚部に見られるギザギザした山形の剔脚の形状から付けられたものと思われる。小形のガンギＡのうち，磁製のものは，『薩摩焼の研究』で「円板型剔脚隔版」と紹介されているものに類似しており，姶良郡加治木町日木山窯跡で採集されている。その他にも川内市平佐大窯や新窯でも類似の切高台付ハマと呼ばれる窯道具が確認されている（出口1999，前2001）。陶製のものに関しても，東市来町五本松窯跡で表採資料として報告されている。（関一之1999）

ガンギBは，陶製で大形のものであるが，『薩摩焼の研究』にも掲載されておらず，鹿児島県内においても今まで類例のない資料である。マガイゴマと同様，苗代川焼独自性の強い窯道具であると考えられる。

ガンギを利用した窯詰方法としては，ガンギAは，碗や皿の内底に刷足部を下にして置き，重ね焼きをするものであるが，大型のガンギBは，カップラ（合口）をした擂鉢等の上にガンギを刷脚部を上にして置き，擂鉢等を下向きに重ねていく方法で，苗代川焼ではこのような窯詰方法を「トンキン」と呼んでいる。（第106図）本遺跡の遺物の中にも，鉢の底部にガンギBが熔着した資料（90）が出土しており，側面に付着した釉薬の流れる方向から判断して，刷足部を上にして使用したものと推測される。

写真　3　玉山神社戊辰役従軍記念碑

写真　4　台石部

釘彫りの入った窯道具

窯道具の表面や側面に釘彫り・ヘラ描きで，人名と思われる刻字等が入った資料が４点見られた。（註８）356は，逆台形型ハマと呼ばれる磁製の資料で，上面に「臺（台）皿」と記されており，この道具の用途を意味するものと思われる。404は，サヤ鉢の蓋である。片面には「伸」，もう片面には「伸五拾枚」と記されている。苗代川焼の陶工名の中に，「申」という姓名の陶工がいるが，申氏は「申」を「サル」と発音されたため，人偏を付けて「伸」と改めたとする橘南谿「西遊記」が『東市来町郷土誌』に記載されていることから，「伸」は申氏であり，陶工名であろう。また，「五拾枚」に関しては，サヤ鉢を積み重ねあげて一番上に蓋を置き，姓名と窯詰した枚数を記入したものと思われる。

さらに，側面に「周徳」と陶工名と思われる人名が記されたガンギも２点出土している。（395・396）文献や金石文を調べた結果，戊申の役に出兵した「卞周徳」という人物を確認することができた（写真３・４）。この「卞周徳」とガンギに刻まれた「周徳」という人物が同一であるとすれば雪之山窯の稼働期を考察する上で重要な資料となろう。

薩摩焼の中で窯道具に文字等が記される例としては，窯印といわれる簡略な印が知られるが，管見の限り，本遺跡のように陶工名が記される例は現在のところ竪野（冷水）窯（鹿児島市）と本遺跡の資料だけである。

写真　5　鮫島佐太郎氏（右）・寿郎氏

その他の窯道具について

この他に一般的に磁器窯で使用される，チャツ・逆台形型ハマ・センベイ・十字型トチン等の窯道具が出土している。これらは，近隣の磁器窯で使用されていたものと思われるが，陶工の交流等によってもたらされたものと思われ，本遺跡から出土する碗・皿・鉢等を焼成する際，利用されたと考えられる。

（4）高山窯について

本遺跡は，遺跡の所在する小字と，この字内に存在する雪之山窯という窯名から，雪之山窯に従事した陶工の家屋及び作業場として想定して述べてきたが，東市来町郷土誌に掲載された分布図（第104図）によると，この雪之山窯に近接して高山窯という窯跡が記載されている。この高山窯については，他に史料を見出すことができず詳細は不明な窯である。本遺跡の近くにある山舞楽ケ岡の付近を地元の人々が「高山」と呼んでいることや，この地域から良質の陶土が採取されたことなどから，本遺跡の周辺に高山窯が所在した可能性も本遺跡の性格を検討する上で考慮する必要がある。すなわち，雪之山窯に関する年代や様相は，おおかた『苗代川のくらし』によりこれまで述べてきたように明らかになってきたが，本遺跡が確実に雪之山窯に従事していた陶工に関する遺跡か，高山窯に起因する資料かの結論は，現在のところ断定できない。

なお，今回，鮫島佐太郎氏の御教示により確認できた雪之山窯跡周辺から採取された陶片や窯道具と本遺跡出土の資料に大きな差異を見出せないことから，本遺跡出土の窯関係の資料は，雪之山窯の稼働期と同一期であると考えられる。また仮に，本遺跡の出土品が高山窯に帰属する資料であったとしても，高山窯と雪之山窯の稼働期は，窯跡周辺採集品との比較から，大きく時間を隔てるものではないと考えられる。

本遺跡出土の遺物は，19世紀後半の苗代川焼の技術的な特徴や有り様を研究するうえで貴重な資料であろう。

（文責　関　明恵）

註

註1　『東市来町郷土誌』では，「雪ノ山窯」，『苗代川のくらし』では「雪之山窯」と掲載されており，本稿では「雪之山窯」で報告する。

註2　『薩摩焼の研究』では，「観音山窯」を「観音窯」と表記している。

註3　橋口亘氏は，「文化三年銘白薩摩染付松竹牡丹文角形酒注をめぐる諸問題」2002『からから』№13の中で，錫器と薩摩焼の類似性について述べている。

註4　渡辺氏は，『日本近世窯業史』1914（大正3年）大日本窯業協会編・学術文献普及会復刻（1991），『明治工業史化学工業篇』1925（大正14年）工業舎，『薩摩焼総監』1934（昭和9年）前田幾千代氏・思文閣復刻（1978）の文献資料を検討している。

註５　『日本近世窯業史』1914（大正３年）大日本窯業協会編・学術文献普及会復刻（1991）からの引用

註６　渡辺芳郎2001ａ「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産（１）－『鹿児島県勧業年報』『鹿児島県統計書』から－」『鹿児島大学法文学部　人文学科論集』53号　pp.61-92

渡辺芳郎2001ｂ「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産（１）－『鹿児島県勧業年報』『鹿児島県統計書』から－」『鹿児島大学法文学部　人文学科論集』53号　pp.61-92

註７　山下慶幸氏は「外国人から見た薩摩焼」の中で，イギリスの外交官アーネスト・サトウが1978（明治11）年２月23日付けで「Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol.6, Part2」（1878）に発表したものを紹介している。

註８　判読については，近世文書研究家の堂満幸子氏の協力を得た。

参考・引用文献

上杉彰紀・出口浩　2000　「串木野羽島窯採集の陶片についての一考察」『からから』№.8　鹿児島陶磁器研究会

大武進　1996　『薩摩苗代川焼新考』

大橋康二　1989　『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社

加治木町教育委員会　1995　『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書１

鹿児島県教育委員会　1983　『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）

鹿児島県資料センター黎明館編　1998　『世界の薩摩』展示図録

加藤唐九郎編　1972　『原色陶器大辞典』淡交社

九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年』九州陶近世磁器学会

財団法人鹿児島共済会南風病院　1978　『竪野（冷水）窯址』南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鮫島佐太郎　1986　『苗代川のくらし』南日本新聞開発センター

新宿区四谷三丁目遺跡調査団　1991　『四谷三丁目遺跡』「別冊江戸遺跡検出のやきもの分類」

前幸男　2001　「平佐新窯出土遺物について」『からから』№.10　鹿児島陶磁器研究会

前幸男・小原浩　2000　『用と美　平佐焼の世界展』「平佐新窯」－天辰地区発掘調査事業（皿山第一地区）概要－川内市歴史資料館

関一之　1999　「五本松窯跡採集資料」『からから』№.6　鹿児島陶磁器研究会

田沢金吾・小山富士夫　1941　『薩摩焼の研究』座右宝刊行会

出口浩　1999　「江戸前期貝目痕付き摺鉢一例」『からから』№.3　鹿児島陶磁器研究会

出口浩　1999　「資料紹介１　平佐焼窯道具」『からから』№.5　鹿児島陶磁器研究会

出口浩　2000　「貝目付薩摩焼と釉瓦の再検討（１）」『からから』№.7　鹿児島陶磁器研究会

橋口亘・上田耕・若松重弘　2000　「串木野市羽島「壺屋が平」表面採取の陶器片」『からから』

橋口亘　2001　「薩摩焼貝目・コマ目考」『からから』№.9　鹿児島陶磁器研究会

橋口亘　2002　「文化三年銘白薩摩染付松竹牡丹文角形酒注をめぐる諸問題－薩摩焼と錫器のデザイン，白薩摩角形酒注の価格・竪野系製品の流通についての一考察－」『からから』№.13　鹿児島陶磁器研究会

東市来町教育委員会　1988　『東市来町郷土誌』

矢部良明他編集　2002　『日本陶磁大辞典』角川書店

山下慶幸　1999　「外国人の見た薩摩焼」『黎明館調査研究報告第12集』　鹿児島県歴史資料センター黎明館

山口丹海　1979　『生活の中の薩摩焼』山口和子

渡辺芳郎　2000ａ　「薩摩焼貝目小考」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』51号

渡辺芳郎　2000ｂ　「貝目再考」『からから』№.8　鹿児島陶磁器研究会

渡辺芳郎　2000ｃ　「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』　第34号　鹿児島県考古学会

渡辺芳郎　2001　「近代鹿児島県における土管生産」『からから』№.10　鹿児島陶磁器研究会

図　　版

遺跡遠景

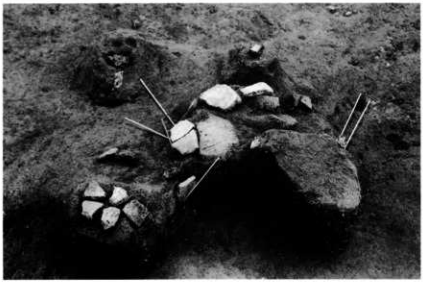
土層断面

集石 1 号

図版　2

集石２号

Ⅳ層土器出土状況



Ⅳ層土器出土状況

土坑３

土坑３断面

礫の集中

図版　4

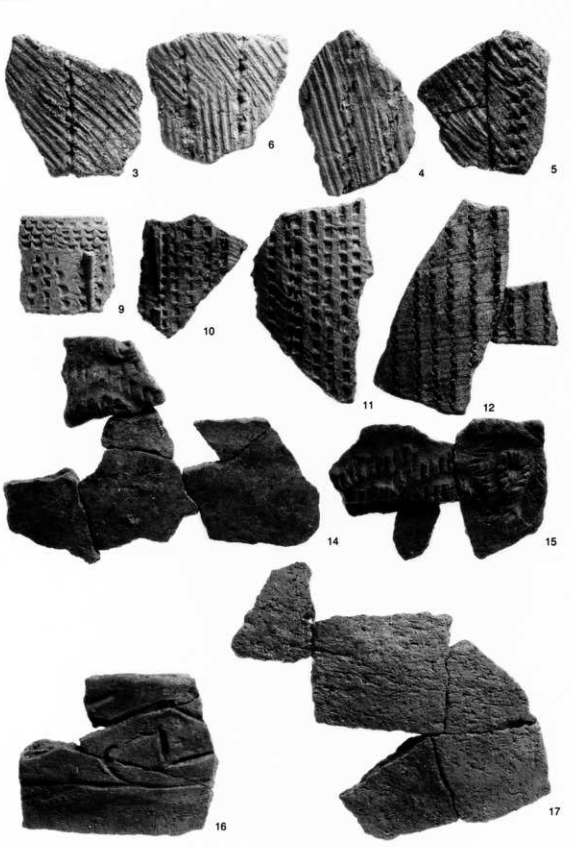
軽石溜まり1

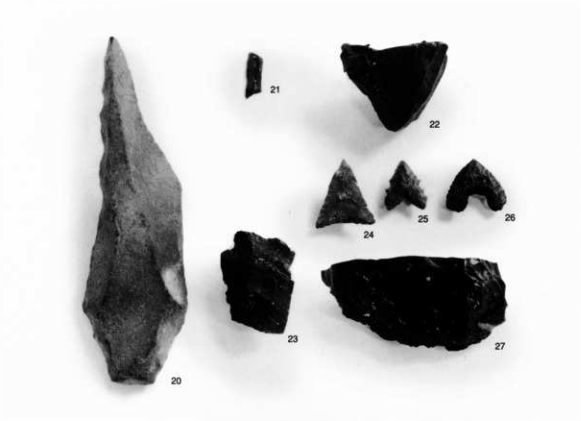
軽石溜まり2

シラス溜まり

13
1
2

図版 6




20
21
22
23
24
25
26
27

29
33
30
32
31
28

図版 8

70

95

96

90

108

105

120

121

124

130
129
126

135
136
138
137

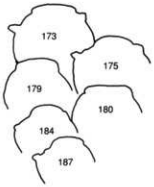
139
141
140

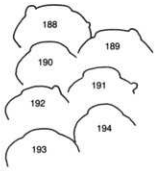
201
199 200

203
204 206

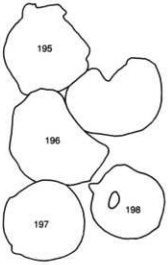
209
210

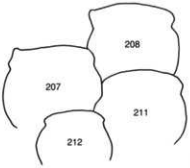
図版 10


173
175
179
180
184
187


188
189
190
191
192
194
193

図版 12





213

218

219
223
220
224
221

226

図版 14

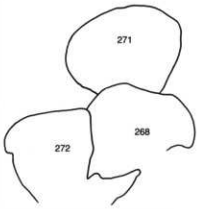
239
240
242
243

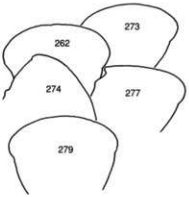
246
244
245

248
247 250
252 249

255
254
256

図版 16





231 230
232

229

234

238

237

図版 18

283

289

287

288

289

図版 20

299

298

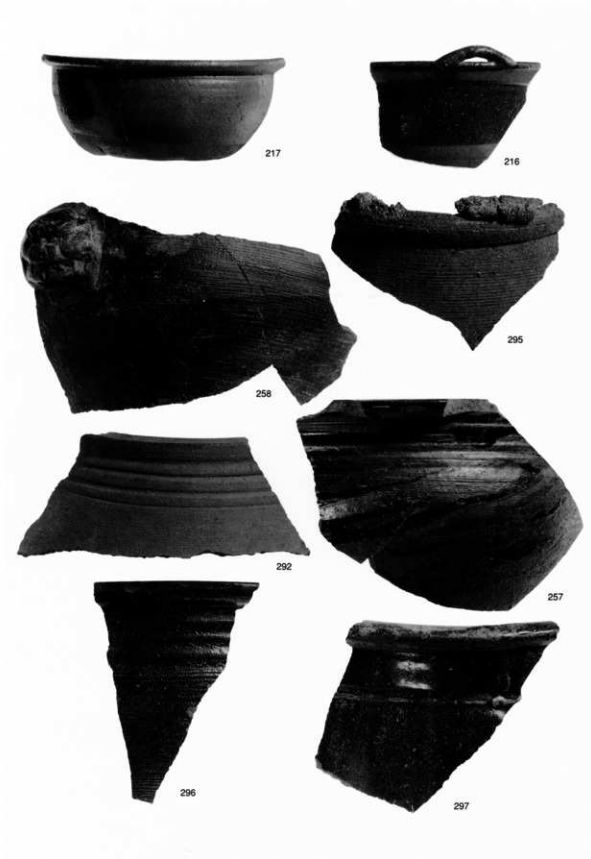
301

303

308
307

311
310
309

図版 22

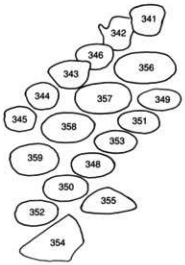


312
313
314

316

315

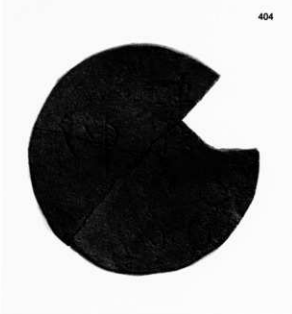
図版 24



400
398
399
402
401
405
403

図版 25

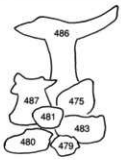
図版 26



420
419
418

421
422

482
475
488

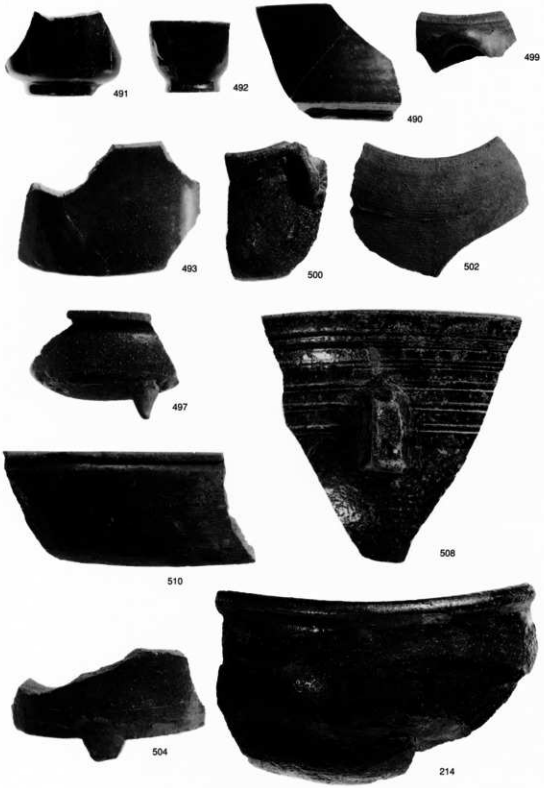

486
487
475
481
483
480
479

図版 28

496　501
498　506
507　505　503

511

516


491
492
490
499
493
500
502
497
508
510
504
214

図版 30

518
526
517
534
519
533
529
528
536
531
527
535
532
520
530
524
521
523
537
522
525

猿引遺跡

第３章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

発掘調査は，測量基準としてまず調査区域内に鹿児島道路実施設計図のセンターラインSTA240とSTA245を結ぶ線を基軸に，南北方向にＡ・Ｂ・Ｃ～，東西方向に１・２・３～，とする10m間隔の調査用区割り（グリッド）を設定して行った。なお，レベル原点は日置郡東市来町美山に所在する水準点（BM10　H＝84,499m）を基準として利用した。

確認調査は，表土を重機（バックホー）により除去した後，地形を考慮して2.4×24m，1.5×14mのトレンチを設定し，人力（山鍬・ジョレン）による掘り下げを行った。調査開始以前は山林であったため，伐採後の樹根がかなり残存しており，遺物包含層まで達している樹根については人力によって除去しながらの掘り下げを行った。その結果，調査区域のＤグリッドより北東側の尾根の先端部については，表土直下にシラスが堆積している状況で，遺物包含層は残存していないと判断した。Ａ～Ｃ区側を掘り下げた結果，旧石器時代ナイフ形石器文化期・旧石器時代細石刃文化期・縄文時代前期の遺物が出土したため，周辺を東西方向に拡張して，遺物包含層の残存範囲の把握・確認に努めた。その結果，尾根の西側部分，800㎡について本調査が必要であると判断した。

本調査は，Ⅲ層以下を各層ごとに掘り下げる形で実施した。遺跡が尾根上に位置し，東西方向は急斜面になっているため，旧石器時代の遺物包含層より上層は基本的に純粋な堆積状況が認められなかった。旧石器時代の遺物包含層については，10×10mグリッドをさらに２×２mグリッドに細分して，人力（ねじり鎌・移植ゴテ）による掘り下げを進め，遺物の検出・写真撮影・実測作業・遺物の取り上げを行った。旧石器時代の遺物包含層であるⅦ層は，急斜面のため堆積が安定していない部分も若干みられたが，調査区のほぼ中央の尾根から東へ下る追状のくぼみに残存しており，結果的には，この包含層を追いかけて東へ下りながら掘り下げる形となった。追状のくぼみ以外の部分では，表土直下にシラスが堆積している部分もあった。また，Ⅷ層からⅨ層上面にかけて石英の自然礫が散在して出土する状況が認められた。

遺構は，旧石器時代ナイフ形石器文化期のものと思われる礫群が１基，Ｃ－３区のⅧ層上面で検出された。この礫群は安山岩などの石材のほか，石英の自然礫を数点利用している。

遺物は，旧石器時代ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・剥片・石核などが出土した。また，旧石器時代細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。旧石器時代の遺物は，調査区内のほぼ中央を東へ下る追状のくぼみに残る包含層から出土する状況が特徴的である。

縄文時代の遺物は，縄文時代前期の曽畑式土器片が２点，尾根がほぼ平坦となるＢ－３区から出土している。また，同区より縄文時代中期～後期初頭のものと思われる土器片が３点，Ｃ－２区より同時期のものと思われる土器片が１点出土している。縄文時代の遺構は検出されておらず，土器以外の遺物は磨製石斧と敲石が出土したのみである。

第２節　遺跡の層位

遺跡内の地層は遺跡が尾根地形の微高部に位置しており，東側と西側は急斜面になっているため，場所により層位にかなりの相違が見られる（北側部分は，表土直下はシラス）が，基本的に以下のように区分できる。

第１図　基本土層図

Ⅰ層は黒褐色の腐植土で，耕作土である。層厚は約５cmである。

Ⅱ層は黄褐色で粘質の弱い土層である。層厚は約20cmである。

Ⅲ層の下部は，約6,300年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火砕流）に対比される黄橙色軽石（Ⅲｂ）で，上部はその火山灰に有機質が混在したもので，粘質が弱く，径２㎜前後の軽石を含む黄橙色火山灰（Ⅱａ）である。上部に縄文時代の遺物が包含されている。層厚は約20cmである。

Ⅳ層は黄褐色のやや灰色を帯びた硬質の火山灰で，比較的細粒である。層厚は約20cmである。

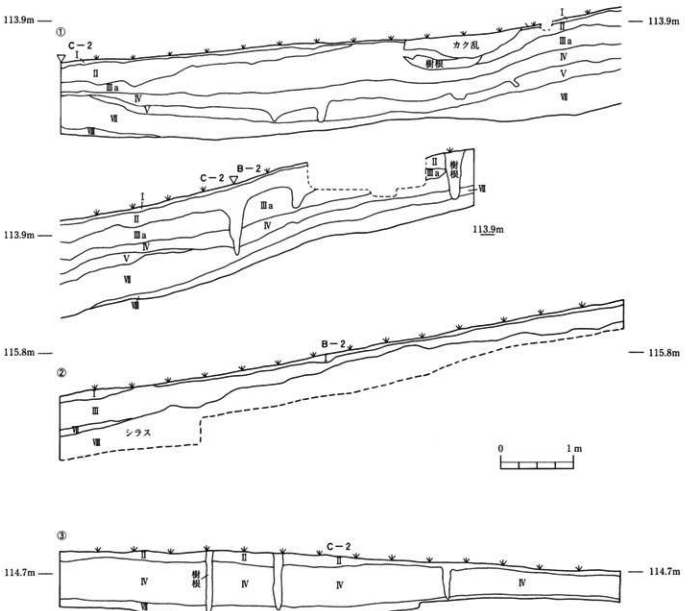
Ⅴ層は濃い黒色でやや粘質が強い。層厚約15cmである。

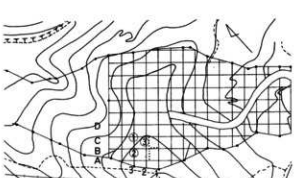
Ⅵ層は薩摩火山灰（Ｐ14）と呼ばれる約11,500年前の桜島起源の火山灰である。Ⅴ層下部にわずかに認められる。

Ⅶ層は極めて微粒で粘質が強い暗茶褐色粘質火山灰で，旧石器時代の遺物包含層である。層厚約20～40cmである。

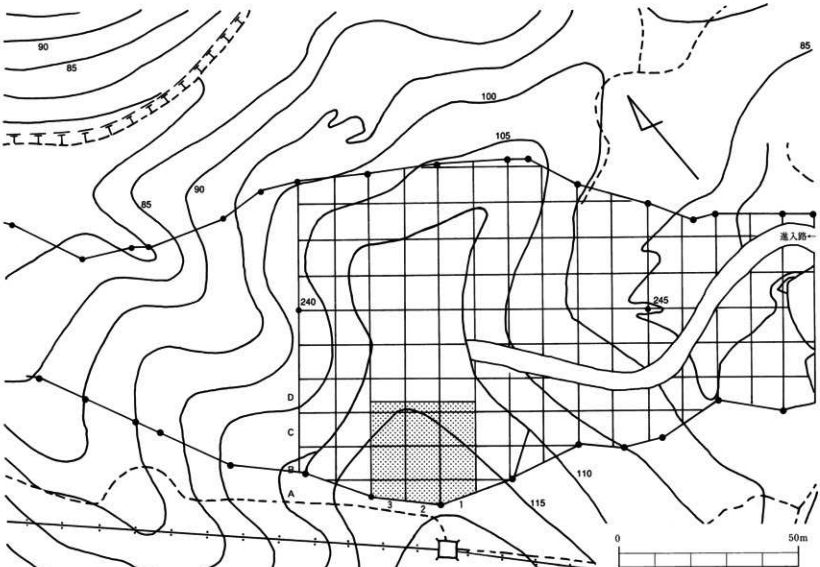
Ⅷ層は比較的細粒の黄白色土で，層厚約20cmである。

Ⅸ層は安山岩腐植土（砂礫を含む）である。

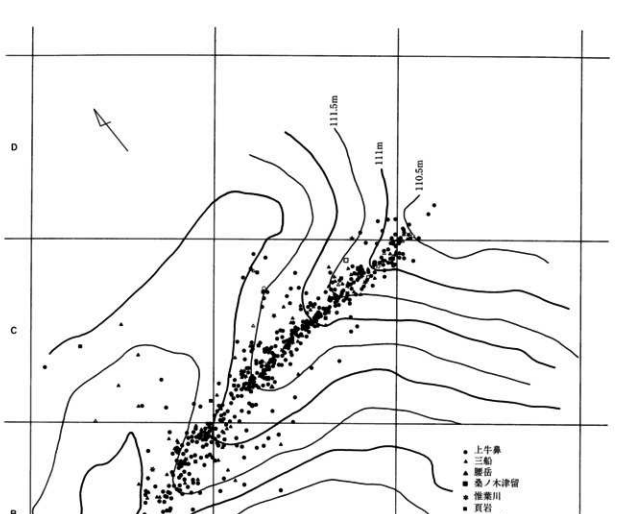

113.9m
①
C－2
I
II
IIIa
IV
V
VII
VIII
カク乱
樹根
113.9m
C－2
B－2
113.9m
115.8m
②
B－2
III
VI
VII
VIII
シラス
115.8m
0
1 m
③
114.7m
C－2
II
IV
樹根
VII
114.7m


D
C
B
A
3－2

第２図　土層断面図



第3図　グリッド配置図



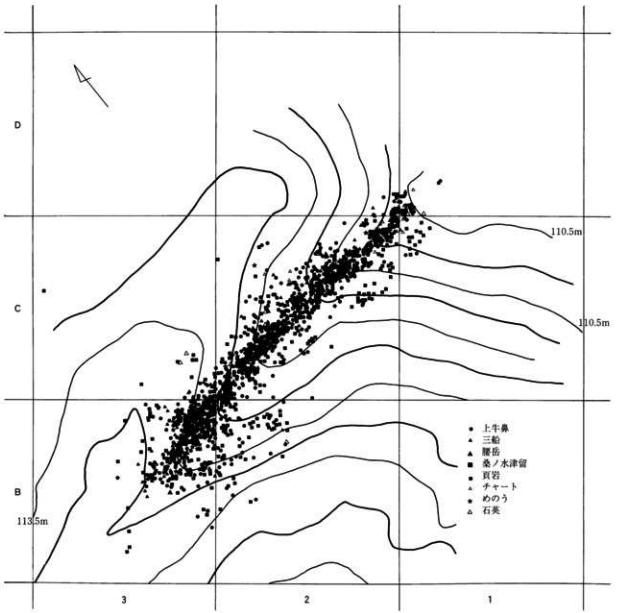
第4図　石材別出土状況（剥片）

第3節　旧石器時代

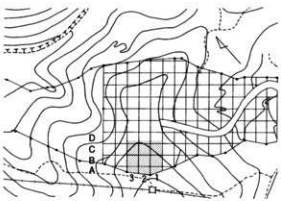
1　調査の概要

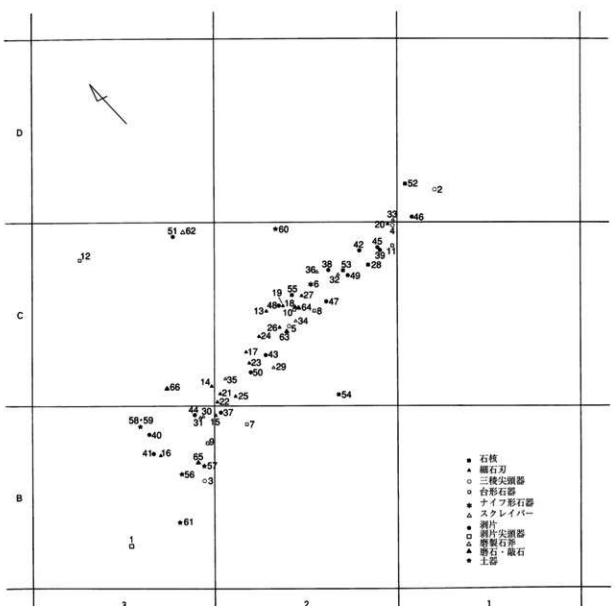
旧石器時代の遺構・遺物は，標高113～115mの尾根状台地の迫状になった窪みに包蔵されていた。傾斜地のため，ナイフ形石器文化と細石刃文化がうまく別離できなかったが，同地点に二つの文化層が確認された（第4図～第6図）。遺構はⅧ層上面の傾斜面上部で検出された。1m×0.8mの反意に60個の角礫を用いたもので，ナイフ形石器文化の時期と考えられる。

石器は，剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・剥片・石核・敲石・磨石等が出土した。石材は豊富で黒曜石（三船・上牛鼻・桑ノ木津留・西北九州系），頁岩，琥珀，チャート，安山岩，砂岩などがみられた。



第５図　石材別出土状況（破片）



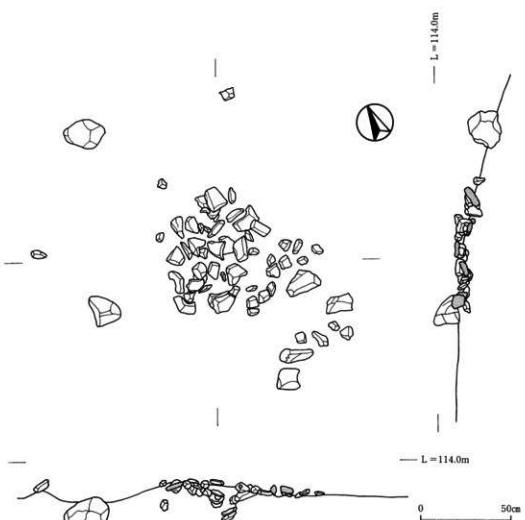


第6図　石器・土器レイアウト

2　遺　構

礫群（第７図）

礫群は，尾根部が南から北へ緩やかに下りはじめるＣ－３区のⅧ層上面で１基検出された。60個の角礫によって構成される。中心部より北と西に１個ずつ，径20cm程度の礫が離れているほか，南側に７個の礫がまとまって出土している。石材は，凝灰岩・安山岩等であるが，数点石英の礫が含まれている。周辺では，Ⅷ層からⅨ層にかけて石英の自然礫が散在して出土しており，これらを礫群に利用したものと思われる。火熱による赤化をうけているものも数点みられたが，熱破砕を受けたものは明確には観察されなかった。この礫群に伴う遺物は出土しておらず，礫群内において炭化物や掘り込みも確認できなかったが，層位より旧石器時代の礫群と判断した。



第７図　礫群

3 遺 物

Ⅶ層を中心として，総数2,226点が出土した。石器は，剥片尖頭器１点，縦長剥片１点，三稜尖頭器４点，ナイフ形石器１点，台形石器６点，細石刃15点，細石刃核１点，石核４点，スクレイパー８点が出土しており，これらを図示した。また，剥片は573点出土した中から，加工痕のあるもの，使用痕のあるものを合わせて13点を図示した。石材は，黒曜石，頁岩，琥珀，チャート，安山岩などである。このうち，黒曜石は肉眼観察により，在地系の三船，上牛鼻，桑ノ木津留産と西北九州系の腰岳，針尾，椎葉川産のものに区別した。

出土状況は，第４図～第６図のように調査区のほぼ中央にあたる尾根部分から東へ下る迫状のくぼみに包含層が残存しており，このくぼみ内から遺物が出土している。

剥片尖頭器・三稜尖頭器（第８図１～５）

１は剥片尖頭器である。安山岩の縦長剥片を素材としている。剥離面と調整面がみられるが一面は先端部のみを調整しており，基部は欠損している。

２は上牛鼻産の黒曜石を素材にした三稜尖頭器である。一面に剥離面をもち，二面に調整剥離がみられるもので先端部を鋭利に調整している。

３も上牛鼻産とみられる灰色の黒曜石を素材にしたもので，横長剥片を利用し，二面を調整剥離によって成形し，基部調整も施されている。先端部は欠損している。断面は三角形を呈する。

４は頁岩の横長剥片を利用したもので，粗いタッチで基部・側面を調整している。断面は略三角形である。先端部は鈍い。

５はチャートを素材にしたもので，横長剥片を利用し，二面に調整剥離がみられるものである。先端部は鈍く，基部調整は施されていない。

ナイフ形石器・台形石器（第８図６～12）

６は上牛鼻産の黒曜石を用いた小型のナイフ形石器である。横長剥片を素材にし，刃部・基部調整を施し，背面及び基部は丁寧なブランティングにより整形を行っている。刃部には使用痕が認められる。

７～12は台形石器である。７は上牛鼻産の大型剥片を横位に利用し，両側縁は丁寧なブランティングにより整形されているものである。

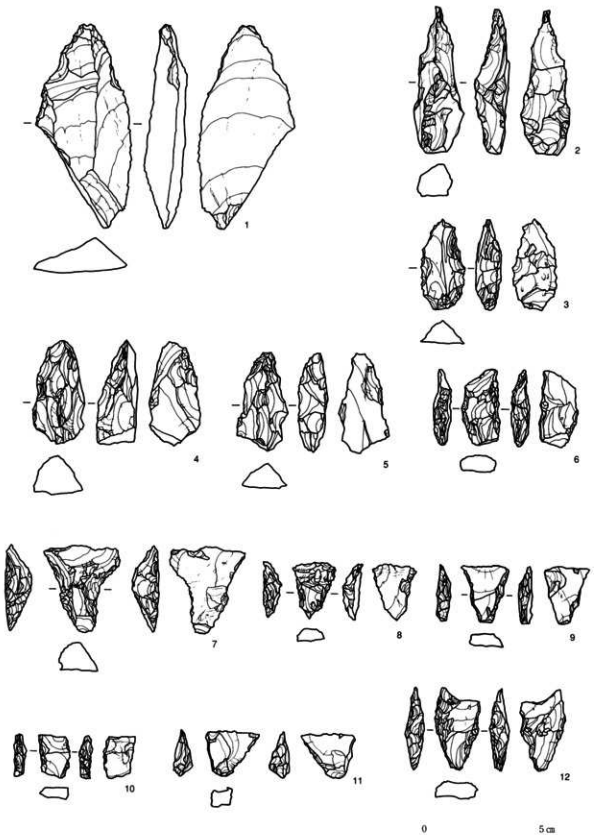
11・12は三船産の黒曜石を素材にしたもので，やはり両側縁を丁寧なブランティングにより整形を行っている。12は刃部が欠損している。

細石刃・細石刃核（第９図13～28）

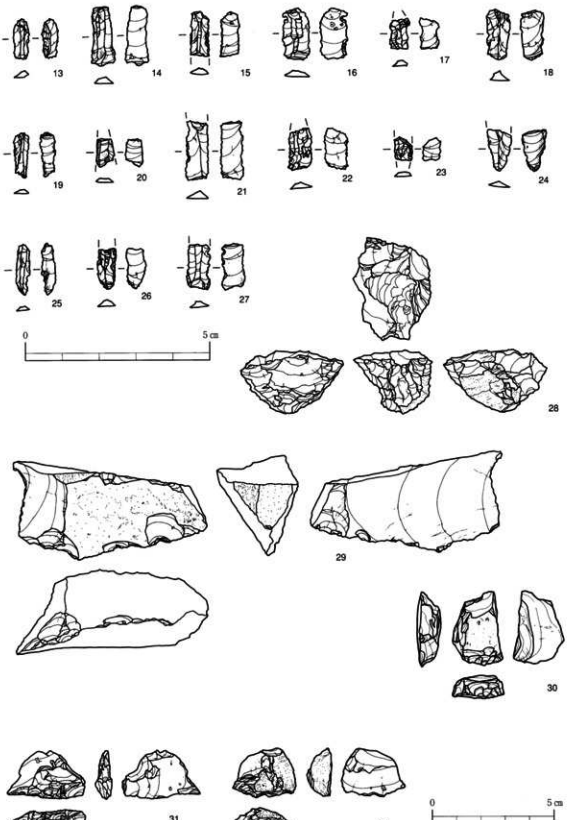
13～27は細石刃で黒曜石（針尾１点，腰岳６点，上牛鼻６点，三船２点）を用いている。

頭・中間部６点，中間部５点，中間・尾部４点である。

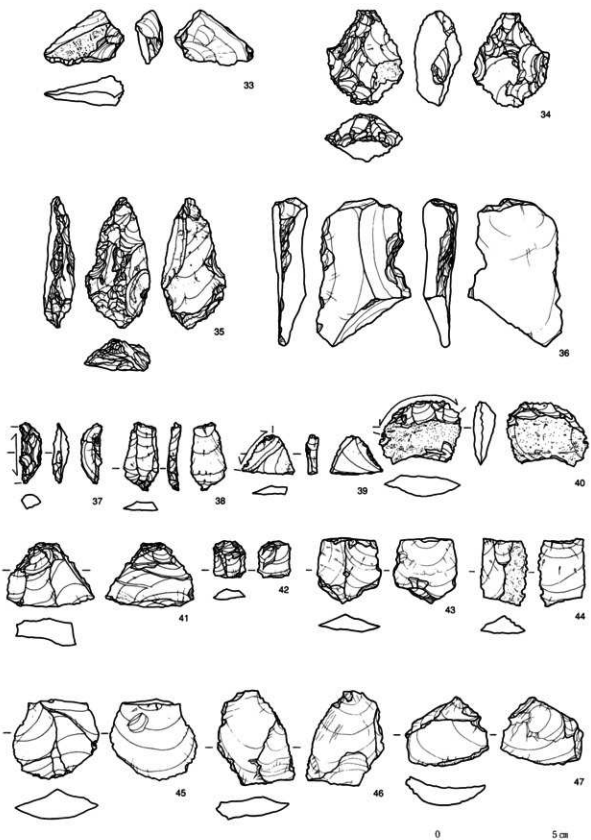
28は細石刃核である。三船産の黒曜石を用いている。厚みのある剥片を素材にし，側面調整がみられる。細石刃剥出は顕著でない。



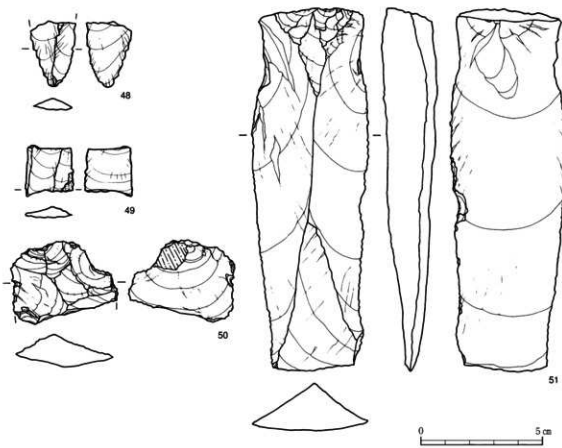
第8図　旧石器（1）



第9図　旧石器（2）

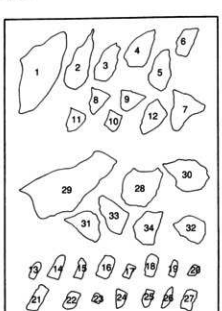


第10図　旧石器（3）

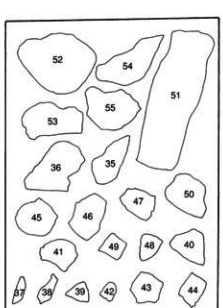


第11図　旧石器（4）

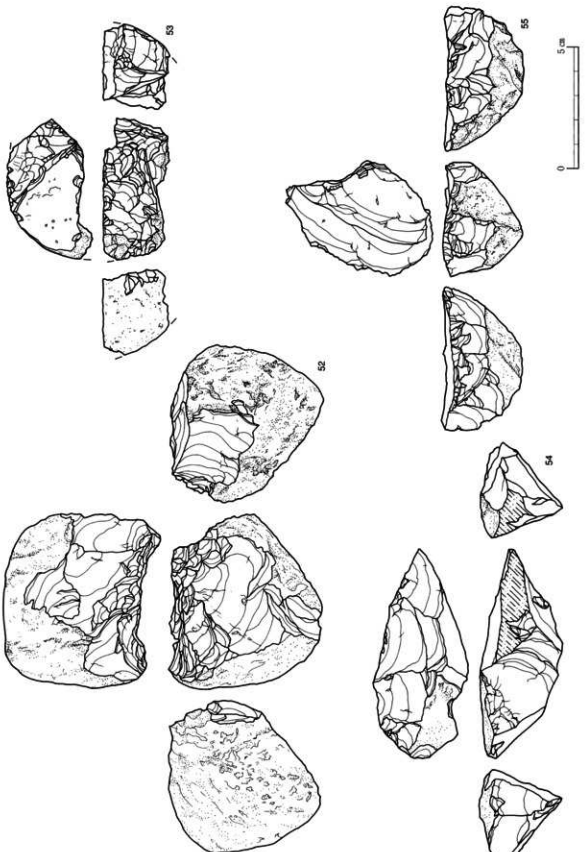
図版4



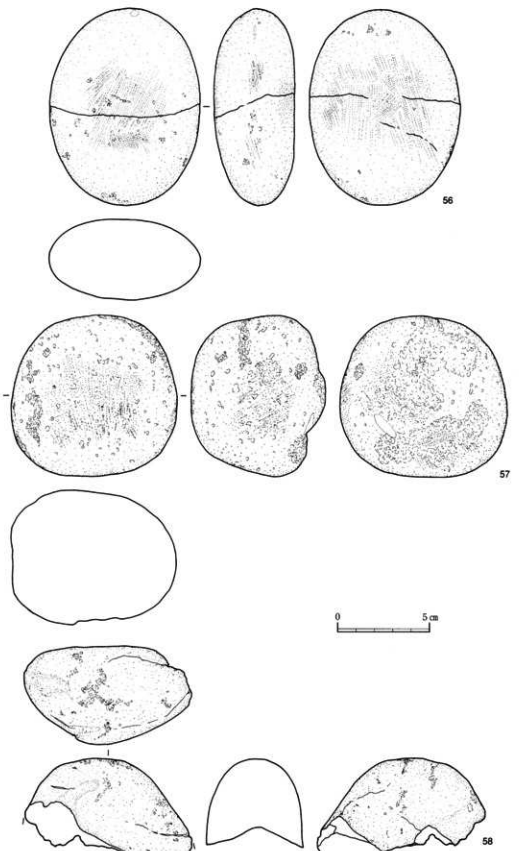
図版5



第12図　図版石器遺物番号



第13図　旧石器（5）



第14図　旧石器（6）

スクレイパー（第９図29～36）

29は厚みのある頁岩製の剥片を素材に用いたもので，側縁にブランティングを施し，先端部には抉りを入れたいわゆるノッチのあるスクレイパーである。片側縁部は欠損しており，一部に自然面を残している。

30・31は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いたもので，片側縁部にブランティング加工を施している。32～34も上牛鼻産の黒曜石を素材にしたもので，厚みのある剥片を利用し，ブランティング加工がみられるものである。一部に自然面を残している。

35は三船産の黒曜石を素材にし，片側面にブランティングを施したものである。36は頁岩を素材にした縦長剥片で，側面に抉りを入れたスクレイパーである。

加工痕のある石器（第10図37）

37は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いたもので，側縁部に調整痕のみられるものである。破損品であるため全体の把握ができないため，加工痕のある石器として分類した。

剥片（第10･11図38～51）

38は三船産の黒曜石を用い，側縁部に使用痕のみられる剥片である。

39は安山岩，40は上牛鼻産の黒曜石を用いた側縁部に加工痕のみられる剥片である。

41～50は剥片である。41は椎葉川産黒曜石，42は桑ノ木津留産の黒曜石，43・44は上牛鼻産の黒曜石，45・46は琥珀，47～50は頁岩を用いている。

52は，断面三角形となる安山岩製の縦長剥片である。基部に抉りがあり，側縁部に使用痕が認められる。

石核（第13図52～55）

52は上牛鼻産の黒曜石礫の一端を加撃して打面を作り，３面の剥片剥出面が見られる。

53は琥珀を用いている。打面に一部欠損が見られる。剥片の剥出が２面に認められる。

54は頁岩製，55は上牛鼻産の黒曜石製の石核である。

磨石・敲石（第14図56～58）

56は砂岩の円礫を素材に用いた磨石である。中央部表裏面に研磨痕が顕著にみられる。

57は安山岩の円礫を用いた磨石で側面及び片面に敲打痕が認められる。

58は安山岩の円礫を用いた磨石であるが欠損している。一部敲打痕も認められ，敲石の使用も考えられるものである。

第１表　旧石器　石器分類表（１）

番号	挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高(m)	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1		剥片尖頭器	安山岩	B−3	Ⅶ上	3275	114.11	5.4	2.5	1.0	11.61	
2		三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	D−1	Ⅶ	3288	109.9	4.0	1.3	0.8	3.48	
3		三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	2434	113.56	2.4	1.3	0.7	1.83	
4		三稜尖頭器	頁岩	C−2	Ⅶ	3199	110.99	2.8	1.4	1.1	4.04	
5		三稜尖頭器	チャート	C−2	Ⅶ	2515	112.46	2.7	1.2	0.8	2.41	
6	8	ナイフ形石器	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	3184	112.23	2.1	0.9	0.4	1.12	
7		台形石器	黒曜石上牛鼻	B−2	Ⅶ	3478	112.86	2.3	2.1	0.7	2.19	
8		台形石器	黒曜石三船	C−2	Ⅶ	3130	112.41	1.3	1.2	0.4	0.51	
9		台形石器	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	2433	113.56	1.5	1.3	0.3	0.55	
10		台形石器	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	3387	112.38	1.2	0.7	0.3	0.41	
11		台形石器	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	2926	110.83	1.4	1.3	0.4	0.64	
12		台形石器	黒曜石三船	C−3	Ⅰa	54	112.61	2.2	1.2	0.5	1.20	
13		細石刃	黒曜石針尾島	C−2	Ⅶ	358	112.97	1.0	0.4	0.2	0.09	頭・中部
14		細石刃	黒曜石腰岳	C−3	Ⅶ	1000	113.52	1.6	0.5	0.2	0.19	頭・中部
15		細石刃	黒曜石腰岳	B−2	Ⅶ	1700	113.52	1.2	0.5	0.2	0.10	頭・中部
16		細石刃	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	1074	113.95	1.4	0.7	0.2	0.22	頭・中部
17		細石刃	黒曜石三船	C−2	Ⅶ	1245	113.18	0.8	0.4	0.2	0.08	頭・中部
18		細石刃	黒曜石三船	C−2	Ⅶ	3383	112.35	1.3	0.7	0.3	0.25	頭・中部
19		細石刃	黒曜石腰岳	C−2	Ⅶ	187	112.52	1.2	0.4	0.1	0.04	中間部
20		細石刃	黒曜石腰岳	C−2	Ⅶ	3326	110.88	0.8	0.4	0.1	0.04	中間部
21	9	細石刃	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	457	113.50	1.5	0.6	0.2	0.23	中間部
22		細石刃	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	464	113.56	1.0	0.6	0.2	0.17	中間部
23		細石刃	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	2456	113.12	0.6	0.5	0.1	0.55	中間部
24		細石刃	黒曜石腰岳	C−2	Ⅶ	744	113.00	1.1	0.6	0.2	0.08	中・尾部
25		細石刃	黒曜石腰岳	C−2	Ⅴ	432	113.4	1.4	0.3	0.1	0.05	中・尾部
26		細石刃	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	1264	112.72	1.1	0.5	0.2	0.11	中・尾部
27		細石刃	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	3367	112.31	1.2	0.6	0.2	0.15	中・尾部
28		細石刃核	黒曜石三船	C−2	Ⅴ	1500	111.68	2.9	2.1	1.7	8.21	
29		ノチのあるスクレイパー	頁岩	C−2	Ⅶ	733	113.01	5.5	2.6	1.8	23.03	
30		スクレイパー	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	815	113.69	2.0	1.2	0.6	1.85	
31		スクレイパー	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	1132	113.66	2.0	1.2	0.4	0.95	
32		スクレイパー	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	2228	111.80	1.7	1.2	0.7	1.31	
33	10	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	D−2	Ⅶ	3318	110.83	2.0	1.4	0.7	1.63	

第２表　旧石器　石器分類表（２）

番号	挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高(m)	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
34		スクレイパー	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	3248	112.42	2.4	2.2	1.3	5.45	
35		スクレイパー	黒曜石三船	C−2	Ⅶ	446	113.44	3.5	1.7	0.8	3.41	
36		スクレイパー	頁岩	C−2	Ⅶ上	2787	111.67	4.1	2.5	0.9	7.97	
37		加工痕のある石器	黒曜石上牛鼻	B−2	Ⅶ	1659	113.49	1.7	0.5	0.5	0.31	
38		使用痕のある剥片	黒曜石三船	C−2	Ⅶ	1818	111.99	1.7	0.9	0.3	0.49	
39		加工痕のある剥片	安山岩	C−2	Ⅶ	2014	111.16	1.1	1.4	0.3	0.48	
40	10	加工痕のある剥片	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅷ	680	114.09	2.2	1.6	0.6	1.91	
41		剥片	黒曜石椎葉川	B−3	Ⅳ	932	114.06	2.4	1.6	0.7	2.65	
42		剥片	黒曜石桑ノ木津留	C−2	Ⅶ	1997	111.44	1.0	0.8	0.4	0.35	
43		剥片	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	276	112.95	1.6	1.7	0.5	1.39	
44		剥片	黒曜石上牛鼻	B−3	Ⅶ	846	113.73	1.5	1.2	0.5	1.03	
45		剥片	琥珀	C−2	Ⅶ	2259	111.17	2.4	2.2	0.8	3.68	
46		剥片	琥珀	D−1	Ⅶ	2026	110.50	2.8	1.8	0.5	3.14	
47		剥片	頁岩	C−2	Ⅶ	1408	112.29	2.2	1.6	0.6	2.28	
48		剥片	頁岩	C−2	Ⅶ	371	112.76	1.7	1.3	0.3	0.55	
49	11	剥片	頁岩	C−2	Ⅶ	1957	111.76	1.3	1.2	0.3	0.55	
50		剥片	頁岩	C−2	Ⅶ	2071	113.11	2.9	1.9	0.8	4.92	
51		縦長剥片	安山岩	C−3	Ⅸ	1	112.62	9.4	3.2	1.4	43.85	
52		石核	黒曜石上牛鼻	D−1	Ⅶ	1883	110.71	5.0	3.9	4.0	87.53	
53	13	石核	琥珀	C−2	Ⅶ	2000	111.77	3.8	2.0	1.6	17.13	
54		石核	頁岩	C−2	Ⅶ上	3272	113.36	5.8	2.7	2.1	22.05	
55		石核	黒曜石上牛鼻	C−2	Ⅶ	3108	112.46	3.9	2.8	2.0	21.03	
56		磨石	砂岩	B−3	Ⅶ	2136	113.65	7.0	5.3	3.0	166.00	
57	14	敲石	安山岩	C−2	Ⅶ	1261	112.63	5.7	5.3	5.0	238.00	
58		磨石	安山岩	C−2	Ⅶ	3378	112.34	5.8	4.1	3.2	101.00	

第４節　縄文時代

（１）遺物

①土器

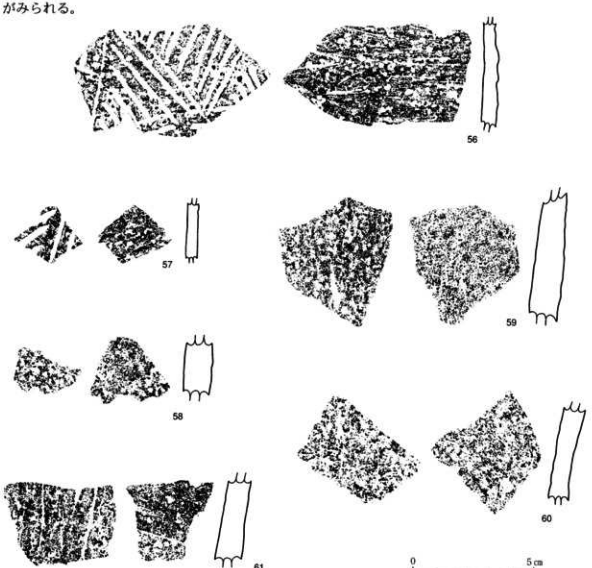
Ｂ－３区より曽畑式土器片が２点出土している。また，同じ区より中期末～後期初頭と思われる土器片が３点，Ｃ－２区より中期末～後期初頭と思われる土器片が１点出土している。土器片の出土はこの６点のみであり，すべてを図示した。その出土状況は第６図のようであった。

59は斜位，横位の沈線の組み合わせで文様を構成している。内面はナデにより調整されており，胎土に石英・滑石を含む。

60も斜位の沈線で文様を構成している。内面はナデによる調整がなされており，胎土に石英・滑石を含む。曽畑式土器片である。

61～63は胎土に石英・角閃石を含み，内面はナデによる調整がなされている。

64は胎土に石英を含む。内面はナデにより調整されている。外面には調整痕と思われる痕跡がみられる。



第15図　出土土器

第３表　土器観察表

番号	挿図	部位	出土区	層	遺物番号	標高	色調	焼成	胎　土	内面調整	備考
59		胴部	Ｂ－３	Ⅲａ	154	114.56	赤褐色	良好	石英・滑石	ナデ	
60	14	胴部	Ｂ－３	Ⅱ	152	114.75	赤褐色	良好	石英・滑石	ナデ	
61		胴部	Ｂ－３	Ⅱ	167	114.23	赤褐色	良好	石英・角閃石	ナデ	
62		胴部	Ｂ－３	Ⅱ	167	114.23	赤褐色	良好	石英・角閃石	ナデ	
63	15	胴部	Ｃ－２	Ⅱ	172	113.18	暗赤褐色	良好	石英・角閃石	ナデ	
64		胴部	Ｂ－３	Ⅲａ	179	114.85	赤褐色	良好	石英	ナデ	

②石器

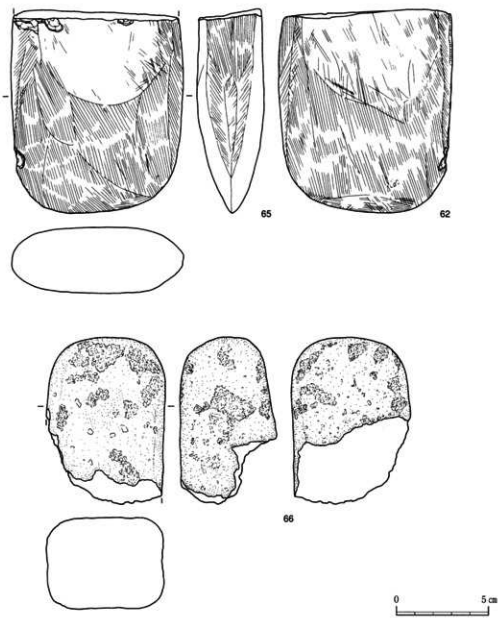
縄文時代の石器は，磨製石斧１点，敲石１点の計２点が出土している。

65はホルンフェルスの細長い礫を素材とした両刃の磨製石斧である。全面及び側縁部に研磨が施され，刃部付近の研磨は入念で，蛤刃である。出土層位は縄文時代の層が削平されているところから旧石器層からの出土であったが，遺物の特徴により縄文後期のものと想定される。

66は安山岩棒状円礫を素材に用いた敲石である。下端部は欠損しているが上端部に敲打痕がみられる。

第４表　縄文　石器分類表

番号	挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高(m)	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
65	16	磨製石斧	ホルンフェルス	Ｃ－３	Ⅱ	2	112.79	7.3	6.1	2.3	190.0	
66		敲石	安山岩	Ｃ－３	Ⅲａ	142	114.15	6.3	3.7	2.4	76.0	



第16図　縄文石器

第４章　まとめ

猿引遺跡では，旧石器時代～縄文時代前期の遺構・遺物がみつかった。東市来町では南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査により，旧石器時代の遺跡が発見され始め，今では松元町・伊集院町と並んで県内でも有数の旧石器時代の遺跡群となっている。

隣接する池之頭遺跡は，標高80～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し，ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土している。約２km程北西部にある伊作田には今里遺跡や向椎城跡・堂園平遺跡等が所在する。いずれもナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土し，特に今里遺跡では比較的小規模な発掘にも関わらず100点を超える細石刃核が出土し，分類・編年等もでき，今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。堂園平遺跡は伊作田の遠見番所から下がる斜面の裾野にあり，標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化期の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土した。

この様な歴史的環境の中，猿引遺跡は遺物の出土状況が特殊であった。

旧石器時代の遺構・遺物は，標高113～115mの北側に張り出す尾根状の台地中央部で多く出土した。東西に走る幅５mで長さ25mの迫状になった窪みにナイフ形石器文化期と細石刃文化期の遺物が埋蔵されていた。迫状であり，また，傾斜地のため二文化期の分類はうまく分離できなかった。

遺構では，礫群が検出された。屋根部が南から北へ緩やかに下がり始めるⅧ層上部で検出され，南北に長軸をとる1.2m×0.8mの範囲に60個の凝灰岩・安山岩を主とする角礫が集中して出土した。礫群内では炭化物や掘り込み等は検出されなかった。この時期の礫群は松元町仁田尾遺跡で多く検出され，伊集院町や東市来町の遺跡でも発見されている。

出土遺物は約2200点で，そのうち石器が41点で，剥片573点，砕片約1500点でその他は礫などであった。石器の器種別構成は，剥片尖頭器１点（３％）・縦長剥片１点（３％）・三稜尖頭器４点（10％）・ナイフ形石器１点（３％）・台形石器６点（15％）・細石刃15点（36％）・細石刃核１点（３％）・石核４点（10％）・スクレイパー８点（20％）が出土している。

石材は，黒曜石・頁岩・琥珀・チャート・安山岩等であるが，主となるのは黒曜石である。黒曜石は細石刃の素材として，西北九州の腰岳産がみられ，一部剥片にも腰岳・針尾産のものもみられるが，大部分は県内産の黒曜石であった。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター「池之頭遺跡」埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32）2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター「今里遺跡」埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）2002

図　　版

土層断面

礫 群

図版 2

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

作業風景

図版 4

旧石器　石器（1）　　実測番号　P187

旧石器　石器（2）　　実測番号　P187

あ と が き

雪山遺跡・猿引遺跡は，旧石器時代，縄文時代，そして近世・近代と各時代それぞれに貴重な成果を残す遺跡である。特に本書の中心をなす雪山遺跡の近世・現代の遺物については，19世紀後半の苗代川焼を解明する貴重な資料である。

「こんなことならもっと昔のこと（苗代川の歴史）を聞いておけばよかった。」と気さくにいろいろなお話をしてくださった鮫島佐太郎氏の存在は計り知れない。失礼を顧みず何度も伺いお話を聞かせていただいたが，「暖かくなったら窯跡へ一緒に行こう。」と語りかけてくださった笑顔は忘れられない。苗代川焼の持つ様々な歴史を垣間見る気がした。

最後になったが，報告書刊行までの間多くの方々の御指導・御協力をいただいた諸氏・諸団体にこの場をかりて，深く感謝申し上げたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
（伊集院IC～市来IC）
雪山（ユキヤマ）遺跡
猿引（サルビキ）遺跡
発行日　2003年３月20日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461　鹿児島県国分市上ノ段1175番地１
TEL0995-48-5811
印刷所　濱島印刷株式会社
〒891-0122　鹿児島市南栄３丁目１番地
TEL099-268-6191

【正誤表】

（誤）第１図　伊集院IC～市来IC間遺跡位置図　番号もれ

　　第３図　周辺遺跡位置図　番号もれ

（正）

第１図　伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間遺跡位置図

第３図　周辺遺跡位置図（1／25,000）